はれしを歎けるにぞと、サイキーはおのがやさしき心に引きくらべてかく思ひければ、年頃腹惡しと思ひし二人の姉のそゞろになつかしくて、その夜彼の戀人の來るを待ち、たゞ一目姉上に會はせてと强ひて請ふ。明くる朝彼の西風の神ゼフィラス二人の姉を此の園へと吹き下す。二人は想ひもかけずサイキーの命全くてかくも幸ある樣を見るより驚くことと大方ならず、はては、そゞろに嫉ましと思ひなりぬ。かくて不思議の事よとて、それよ彼れよと物問ひすること限りなければ、ゼフィラスは秘密の漏れなんを恐れて二人をもとの岡へと吹き上げぬ。

數日の後サイキー又姉を見んことを請ふ。ゼフィラス又二人を園に連れ來る。二人は愈々嫉みを增し、相謀りて代る〳〵妹に說きて曰ふ、「こゝの主は正しく翼ある蛇にして、日暮がた山の上より玆に下り來るを見し者一人二人に止まらず。今御身に情ありと見ゆるは、やがて御身を取り食はんたくみと知らずや。正なきものならで其の姿を見らるゝを恐るゝ

ことやあるべき。吾等二人は御身よりも年長けて多くの事を知れり。惡しくは勸めじ、こゝに鋭き匕首あり、今宵彼れの寐入りたらんを見計り、燈火を照らしてその姿を見よ。疑の如あらばとく彼れを刺して禍を免れよと。かく敎へて一口の匕首を渡し、二人は風伯に伴はれて歸り行きぬ。無邪なるサイキーが胸にも道がに疑の雲起りて迷ひは果てなくなりぬ。怪しうもあらぬ姿を吾に隱すことやあるべき、翼ありて夜毎に空より飛び來るは何故ぞ、歩む折ふし敷石のサラ〳〵と鳴るが如きは何ぞ。かく疑ふに不思議の事は限り無きまでさはなれば、とやせんかくやと思ひ惱める間に日ははや暮れて彼の戀人既に來りぬ。爽やかなるその聲、やさしきその言葉もけふは常の如く嬉しとも思はず、心地惱ましければとて獨りうち臥するに、彼れもあなたの室に去りぬ。サイキーは寐息を候ひ、燈火を照らし彼の匕首を手にして忍び寄りつ。扉は開きぬ。かざせる光りにすかし見れば、あやしの蛇性と疑ひしは若き愛の神なる美し

きエロス(キューピッド)にして、黄金の髪ゆるくちゝれて額にかゝり、身を被へる二つの羽根は蝶の衣よりも輕く呼吸の度毎に柔らかに上下せり。臥榻の下に輝げるは彼の神秘の弓矢にてやあらん。サイキーはその身の行ひを恥ぢて、思はず匕首を取り落せしが、エロスは尚ほ目覺めず。戀の矢とはこれにやと彼の黄金の矢を取り上げさまに不圖その指を傷つくれば、忽ちそゞろの心地になりて、燈火をさしよせつつ恍惚としてエロスの顏を眺むるに、手先あやしくふるひて熱き油の一滴エロスの肩に落ちぬ。エロスは驚き目覺めて「咄」と一聲み空をさして飛び去りしと見るまに、今までありたる宮殿も花園も忽ち消え失せてサイキーたゞ一人曠野の中にのこされつ。

少女は驚き悲みてエロスの後を尋ぬれども得ず、泣き〳〵てギーナスの殿堂に至り御兒に過はしめたまへと祈る。されどもギーナスの怒り容易くは解けず、神罰としてサイキーに難事を命ず。先づ大麥、小麥、稗、粟な

どの混糅せる鳩の餌を數多もて來させ、サイキーに命じて夕べまでに一粒づゝそれ〴〵に選り分けしむ。サイキーやがて手を下せども如何ともする能はず。此時無數の大蟻匂ひ來りサイキーを助けて穀物を選り分けゝる程に、黄昏までには悉くに成し了へつ。ギーナス來り見ていたく驚きしが、次ぎの朝又サイキーを河の陲りに連れ行き、對岸の森に遊べる野羊の金毛を取り來れと命ず。サイキー乃ち河に入らんとする時傍らなる蘆荻おのづから聲を發し止めて曰ふ「今羊になる近づきそ。彼等日中は猛獸の如し。夜に入りてその眠りたらん後ち、行きて落ちたる金毛を拾へ。」と。サイキー之れに從ひ暮るゝを待ちて河を渡り、金毛數多を得て之れをギーナスに呈す。されどギーナスの怒り尚解けず、又一つの壺を與へ、山の上なる忘非といふ泉の水をくみ來らしむ。サイキー壺を携へて山に登るに、泉は高き岩の上より湧きて落ちつゝ、聲鋭く「避けよ、汝は殺されん〴〵」と叫ぶ。驚きてあたりを見れば泉の左右に大なる洞窟あ

りて怖ろしき火龍之れに住めり。サイキー足戰きて近づく能はず。この時天上よりヂュピタアの鷹飛び來り、サイキーの持てる壺を取り泉の水を汲みて之れに與ふ。サイキー悅び、歸りてギーナスに呈するに、ギーナス愈々怒りて曰ふやう「汝容易く斯る事を成すは魔使ひにこそあらめ。若しは賊に心正しくて我が兒エロスが妻たるを得るや否やを試みんに、今一つの事あり。此の匣を冥府に持ち行きてそこの后プロサアピンに請ひ、后の持てる美しさの內一つを妾に持ち歸れ。」といふ。こは難中の難事なり。聞くだに怖ろしき冥府に我れを遣りて此の世をば逐はんギーナスの下の心にやと思へど、せん方なければ、サイキーは高き塔に上りて自ら身を投げんとしけるに、此の時塔の中なる石ども聲を發して曰ふ、「やよサイキー、こゝに荊棘を以て蔽はれたる罅隙あるを見ずや。その罅隙こそ地底の幽府に通ずる安き路にてはあれ。いで手に大麥の麵麭二つを持ち、口に貨幣二片を啣みて下り行けよ。死の三川の陲りに達せんには貨幣の一片を老舟人チエーロンに取らすべし、彼れ汝を對岸に運ばん。冥府の鐵門をくゞらんとき猛犬サアベラスの哮え來らば、手にせる麵麭一つを與へよ。后プロサアピンに會ひてギーナスの旨を傳へて懇請せんに、彼れその持たる美を匣に封じて汝に渡すべし。汝そを持ちてもとの路より引きかへせ。歸路サアベラスには麵麭を與へ、チエーロンには貨幣を與ふること前の如くせよ。たゞ一つの戒めあり、后より封せられし匣をば私に開くべからざること是れ也。」と。

サイキーは悅び、教への如くにして冥府に赴きしに、事皆思ひのまゝになりて、后よりその美を封せし匣を受けて歸りしが、この時不圖思へるは、おのれエロスを失ひてより樣々の難事に遭ひて形容いみじく瘦れぬ。后の美の中の少しをば自ら得んに仔細あらじと思ひて、そと彼の匣を開くに、目に見えぬ不思議のもの匣より出でゝ「呀」といふまゝにサイキーは絕え入りぬ。折しも彼のエロス火傷癒えてこゝに來かゝり、サイキーを呼

び活けておのれはそのまゝヂュピタアの朝に至り、始終の事を奏上す。ヂュピタア聽いてサイキーには不死の齡を授けざるべからずと宣言し、マアキュリーをして少女をオリムバスに連れ來らしむ。さてギーナスを諭してサイキーをエロスの妻となすことを諾せしめ、手づから不死の酒を盛りて少女に飲ましむ。少女この酒を飲むに忽ち心地微妙になりて双翼左右の肩より生じ飛行自在の身となりぬ。アポロー琴を彈じてほぎ歌ひ、一山どよめきて之れを祝す。

後のケドマス

ケドマス新市街を建設して後ち龍蛇はマアズ神の愛虫なりと聞きて大いに懼れ、齋戒してマアズに仕ふる事八年に及ぶ。ヂュピタアこれを嘉し、マアズの女ハアモニヤを以てケドマスに妻はす。オリムバスの諸神降りて其の大禮を壯にし、就中ヴルカンは精巧なる頸飾を造りてハアモニヤに贈る。ハアモニヤその後一男四女を生む。されど彼の頸飾はこれを纏ふ者に殃し、二女二孫を失ひければ、ケドマスは快

々として樂ます、遂にハアモニヤと共にシープスを去り、エンチェリヤといふ國に赴きて王となる。されど殃禍尚ほ子孫に絶えざりければ、ケドマス大いに歎息し、「あはれ蛇の愛まるゝこと斯の如くんば、我れは寧ろ蛇とならんを欲す。」と獨語しける其の詞未だ了らざるに、ケドマスは忽ち一頭の蛇と化しぬ。ハアモニヤは悲むこと限り無く、直ちに諸神に祈りてその身も一頭の蛇となる。此の地方に今も人を怖れず人を害せざる大蛇あるは是れなりとぞ。

（一傳にヴルカン、ギーナスの不貞を憤りてハアモニヤに禍の着衣を與ふ。こゝに於てケドマスとハアモニヤとの子孫に災殃絶えず云々。後の文學に持主に祟る品を「ハアモニヤの首飾」と稱するはこの故事より來る。）

一〇　メヂューサの首

(一)

捨小舟

同じ頃、アルゴスの國王に髮いと美はしき王女あり。一人子として王も大方には鍾愛しけれ共、尙ほ女兒なるが口惜く、あはれ男子にてあらましかば天晴の武夫に仕立てて我が跡を讓らんものをと朝夕に口說けども詮無し。月日を經るまゝに、王女は身丈も伸びて靑柳の姿やさしく心も怜悧に生ひ立ちぬ。されども王は、その身世を去らん時國土と重器とを孱弱き王女に讓らん事のいと不安く覺えければ、密かにデルファイに赴きて巫女にその事を諮る。巫女言ふやう、「王は早晩非命の死を遂ぐべし。而も王の命を絕つ者は王女の生める一子ならん」と。

王は聞きていたく驚き、如何にもして巫女の箴言を防がざるべからずと、樣々思案を凝らしけるが、所詮王女を幽閉して生涯世に出づること無からしめんには如かずとて、やがて工人に命じて地下に圓き土室を掘らせ、その中に黃銅の家を造り附けしむ。家はたゞ一室にして窓無く、頂に氣と光との入るべき穴あるのみ。さてその家成りければ、王は王女ダネイをこれに這入らせ、一人の老女を附け、衣類、調度、遊びの具なんど持たせて件の牢獄に閉ぢ籠めつ。王はこれにて、巫女の言葉の必ずしも信ならざるを見んとてやう〳〵に氣を安めつ。

憐むべし、王女ダネイは罪無くして地下の牢獄に投ぜられ、語らふものとては隨ふ老女一人の外に無く、年幼ければ未だ野さへ海さへ知らず、纔かに頂の窓より白き雲の靑空に徂徠するを見るのみ。何故なれば父君のこの身をかゝる處に押籠めたまふにやと訝りつゝ、いぶせき一室に夕べを送り朝を迎へて夢現とも無く數年を過ごしける程に、春の寒きに雷の花の開くが如く王女は日毎にねび整ひて、いつしか姿美はしき處女となりぬ。

一日、靑空俄かに氣色だちて、金色の光驟雨の如く、暫く彼の頂の窓より室

の中に降り込みしと見ゆるに、この光やう〳〵收まりて、見れば一人の貴公子王女の目の前に莞爾とうち笑みて立てり。これヂュピタアの大神なれど王女は夢にも覺らず、大方は海のあなたの王子にしてこの身の幽囚を脱せしめんとて雨にまぎれて入り來しならんとのみ思ひけり。

斯くてヂュピタアは幾度もこの獄室を訪れけるが、毎に貴公子の姿にて來ければ王女も絶えてそれと得知らず、度重りけるまゝに互に相思ひて竟に獄室の中にて結婚す。王女と神との大禮に列りしは附き添ふ老女一人のみ。されど王女は相慕ふ夫を得ていと幸ある身となり、彼のおはせぬ時だにも憂といふもの身に無きを覺ゆるに至りぬ。かくて一日貴公子は例の如く彼の狹き窓に攀ぢ上りて出で行きしに、常よりも夥しき光室内に滿ち溢れしと見えしがそれより後ちは復びおとづれずなりぬ。

程なく王女愛しき男子を生む。パアシュースと名づく。姫と老女と二人して密かに育てける程に、四年の間は何人にも知らるゝ事なくて過ぎぬ。

日毎に食物など運ぶ宮女さへそれとは曾て覺ること無かりき。されどいつまで斯くても得あるまじき運なりけん、一日父王此のあたりを過ぎしに、獄室の中にて幼き子の物言ふ聲す。怪しと思ひ探らせけるに云々との事なれば、王の驚き一方ならず。巫女の箴言は斯ばかり嶽ぎてさへその實を證せんとするかと今更に爲んすべを知らず。

いでその身の萬全を圖らんには、二葉にしてこの嬰兒を斃るの外あるべからず。王は斯くと決して、王女と孫とを彼の獄室より引き出させ見るに、母子の姿のいた〳〵しさ、目の前にて及を加ふるに勝へず。臆病未練の王なれども人並に惻怛の心をば持たりしかば、流石に心惡しきこと大方ならず。

されど、王女を助けんことも恐ろしければ、遂に臣下に命じて大きなる木の匣を造らせ、水にも波にも堅固なること船の如くにせさせ、王女ダネーと嬰兒とをこれに入れて海の上に押し放しつ。思ふやう、二人の者を亡ひて

目前あさましき目を見ざるの策これに過ぐべからず、この匣やがて波に碎かれて水の底にや沈むべき、若しくは風に吹き流されて千里のあなたにや漂着せん。二人は復たアルゴスに歸ることあらざるべきなりと。

さても彼の匣舟は沖の方へと押し流され、世に薄運なる二人を載せて、日となく又夜となく波の底に〳〵漂ひ行きぬ。されど四五日の間は天氣穩かなりしかば、小き漣波匣の緣を打ち、吹く風靜かに歌〳〵ひ、水鳥も頭の上を舞ひて回りぬ。目馴れぬ景色の珍らしければ嬰子は少しも恐るゝ事無く、或は卷き寄する漣に手を浸し、或は涼しき風に向ひてうち笑ひ、或は聲高く鳥どもを呼びかけなどす。

かゝりし程に天氣俄かに變りて恐ろしき暴風雨となりぬ。空は闇の如く掻き暗らみ、風すさまじく吹きて大濤は山の如くに動き來りぬ。されども嬰兒は母の肱にすがりて何事も知らざるさまに眠れり。ダネイは乳兒の寢顏をうちまもりつゝ絶えず嗟して歌ふ歌。

「眠れ、眠れ、吾がよき兒、
母がかひなに抱かれて、
怖れも知らぬたふとさよ、
うなばらいかに騷ぐとも。
眠る衣のあたゝかに、
母が歎きは知らざらん。
波の怒りも知らざらん。
あらしは強く吹くものを、
星は隱れぬ、夜は悽し。
しぶきに波におそろしや。
されど我が兒よ、よく眠れ、
知らぬぞ乳兒の幸なれば。」

兎角するまに怖ろしき一夜は明けぬ。彼の匣舟は幸ひに壞るゝこと無

く大波にゆられ〳〵て朝まだき兎ある大島の濱邊に漂ひ着きぬ。濱のあなたには綠の畑あり。畑に續きて小き市街見ゆ。折しも一人の男此處に來かゝりてこの有樣を見、急ぎ匣を引き上げて中を覗けば、美しき貴女嬰兒を抱きて惱み臥せり。いとも憫れの姿なれば、直樣二人を扶けて連れ出し、己が家へと導きていと親切にいたはりつ。ダネイは九死の中に一生を得ていたく悅び、身の不幸を物語するに、彼の男いよ〳〵懇に力を附け、もはや恐るゝに及ばず、心のまゝに此家に止まりたまへ、力の限り助け參らせんと詞を盡して慰めけり。

(二)

難題

斯くてダネイ母子はこの家に留ることゝなりしが、月日飛ぶが如く、嬰兒バアシュースは早くも姿美はしく力優れたる賴母しき少年となりぬ。

こゝに此の島に某といふ王あり、ダネイの美しき姿を見て心を動かし、強

ひて后となさんと迫る。されどもダネイは王の狂暴黯愚なるを厭ひて應せず。故れ王の思ふやう、彼のバアシュースこそはダネイの愛をこの身に向はしむる妨げなれ。いで如何なる口實をも設けて彼れを遠き國に追ひやらん。その後にてダネイを心のまゝにせんに應否はあらじと。

やがて島内の若者を盡く館に召し、假事をまうけて告げて曰く「我れ這般遠國の王女を迎へて妃となさんと欲するに、王女の父に贈品なかるべからず。汝曹各そを我れに献じてんや」といふ。當時妻を娶る者は女の父に物を贈る慣ひなりしなり。

若者等聲々に「さらば如何なる品をか献ずべき。」と問ふ。

「馬をこそ。」と王は徐かに應へつ。そは若者の中にてバアシュースの獨り馬を持たざるを知れゝばなり。

バアシュースは果して大いに困み「あゝ我君、如何なれば尙貴き品を求めたまはざる。假令ばメヂューサの首ならんとも我等は決して辭せざるべきに。」

王は得たりとパアシュースに向ひ、

「メヂューサの首とや、それ大いに然るべし。然からば人々は馬を献ぜよ。パアシュースはメヂューサの首を獲りて來るべし。」

聞いてパアシュースも今更王の難題に驚きたれど、こなたも引かぬ若者なれば、「いかにも獲りて參るべし。」とて袂を拂つて出で行きぬ。人々は彼れが無謀の誓言を嘲り笑ふばかりなり。

いでメヂューサの首とは何ぞや。パアシュースの母嘗て彼れに語りしことあり。千里のあなた、世界の一端にゴルゴンズとて姉妹三人の怪物あり。顏も五體も並々の女子なれど、黄金の翼と真鍮の爪とを持ち、千條の毛髪皆一つ〳〵に生ける蛇なり。さればその姿の怖ろしきこと何人も凝視する能はず、一目見てさへ忽ち化して石となると傳ふ。その姉妹のうち二人は不知身の異體にして、斬れども傷かず打てども死せずと雖も、季の一人はこれに異り、若し巧みに劒を用ひて急處を打たば或はその命を奪ふことを得

べしといふ。メヂューサといふは是れなり。

パアシュースは一旦の意氣地に無謀の誓ひをなして、館を立ち出でたれど、時たつまゝに聊か後悔の念なき能はず。あはれ如何してか此難事を仕遂ぐべき。ゴルゴンズの棲へるは千里のあなた世界の端なりといへど、西か、東か、北か、南か、茫として定かならず。さて彼等を尋ね得たりとせんに、世にも稀なる怪物メヂューサを一刀にして斃すべき名刀無きを如何せん。さば彼れ約束は約束なり。彼れが首を手にせずしては復びこの地に歸るべからざるなり。パアシュースは悄然として濱邊に立ち、海のあなたなる鄉國アルゴスの方を暫し眺め居けるに、折しも落日波に入りて月は後ろの岡より出でぬ。海の上より吹き來る風冷やかに肌を打ちて幽情言はん方無し。この時二人の貴人髣髴としてパアシュースの前に立ち現はる。一人は公子にして一人は貴女なり。公子は冠と沓とに翼を具へ、手にも翼ある杖を持てり。黄金の蛇二條この杖に纏繞せり。

公子はやがてパアシュースに向ひて、汝が愁ふるは何事ぞと問ふ。パアシュース包む所無く王の狂暴なる難題と其身の無謀の誓約をなせし次第とを述ぶ。その時貴女は詞をかけ懇ろに彼れを慰む。見れば面いと美しとにあらねど灰色のやさしき眼人を服せしめ、威ありて猛からず、姿宛然女王の如し。勵まして曰はく、「恐るゝこと無く勇氣を奮ひてゴルゴンズを尋ぬべし。我れも力を添へて怪物メヂューサの首を獲させん。」

パアシュース問ふ「されど我れに船無し。如何にして海を渡り候はん。」

前の貴公子應へて「さらば我が沓を穿ちて行け。海をも陸をも一飛びに飛び行かんこと心のまゝなるべし。」

パアシュース「いで西か、東か、北か、南か。」

貴女「我れ詳らに敎へん。先づ北方氷寒界の彼方に住む蒼面白髮の姉妹を尋ね行くべし。姉妹は世の何人も知らざる秘事を知れり。汝彼等に迫りてその秘事を聞くを要す。聞くべき事は、西の國にて黃金の林檎を成れ

る三人の處女には如何にして會ふべきかといふにあり。さて處と術とを聞きたらんには、急ぎ彼の國に赴くべし。處女等汝に三つの品を與へん、これ無くては怪物メヂューサの首は獲べからず。又彼等は汝に路を敎へて、西の海の遙かのあなたゴルゴンの眷族が棲へる國へと汝を往かしむべきなり。あな可畏心得たりや。」

パアシュース詳かに承りたる由を答ふ。是に於て前の貴人その沓を脫ぎてパアシュースに穿かしむれば、貴女は又もこれを勵まし、「いで〳〵直樣出で行くべし。勇氣と誠とを心に懷きて毫しも恐るゝ勿れ」といさむ。

パアシュースはこの貴人を、一人は大氣の司アシーナの女神にして、一人は傳令神マアキュリーに外ならずと覺りければ別れに臨みて身をひれ伏して謝せんとしたるに、いつしか二神はかき消す如く夕闇にまぎれて見えざりき。

パアシュースもやがて彼の沓の翼を飛ばして、虛空遙かに北をさしてぞ飛

び行きける。

（三）

蒼面白髮の三姉妹　飛ぶことさながら麿の如く、忽ち中天に翔け上りければ、やがて方向を北に轉じて一直に進み行きぬ。海を踰えて彼方は名高き國にして市府あまたあり、幾萬の人々住めり。市府盡くれば山脈にして、山脈のあなたには森林あり、平野あり。大小の河流海を索めて右に左に奔流せり。この平野の上を暫く行く程に、又一連の山脈あり。これを越ゆれば風土一變して、沼澤悉く氷を敷き、皚々たる白雪一面に地を被へり。程なく又海に出づ。これ氷海なり。身を斫るばかりの寒風に翼を打ちつゝ行く程に、或は大波のそのまゝに氷固せるあり、或は下底の潮勢によりて氷山の一方に崩れ落つるあり。曾て太陽も暖めし事無しと見えて、幽陰の氣さながら人に迫るを覺ゆ。兎角して彼の姉妹の住める洞窟に來りぬ。

三人の姉妹は皆極めて高齡にして自らも幾千百歳なるやを知らず。頭

には長き髮あり、生れたる時より蒼白の色をなせりといふ。而も奇中の最も奇なるは、三人にして僅かに一顆の眼と一根の齒とを有し、要ある毎に貸借して交代に使用せること是れなり。パアシュース洞窟の口に來りし時、丙にて何やらん小聲につぶやく音しければ、姑く立ちてこれを聽くに、一人が言ふやう、

「我等は山上の神々さへ知らぬ數多の秘事を知れり。姉御よ、さにはあらざるか。」

と云ふ。餘の二人、

「然にこそ〳〵。」と同音に答ふ。

「いで齒をば借してたべ。又美しう若やぎて見たきに。」と此方の一人が云へば、また一人、

「姉御よ、妾には眼を借してたべ。外の世界を見て來う程に。」と云ふ。

「善しとも〳〵。」

と他の一人は答へて、兩手に眼と齒とを脱して、搜り手に前の二人に渡さんとす。

バアシュースは見るより矢庭に飛び入りて彼の二品を老女の手より奪ひ取るに、前の二人はそれとも知らず、

「齒は何處に。」

「眼は何處に。」

と聲々に騷ぎつゝ、長き手を伸して周邊を搔き搜れども無し。

「姉御よ落しやつたか。」

「失くしやつたか。」

と狼狽へあわつる樣の可笑とも淺ましとも限なければ、バアシュースは思はず呵々と笑ひながら、つと立ち入りて聲をかけ、

「やよ、姉妹たち、眼と齒とは此處にあり。我れに秘事を告げなば返してん。西の國に黃金の林檎を戍れる處女ありといふは何處ぞ。如何にせば彼處

に行かるべきぞ。」

と云ふに、三人は驚きて此方に向ひ、

「いやとよ、御身は若く我等は老いたり。不具の者をば苦めぬものぞ。願ふは我が眼を返してたべ。」

「嗔我が齒をば返してたべ。」

とて、或は泣き、或は口說き、或は嚇し、或は賺し、手を靈して請ひ迫れどもバアシュースは毫しも聽かず。間隔やゝ離れたる處に立ちて聲を厲し彼の秘事を語らずや」と詈れば、三人はその言葉の無用なるを知りて歎き悲むこと限り無し。

やゝありて一人が言ふ、

「姉御よ、告げずばなるまじきか。」

二人は答へて、

「おゝ然なり、とても告げずば叶ふまじ。よし彼の秘事には離れんとも眼

と齒にはかへられず。」

とて途に西の國の彼の處女にあふべき途を詳かに敎へければ、バアシュースは落ち無く聞き取りていざとばかり彼の眼と齒とを返しけり。

姉妹は喜びて小躍りし、「あな嬉しや、若き日は又も來りぬ。」とて、打ち連れて何處とも無く立ち去りけり。それより後彼の蒼面白髮の三姉妹は再び此處に姿を見せず、またその行方を知る者も無し。風は蓬々として人無き洞穴を吹き、氷の波は氷の岸を打ちて、碎けては且つ氷結しぬ。今も此處には生物の影を見ずといふ。

(四)

西のをとめ

さる程にバアシュースは又も虛空に向つて、翔け上り、氷寒界を後にして南の方へと風よりも疾く飛び行きける程に、間も無く日影暖かなる一つの國に來りぬ。敎へられたる如く西の方へと路を轉じて進めば、綠の林、花咲く牧場、暖かなる岡、匂ひある谿なんど次々に目の下に見

ゆ。かくて程なく一つの樂園に着きぬ。花として咲かざるは無く、果物として實らざるは無し。知るべし、これ三人の處女の棲ふてふ西の國の園なるを。バアシュース即ち翼を歛めて地上に下り、樹の間をくゞりて暫く行く程に、やがて樂園の中央に來りぬ。尋ぬる三人の處女は果して此處にあり。金色の林檎の枝も撓に實れる一株の樹を匝りて踊り且つ歌へり。嘗てヂュノーの女神、大神に嫁ぎし時、大神、ヂュノーに此の樹を贈らる、ヂュノーいたくこれを愛し、この三人の處女をして日となく夜となく戍らしめけるなりといふ。

バアシュース暫く足を停めて處女の歌を聽けば、

歌

「いざや舊きを稱へんか、
新しきをも謳はゞや。
我が喜びはいと多に、

我が悲みは稀れらなり。
いざ歌へ、いざ踊れ、
いざや心も浮れつゝ、
良きをば待たん、眞をば。

晝の光は薄れたり、
夜こそ來らめ立ち代り。
日影は早もかくれたり、
星こそ見ゆれ中空に。
いざ歌へ、いざ踊れ。
心も空に浮れつゝ、
朝をば待たん、春べをば。

霜には樹々も枯れぬべし。
風には果も落ちぬべし。
悲み來り、死も訪はん。
いざ泣けや、歎けよや、
心も空に亂れつゝ。
風に快樂の飛ぶを見よ。

されども復る春の陽や、
老木は幹の若やぎて、
花のくれなゐ、葉のみどり。
いざ〳〵笑へ、いざ踊れ、
心も空に舞ひ狂へ。
枝に黃金の果實あり。

バアシュース時分を見計りてやよと聲をかくれば、處女は歌を停めて、此方を視いたく驚ける樣なりしも、彼の穿てる沓を見て心を安んじ、皆馳せ寄りて彼れを花園に迎へ入れつ。

さて云ふやう、「妾たちは御身の來まさんをば知りてありき。そは吹く風の告げたればなり。いで如何なる用事ぞ、語りたまへ。」と云ふ。

バアシュース殘す所なく己が上を物語し、今云々の故ありてメヂューサの首を獲んと思ふにつけ、御身等にゴルゴンの眷族と闘ふべき三つの品を請ひ受けんとて來れるなりと語る。

處女は點首き、いと易きことなり。いで三つの品ならで四つをば參らせんとて、一人は鎌の如く彎曲せる鋭き太刀を與へて、そを彼れが帶に結び付く。一人は鏡の如く照り輝ける盾を與ふ。さて一人は奇しき革靴を與へ、長き紐もて彼れが肩に懸けさす。さていふやう、

「此の三つの品はメヂューサの首を獲んに缺くべからざるものに侍り。さ

れどこゝに今一つの物あり、これ無くては彼れを尋ねんこと恐らくは難かるべし。」とて、いとも奇しき兜を取らす。これ『闇隱れの兜』なり。バアシュースこれを執りて頭に戴くに天上地下の何者も彼れが姿を認むる能はず。

斯くて用意盡く調ひければ、三人の處女は更らにゴルゴンズの棲へる處を知らせ、彼れと戰ひてその首を取り身を全うして歸るべき術を懇ろに授く。さて別れの接吻をなして勇士の爲めに幸運を祈り、直樣冒險の途に上れといふ。バアシュースは會釋して彼の闇隱の兜を戴き、その儘一飛に尙も西方大地の端へと急ぎ行きぬ。

處女はやがて彼の樹の下に立ち歸り、又金色の林檎を成りつゝ、落きをば新しきに老いたるを若きにと、前の如く歌うたひつゝ舞ひて匝りぬ。

(五)

ゴルゴンの眷屬

右手には鋭き劍の柄を握り、左手には輝く楯を取りて、バアシュースは彼の恐ろしきゴルゴンズを索めんとて、大膽にも虛空

遥かに飛び行きぬ。されど彼の闇隱れの兜を戴きたれば、たゞ天上の風と
より外に何人にも覺らるゝこと無し。飛ぶことと速かなれば程なく世
界の四周を繞れる大洋の上に來りぬ。これを越ゆれば日月も照すこと無
き常闇の國にして西の國の處女の告げしに據れば怪物ゴルゴンズ姉妹の
棲處はやがて遠からざる處にあるなり。

忽ちパアシュースは脚下の闇の中にて物の呻吟するが如き聲を聞きぬ。
眼を張りて闇の底を視定むるに、一條の泥河あり。岸の上には名も知らぬ
怪しき草茫々と生ひ茂り、その中に靑白き光を放つて輝くものあり。パア
シュース即ち大地に下り立ちて徐かに足を進めつ。されど正視して彼のゴ
ルゴンズの面を見たらんには、石に化すべき虞れありと心付きければ直ちに
身を向け直し、前には輝く楯の面を捧持し、楯を鏡として後方の物體をこれ
に映せしめつゝ一歩又一歩、徐かに後進して彼の怪物に近づきぬ。

何等の怖ろしき姿ぞ！遂々たる雜草の中に半ばその身を隱して彼の三、

個の怪物は地上に熟睡せり。黃金の翼は相重りて腹部を護れり。聞きし
に違はず千條の蛇は亂れたる絲の如く縱横に身を投げてこれも眠りつゝ
頭より肩に懸れり。三個の中にて形やゝ大きなる二個は兩端に身を横へ、
鳥の如く頭を翼の中に埋めて打ち臥せり。稍小き一個は顏をば空に向け
て中央に眠れり。是れメヂューサなるべし。

パアシュースは楯に映れる姿を目懸けつゝ一歩又一歩忍び足にて後進し
ぬ。斯くて間近に迫るや否や劍を拔きて覘を定め、身をかはしざま發矢と
打てば、メヂューサの首は中に飛んで闇濁の血流れ迸ること泉の如し。パア
シュースは手早くその首を取りて彼の囊に入れ、直ちに虛空に飛び上りて風
の如くに馳せ行きぬ。

那の時早く二個の怪物は聲を聞きて蹶起し、メヂューサの殺されたるを見
て怒りの形相凄じく翼を一打忽ち虛空に向つて追つかけ行きぬ。パアシュ
ースは闇隱れの兜を戴きたれば姿は見らるゝこと無けれども、怪物は囊の

中なる首の匂を嗅ぎつけて後を追ふこと宛然獵犬の獸を追ふが如し。雲を蹴立てゝ逃るゝ程に追ふ程に、怪物の怖ろしき叫聲、翼の響、齒を噛む音など間近に聞こえて物凄きこと言ふばかり無し。されど傳令神の翼には及ぶ者無ければ、怪物は次第々々に後になり、遂には怖ろしき聲さへも聞こえずなりぬ。パアシュースは總かに虎口を脱れて千里のあなたへと歸り行きぬ。

海の怪獸

斯くて大洋を越えて再び彼の西の國の樂園の上に來りつ。三人の處女は今も尙ほ歌歌ひつゝ樹を匝りて踊れり。されど既にメヂューサの首を獲たることなれば一刻も早く本國に歸らざるべからず。パアシュースはその儘足を留めずして過ぎ行きぬ。東をさして急ぎける程に程なくいと暖かなる國に來りぬ。大きなる河洋々と南より流れ、青き椰子の林、赤き三角塔など處々に立てり。珍らしき景色よと思ひつゝ眺め行く

に忽ち目を牽ける物こそあれ。パアシュースが脚下なる海邊の巖の上に一人の美しき處女鎖に繫がれてあり、沖の方よりいと怖ろしき怪獸處女を食はんとて波かきわけて泳ぎ寄れり。あなやと驚きてパアシュースは件の岩の上に下り立ち、少女に向ひて聲をかくるに、闇隱れの兜を戴きたれば少女は姿を見る能はず、たゞその聲に驚くのみ。

パアシュース實にもと兜を取り去りて少女の前に立ち現はる。髮長く眼涼しく、姿凛然として世にかばかりの美丈夫はあらじとぞ見えし。

されど怪獸の怖ろしければ少女は羞恥の暇無く、男の方に驅け寄りつゝ「なう救うてたべ、救うてたべ。」と我れを忘れて取り縋る。

パアシュースは猶豫なく彼の長劍を拔きて縛めの鎖を斷ち少女を扶けて巖の蔭に押し隱しつ。兎角するまに稀代の怪獸は波を撥ねつゝ岸の上に躍り上り、洞穴の如き脇を開きて、岩諸共にパアシュースと少女とを一呑に呑まんとす。凄じき勢言ふばかりなけれど、パアシュースは毫にゴルゴンズ

の怖ろしき姿を見しことなれば少しも騒かず、徐かに甕の中よりメヂューサの首を取り出して怪獸の目の前に突き出せば、案に違はず怪獸は、見るや即ち身振ひして忽ち一塊の大巖石と化し了んぬ。今もこの國の濱邊に巨獸の臥せるが如き巖あるは是れなりとぞ。

斯くてパアシュースは彼の首を手早く甕に收め、さて處女に向ひてありし仔細を尋ぬれば、少女詳らに答ふる樣、

「妾は名をアンドロミーダとて此の國の王女に侍り。さても妾が母上は眉目いと美しくおはせしかば、そをいたく誇りて日毎に此處の海邊に出で、靜かなる水に姿を映しては、あからさまに人に語りたまふやう、龍の都の精女なりとも、よも我れの美しさには及ばじとなんのたまひき。さる程に彼の精女はいと嫉み深き者なれば、之れを聞きていたく恚り、海の神ネプチューンに歎きて后の慢心を懲させたまへと請ふ。海神これをきこしめし、やがて大きなる海獸を遣はして王の船を盡くに覆させ、濱邊の家畜を取り食はせ又漁民の家を壞たせらる。國人ども大きにこれを憂ひ、デルファイの神殿に赴きて彼の巫女に會ひ、如何にせば此の禍を免るべきかと諮るに、巫女のいふやう、王女アンドロミーダを怪獸に食はせて其の心を和らぐるの外あるべからずと言ふ。

妾は一人子なれば、父上も母上もいたく愛みたまひて、容易にに巫女の詞を聽き入れんともしたまはざりしが、彼の怪獸は日毎に來りて陸を侵し、始めは漁夫を苦め、次には田畑を荒し、果は市府をさへ壞るに至りぬ。その禍果てしなく又せんすべも無かりしかば、父王も國人の難儀にはかへられずとて、遂に妾を漁民に取らせたまひつ。かくて妾はこゝの巖の上に繫がれ、彼の怪獸の犧牲に捧げられしにて侍り。」と告ぐ。

二人の問答未だ了らざるに、王、后を始め數多の國人群をなして濱邊に出で來りぬ。皆聲を揚げて泣き號ぶは、王女の既に怪獸に食はれたらんと思ひてなり。さて近づくまゝによく視れば王女は些の害も受けず、一人の美

丈夫に助けられて巖の上にあり。餘りの意外に驚くのみ。バアシュースも姫の美しき姿に恍惚としてはや本國に歸るをさへ忘れんとす。國王はやがて彼れが側に進みて會釋をなし、最愛の王女を救はれたる返禮には如何なる物をか參らすべきと問はるゝにぞ、バアシュースは應ずる所なく、

「さらば王女をば此の身の妻に賜はり候へ。」と請ふ。

こなたも望む所、その儀然るべしと定まり、第七日の日バアシュース、アンドロミーダの兩人はめでたく大禮を舉ぐ。國中國外の賓客極めて多く、皆聲々に祝す。かくて二人は椰子青く茂り、三角塔の赤く群れ立てる此の國に一つの館に住み、山より海に至る數百里の間國人の語り草は、バアシュースの勇敢とアンドロミーダの淑美とのみなりき。

(七)

危機

されどもバアシュースは母を忘れず、夏の始め天氣いと麗らかなるに、新婦アンドロミーダを伴ひ船を艤して本國に歸り行けり。海路平

らかに船は程なく彼方の濱邊に着きぬ。是れ十年の昔バアシュースの母子が漂着せし同じ濱邊なり。バアシュースやがて妻を扶げて上陸し、案内知りたる事なれば、そのまゝ野を横ぎりて市府の方へと急ぎぬ。

さても彼の狂暴なる國王は今もバアシュースが母を挑んで止まず、或はすかし或は脅かし、只管その意に隨はせんとすれども母は愈〻厭ひて更らに應ぜざりければ、王も竟にその意の叶はざるを知り、大いに怒りて無法にも女を戮すべしと言ひ渡しぬ。バアシュースが新婦と共に愉々快々として市府に向へるその朝、王は劍を拔き持ちて、母の家に亂入せるなりき。

バアシュースは斯る事とは夢にも知らず、只管足を早めける程に、野路の半ばにて人に追はれて息せき此方に驅け來る婦人に遭ひつ。驚くべし、これ彼れが母にして、後より追ひかくるは暴逆なる島王なり。されども母ダネーは恐怖の餘り物をも見ずして一向に走りたれば、我が子バアシュースの其處にあるをも知らず、デュビタアの神殿さして一散に驅け行きぬ。此の國の

法、ヂュピタアの神殿に躲れたる者は國王と雖も害する能はざる掟なればなり。

パアシュースは母危しと見るより、猶豫なく身を跳らして國王の前に立ちふさがり、「やよ待て。」と一喝す。國王は遮る者あるを見て烈火の如くに怒り、劍を揮つて打ちかゝれば、こなたは楯にて受け止めつゝ、手早く腰なる袋をさぐりて怪物の頭を取り出し、

「めづらしや、大王、約束のメヂューサの首御目にかけん。」

と不意に目の前に差しつくれば、見るより王は五體竦みて、たゞそのまゝに石と化す。目を嗔らし齒を嚙みつゝ劍を擧げて立ちかゝれる姿、惡鬼羅刹が石像とぞ見えし。

此の事程なく國中に傳はりければ、國人は暴逆無法の國王を除き得たるを悅び、相催してこゝの野原に集り、來り、皆パアシュースの勇を稱へ、その新婦を歡待し、やがて聲を揃へてパアシュースに國王となりたまへと說き勸む。

パアシュースは厚意を謝し、さらば今日一日は人々の請を容れて王となるべけれど明日は位を他の人に讓らんと誓ふ。そは一日も早く母を奉じて本國アルゴスに歸り行かんと思ひたればなり。

かくてその昔、母と己れとを救ひくれたる恩人を呼びて、誓の如く王位を讓り、名殘りを惜む國人をあとにして、母子三人翌朝舟を出して遠くアルゴスの故鄕へぞ漕ぎ行きける。

(八) 鐵環

アルゴスの本國にては、彼の老王六十路あまりの齡を重ねて世を知り居けるが、先年海に棄てたる娘ダネイの母子が這般成人してその國に歸り來る由を聞きて慄き恐るゝ事大方ならず。二昔以前巫女の告げたる箴言はこゝぞとて、彼の船をば迎へもせで一人國外へと遁れ行きぬ。

問ふやう、「我れ避けんに彼れなど我れを得殺さんや」と。

されどパアシュースは孝心深き若者なれば、老王をば害せんなどは思ひも

寄らず、市府に入りて老王の身を脱れたる消息を聞きて落膽すること限り無し。さる程に國人等は舉りてダネー母子を歡迎し、とりわけパアシュースの勝れたる器量を稱賛し、永く此の城に止まりて行く〳〵は王位を紹ぎたまへと懇ろに請ひなどす。

三人は姑く王宮に住ひける程に、或日近國にて競技の催あり。優勝者には國王より名譽の賞を與ふべしと傳ふ。

パアシュースこれを聞き、いで日頃の力をも試み、多くの國人に伎量を知らしめんとて、己れも競技の仲間に馳せ加はる。集まれる人々彼れを知るは無かりしかど、魁偉にして力強く、技精かなるには驚かざる者無し。かくて名譽の桂冠は盡くこの新來の勇者の手に落つべしとぞ見えし。

さて競技は數日の間續きて催されけるが、一日パアシュース鐵環を投ぐるの技に加はり力を揮ひて、人々より遙かの遠距離へと投げ上げければ、滿場齊しく聲を揚げて喝采す。この鐵環は高く飛んで間隔いと遠き群衆の中

に落つるよと見えしが一人の男呀と叫びさま手を揚げて地上に仆れぬ。パアシュース驚きて馳け寄り見れば、無慚や既に非命の最期を遂げてあり。而も是れダネーの父なるアルゴスの老王にして、巫女の箴言を避けんとて國を遁れ却つて此の災に遭ひしなり。

パアシュースは腕を掻き毟りて身の過りを悔ゆれども及ばず、つく〳〵老王が命運のはかなきを哀み、力の限を盡して記念の事をぞ營みける。アルゴスの一國はこれにてパアシュースの相續すべき事となりけれど、祖父を殺して其の地を領するは本意ならずとて、附近にミシーネ、タイリンズの二府を領れる或國王とその領土を交換しつ。やがて母ダネー及び妻アンドロミーダを伴ひてミシーネの府に移り、いと幸福に世を送りけるとなん。

〔註〕

(1) アルゴス――前に註す。當時その國をアルゴスと稱す。アルゴスはその首府なり。

(2) ダネイ(Danae)——またディネともよむ。父の名はアクリシュース。(Acrisius)

(3) パアシュース(Perseus)——事蹟ハアキュリーズ似たるを以て「アルゴスのハアキュリーズ」と稱せらる。神話中最も有名なる一人なり。閻羅れの兜を與へしはプルートーの意に出で、鏡はミナアヴ、劍はマアキュリー(又ヴルカン)之れを與ふと。

(4) ゴルゴンズ——前にも補說せり。姉妹三怪の內、長をユーリエール(Euryale)といひ、次をシーノー(Stheino)といふ。ミルトンの詩篇「コーマス」にもダンテの「神曲」にも此の怪物の事を引けり。爾來すべて醜怪にして畏怖すべき者の形容詞となれり。

(5) ニムフ——前に度々註せり。こゝの精女(ニムフ)はネリーズ(Nereids)と呼び、地中海の神ネリユースの女にして姉妹五十人あり。皆海神ネプチューンに侍す。

(6) アンドロミーダ(Andromeda)——古エシオピヤの王女なりと。エシオピヤは今南埃及よりアデン灣までの地なれど、昔は亞弗利加の東北海岸をも含めて呼べりしなり。パアシュースとの間に數人の勇士を生み、死後星宿となる。

(7) ミシーネ(Mycene)タイリンズ(Tiryns)——共にペロポンネサス半島の東海岸にてアルゴス灣より數哩の距離にあり。ミシーネはその後「イリヤッド」の中に見ゆるアガメンノンが領國の首府となる。

(8) ダネイの漂着せしはサイクレーズ群島中のセライフオス島(Seriphos)

(9) 若面白髮の三姉妹——前に註せるGreaを是れなり。

〔補〕

メヂューサ　始めは人間の少女なりしが、己が黑髮の美しきを矜りて女神アシーナに向ひその美を較べんことを挑みたれば、神罰立ろに下りてあさましき怪物となり、千筋の黑髮盡く生ける蛇と化しぬと。

天馬　メヂューサ殺されたる時、その血化して翼ある馬となりぬ。これを天馬(ピーガサス Pegasus)と云ふ。ヘリコン山を蹴て天界に上り、詩神ミューズの愛馬となる。これより詩興を得ること、詩興に遊ぶことを「ピーガサスに乘る」といひ、腰折歌を作ることを「ピーガサスの頸を折る」と云ふ。例の「オヰッド」にはアンドロミーダを助くる時パアシュースこの馬に乘りて

怪物を蹴殺したる由に歌へり。キングスレーが長詩『アンドロミーダ』『希臘古物語』共にかく記せり。この他にも尙ほ異傳あれど擧げず。此の馬後ち一宿の星となる。

巨人アトラス

バアシュース翼を飛ばして本國へ歸る途にて、日暮れて西の果なる一國に來りぬ。こゝはアトラスといふ巨人の領土にして、彼のヘスペリデスの樹園あり、枝も葉も果實も黃金にて成れる林檎をばアトラス上無き寶と護りて何人をも近づけず。バアシュースは飢ゑ且つ疲れければその身の素生を告げて一夜の宿を請ふ。アトラスはバアシュースの父をヂュピタアなりと聞くや、「林檎を奪ふ者はヂューヴの子なるべし」といふ古き箴言を想ひて大に怒り、暴力を揮ひてバアシュースを園外に逐はんとす。流石のバアシュースも此の巨人の力に敵しかね、遂にメヂューサの首を取り出してアトラスの面前にさしつく。アトラス立ちながら化石す。毛髮は森林となり、四肢は斷崖となり、頭は山頂となり、骨は巖石となりぬ。今も北亞弗利加のモロッコ地方に聳立して一肩蒼穹を擔へるアトラス山は是れなりとぞ。（アトラスは希臘語支持者の意。）

その後バアシュースとアンドロミーダとの間に三子生まる。その中の一人エレクトリオンの女は有名なるアルクミーナにして前々の章に說ける英雄ハアキュリーズの母に當る。

風信子

ハイヤシンサス(Hyacinthus)は希臘某市の王子にして、姿淸く、アポローに愛せられ常に共に嬉戲す。一日アポロー圓板を投ぐるの戲をなせしに、ハイヤシンサスその地に落ち來るを拾はんとて驅け付けし時圓板岩を打ちて跳ね反りし勢に額を破られて倒る。アポロー驚きて扶け起せども既に晩し、首は百合の如くにうなだれ、白き額二つに裂けて面は紫黑の血汐に染めり。アポロー悔恨涯りなく、直ちに王子を變じて一莖の花となし、輓歌を作り琴に和して歌ひける程に、風信子（ハイヤシンサス）の名忽ち希臘に傳はり、春毎にこの花を愛でざるものなきに至りぬ。ハ

イヤシンサス又ヒューキンスともよばる。

"Never confuse a myth with a lie. ……
The thoughts of all the greatest and wisest
men hitherto have been expressed through
mythology."——Ruskin.

一一　アタランタ物語

(一)

棄兒

希臘半島の中央部にアアカヂャといふ國あり。國王子なく、大ヂュピタアに祈願して世嗣の男兒を請ふこと數年に及ぶ。かくて后身ごもりければ上下いたく悅びて一向出産の日を待ちけるに、后女兒を生みぬ。王はいたく失望しヂュピタアを罵り餘人を怒ること限無し。

「咄、女兒何をか爲さん。歌歌ひ、絲紡ぎ、黃金を費すを知るのみ。男兒ならんには騎射を敎へ獵に伴ひ、或は軍に赴かせて我がアアカヂャの王位を紹がすべきものを。咄々女兒、いかでか竟に王たることを得ん。」

とて一人の侍臣に命じ、王女を深山に運びて、棄て歸らしむ。要なき兒なれば山上の熊に取らすべしとなり。

侍臣は命を受けて罪なき王女を山中に連れ行きつ。兎ある巖蔭にそと

下せば、王女はその身の危難を少しも知らず、手を擧げてにこやかに打ち笑みぬ。侍臣あはれと思へども命なれば力及ばず、そのまゝ棄ててぞ歸りける。

王女は夜もすがら又日もすがら聲を放ちて鳴きけれども、樹の間の禽より外にそを聞きつくる者も無し。鳴き〳〵ける程に次第に力弱りて今は纔かに四肢を動かすのみとなりぬ。人の來りて助くること無くば明日をも待たで死ぬべしとぞ見えし。

二日目の夕暮に至りて、一頭の牝熊此の邊りに歩み來りぬ。この牝熊の仔ども其の日獵人に取られて見えずなりにしかば、牝熊行方を搜ねんとて彼方此方と歩みける程に、大きなる巖の蔭にて赤兒の泣く聲す。牝熊さては我が兒の一つにてもあらんと思ひて近寄り見るに、色白くよく肥えたる乳兒の苔の上にいねてあり。その形いとらうたげにて首には見馴れぬ黄金の鎖を掛けたり。牝熊意ひの外なりしかど、乳兒のなつこげに我れを見

ければ徐かに匂ひ寄りて頰を舐め、やがて側に添ひ伏しつ。乳兒はむくつけき熊を怖れんともせず、我れから抱き附きて友を得たるを悅ぶが如くやがてすや〳〵と眠入りぬ。牝熊もそのまゝ側を去らず、夜明くるを待ちて獨り谷間に下り行けり。

かくてその日の夕つかた牝熊は立ち歸り、彼の乳兒をば抱き取りて、おのが穴へと連れ行きぬ。穴はいと大きなる巖の下にあり名も知らぬ蔓入口を蔽ひ數多の草花美しう咲き滿ちたり。牝熊は食物など取り來て乳兒に食はせ、又遊ばせなどす。日數を經けるまゝに、山中の熊どもこの牝熊の珍らしき仔熊まうけたる由を聞き傳へ、仔熊見んとてこの穴に訪れなどしけるが皆この兒を愛で悅び害を加ふること無し。さる程に王女は日を逐うて成長しぬ。日毎山に登りて樹や蔓の間を馳せまはりて遊ぶやうになりぬ。されど牝熊のいと嚴しく禁めければ、彼の花咲く巖蔭より下には曾て下り行きたる事無し。

一日若干の獵夫この山に上りて獵倉もとめけるが、とある巖の下に一人の獵夫例の蔓草など取り去りて獸の穴を伺ひけるに、熊は無くて美しの女の童、草の上に花など取り集めて遊び居り。此方を見るより驚きて忽ち逃げ行きぬ。獵人も追ひ行くに幼兒は岩を超え樹をくぐりて走ることいと迅し。されどこなたは物馴れたる同勢なれば、やがて取りまきて引き捕へつ。

いと珍らしき獲物なれば、その日の狩は止むるとも惜しからずとて、彼の幼兒を將て引きかへしぬ。幼兒は意ひの外に力強く、尙も逃れんとて爭びたれど、かひ無し。獵夫等は山を下り、麓の森のはづれなる己が木屋へと歸り着きぬ。王女はあやしく怖ろしくて、たゞ泣きに泣き號びしが、獵夫どもいとよく愛して、花や玩具や數多與へて遊ばせなどしける程に、やがては慣れつきて、此處を我家と樂むやうになりぬ。

女の兒なれば名をばアタランタと附け、年長けければ獵夫等が生活のま

ゝ弓矢を持たせて射ることを敎へ、槍を執らせてその道を習はせなどす。かくて山の獵に連れ行くに、アタランタは危き岨路を走りて獸を追ひ出すを上無き樂みとし、獵毎に必ず隨ひ行きぬ。さればその技日に進みて少女の齡に達したる頃には走ること何れの獵夫にも勝りぬ。力強く眼定かにして矢を放ち槍を投ずるに中らずといふこと無し。さて丈いと高く、姿さへ淸らに美しかりしかば「快足の女獵人」といへば廣きアカヂヤにても知らぬ者なきに至りぬ。

(二)

爐中の燃木

こゝにアカヂヤを距ること遠からざる處にカリドンといふ市府あり。領地は廣くもあらねど美しき小麥の畑、葡萄の園の中に立ちていと豐かなる町なりき。園のあなたには深く茂れる大森林あり、森林の中には野獸數多棲めり。王をエニュースと云ふ。白く淸らなる宮殿の中に后アルシーアと共に住みて男女數多あり。領內極めて無事なり

ければ、或は狩に出で或は畑を耕し或は葡萄の園を巡視していと幸福に日を送りぬ。勇氣世に聞こえし人なりければ、遠近の英雄と交りを結び、時の勇士一人として知らざるもの無し。

王女は二人あり、美を以て名高く、一人は彼のハアキュリーズの妻となりぬ。ハアキュリーズは高加索の山上にて神人プロミシュースを助けたるを首として功績多き英傑なり。王子は六人あり、皆器量勝れたる生れなりしが、中にも季のメレージャアといふは風采堂々として膽氣才略世に儕なき俊兒なり。

メレージャア生れて七日目の夜、王宮の中にて異瑞あり。后アルシーア小夜中にふと目覺めけるに、産屋の爐中に常ならず火の盛んに燃ゆるを見ぬ。いと怪しければ嬰兒に寄り添ひつゝ、耳を澄まし眼を定めて覗ふに影朦朧たる三人の女爐火の邊に立ち現はる。丈高く顔容嚴格にして姿は世にある風俗ならず。アルシーアは一目見て是ぞ「運命」の精靈なるべしと覺りぬ。運命の精靈とは生れ兒に一定の運を授け、又その運の幸福なるか悲慘なるかを告ぐるものなり。

「いで此の乳兒に何をか取らすべき。」と三人の中の年長なるが先づ口を開く。こはアトロポスといふ精靈にて、手に鋭き鋏を持てり。

「妾は勇ましき魂を與へん。」と若く美しきが答ふ。こはクローソーといふにて、麻の紡綏を持ちて黄金の絲を紡げり。

「妾は情ありて尊き心を與へん。」と第三の精靈は云ふ。この精靈髪いと黒く姿はた美し。名をラケシスといふ。クローソーが紡げる絲を徐かに牽き取りながら、アトロポスに向ひ、

「姉君、その鋏刀をば彼方にうちやりて、御方もこの兒に物取らせたまはずや。」

といへば、アトロポス「されば、妾は、此の燃木の灰となるまでの命を取らすべし。」

とて手づから小き木切れを取りて爐の中にさし入れつ。さてこの木の炎

を揚ぐるを見定めて、三人の精靈は何處とも無く掻き消えけり。

后アルシーアは驚きて立ち上りしが、見れば今まで、の精靈は影もなく、たゞ彼の小き木片の徐々と燃えつゝあるのみ。后は心づき急ぎ爐の邊りに驅け行きてしたゝかに水うち注ぎ、黑く燃えさしとなれる彼の木をば取り出しつ。その身の寶など入れたる箱にしかと收め、上より固く封じて、「此の木だに燃ゆること無くば我兒の命は安全ならん。」とやう〳〵に一息してそのまゝ臥床に復りぬ。

メレージャアは無難に成長せり。勇力人に勝れ、心ばえ優しく尊きこと世に聞こえければ、やがて希臘の全土にその名を知らざる者なきに至りぬ。長ずるに隨ひて勇敢なる功業度々あり。中にも最も名高きは世に類なき金毛の羊を獲んとて若干の勇士と共に海を渡りて大なる危險を冒せし事なりき。さてカリドンの本國に歸るや、人々盛んにその功を稱しエニュース王の跡を嗣ぐもの此の王子に限るべしと沙汰するに至りけり。

(三) 豐年祭

かくて或年の事なりき、このカリドンに大豐作あり、園の葡萄は架を壞るばかりに房を着け、野の小麥はた常に數倍して稔りぬ。

エニュース王人々を集めて云ふ樣、「いで前代未聞の豐作なれば、豐年祭を催すべし。穀物果物の數を山上の神々に捧げて感謝せざるべからず。この一年天候極めて調ひ、日影常に麗らかにして風吹けば濕氣を齎し雨降れば土を暖むるなど皆是れ神々の賜物なり。神々の助け無くしてかゝる豐饒の收穫あるべからず。」とて、カリドンの住民上中下、翌朝直ちに用意に取りかゝりて、感謝祭をぞ催しける。

只見る一面の廣場には此處に彼處に土石もて築き上げたる祭壇、神々の數に合はせて大小數多あり。祭壇の上には枯草と枯柴とを積み、柴の上には最も見事に稔りたる葡萄の房と最も大きなる麥の穗とを掛く。是れ神々への供物なり。

酒の神バツカス(ダイオニサス)

五の祭壇には光の神アポロー。六の祭壇には日輪の金車を御する神。七の祭壇には海の神と、次々に數多の神々を祭り、最後に最も大なる祭壇に祀れるは諸神の首長ヂェピタアの大神なり。

さて用意盡く整ひければ、王エニュースは先頭に進みて祝辭を述べ、もろもろ壇上の枯草に火を點ずれば、草は炎々と燃えあがりて、葡萄や穀物より放つ芳ばしき薫さながら天地に滿つるかとぞ思はれける。これを合圖に滿つ

一の祭壇にはシールズ神、五穀を蒔くことを敎へし神。二の祭壇にはバッカス神、葡萄を用ふることを敎へし神。三の祭壇にはマアキュリー神、雲を司る神。四の祭壇には女神アシーナ、大氣を司り風を制する神。

場の老若男女整しく聲を揚げて思ひ〳〵に舞踊す。是れ感謝の心と供物とを諸神に直達するの意なり。かくて日ねもす踊り騷ぎ夜に入りて何れも樂しくおのが家にぞ歸りける。

さてもこゝに測らざる一つの過失あり、件の祭壇の數の神の中に森林を守れる女神ダイアナの漏れしこと是れなり。何人も此の女神を輕視する意は無かりしかど、如何にしけん不圖うち忘れたるまゝ葡萄の一顆小麥の一穂だに捧げず、終日此の神の事を念頭に浮べざりしぞ是非もなき。

ダイアナ神はその身の等閑に忘られしを口惜しく「いで我れを侮る輩に思ひ知らせん。」と獨語つ。

されど野も畑も事無くして年は暮れ、翌年の夏となりぬ。カリドンの人民は極めて幸福なりき。收穫をさ〳〵前の年にも劣らじとぞ見えし。

王エニュースは野に出でゝ畑と園とを巡視し、人々に向ひて云ふやう、「あはれこの儘にては又も豐作を祝すべきにこそあめれ。葡萄の實るを待ちて

とく〳〵感謝の祭を催さん。」

斯く言ひつゝも王は尙ほ絶えてダイアナを想ふこと無かりき。

その翌日に至り、測らずも一頭の暴れ猪、森の中より跳り出でゝこの市を襲ふ。五體の大いさ遙かに水牛に超え、牙は宛然劍の如く、脊なる刺毛は眞金の錐を植ゑたるか、と怖ろし。カリドンの市府を目がけ息吹荒らかに牙を鳴らして一散に驅け來るにぞ、野にある者共あれよ〳〵と逃げまどへば、猪は得たりと小麥の畑に突入し、當るに任せて暴れ廻り暴れ散らし、數町の畑をば見るまに枯野となし了へつ。次には葡萄の園に闖入し、蔓を切り架を覆しその狼藉はてしを知らず。樹園に入りては樹木を害し、牧場を襲ひては羊を塵にす。奮迅の勢猛にして走ること宛然風の如く、國中の勇士一人としてこれを支ふる能はず。身の皮鐵の楯の如く堅ければ射れども透らず、突けども傷かず、この猛獸の牙にかゝりて命を失ふもの數知れざる至りければ、人々は怖れて城壁の中にたて籠り、纔かに難を避けける程に、猛

獸は心のまゝに荒れまはりて、畑といはず家といはず此の國の財產盡くを微塵にせずば止まじとぞ見えし。

かくて數週間この猪は暴れに暴れてもとの森林に引きかへせしが、城內の人々は尙ほ怖れて出づることを肯てせず。彼の獸の重ねて襲ひ來らば如何にすべきかと今も大方は生心地無し。

遁がのエニュース王も困じ果て、思案の末に心付けるは、去年の春の感謝祭に何れの神をか祭り漏らせしにこそあらめ。いで其の神は誰れにかあらんと暫く考ふるに、やう〳〵それと覺りつ。

「ダイアナぞ〳〵。狩獵の女神ダイアナこそ我れ等が豐年の祭りにうち忘れし憤りにて斯くは神怒の禍獸を下したまふならめ。いで此の神の禍をば我れ等豈命の限り得忘れんや。」とて王は直ちに使を近傍の諸國に遣はして聞ゆる勇士と獵に慣れたる物共とを募り、日を定めてカリドンに集め、大擧して彼の猛獸を狩りとらんと圖る。是等近國の勇士は大方彼のメ

レージャアと共に金毛の羊を求めに海を超えて艱難を共にしたる者なれば、今も必ず王の招きに應ずべしと思ひてなり。

(四)

大狩獵

エニュースの定めたる日は來りぬ。近國の勇士といふ勇士は盡くカリドンの市に集りぬ。おの〳〵、甲冑に身を固め、得物々々を携へて武者振ひし、此度の大狩獵の如何に興あるべきかと勇み勇んでぞ控へける。中に一人の處女あり、丈高く姿醜からず、肩に弓矢を負ひ、手に長き槍を執りておめず臆せず勇士の中に伍してあり。是れ彼の女獵師アタランタに外ならず。

エニュース王は驚き怪みて之れに向ひ、

「やよ少女、我が女等は奥庭にありて鞠を弄べるに、何事ぞ、その長き槍うち捨てゝ、弓矢とく〳〵彼方に行かずや。」

といふにアタランタはたゞ微笑しつゝ頭を掉るのみ。エニュース重ねて、

「いやとよ、汝は我が妻と共に居殘りて機織る女どもを視らんと思ふにこそ。」

といへば、アタランタは初めて口を開き、

「否、妾は此處の殿達と共に森に入りて、猪を狩らんと思ひ侍るなり。」

聞いて人々は整しく眼を見はりぬ。かゝる雄々しき辭の女の口より漏るべしとは想ひもかけず、氣早の一人忽ち詈りていふ、

「彼れ行かば我れは去らん。」

いふに其他の二人、三人、

「我れも去らん。」

「我れも去らん。世上の笑を如何せん。」

と不平の聲は囂々として起りぬ。或は、少女に迫りて本國に歸れといふもあり、中にも后アルシーアの兄弟二人は傲慢粗暴の者なりければ辭を厲まして少女に向ひ「知れりや、今日の狩倉は武夫の晴れ業にして女童の戯れに

あらざるを。」と置りぬ。

されどもアタランタは益々固く槍を握りて城門の側につゝ立ち少しも動く色無し。此の時一人の美丈夫群衆を押しわけて進み來る。見れば王子メレージャアなり。徐かに又儼として人々に向ひ、

「誰ぞ、アタランタの獵に赴くを止めんとするは。按ふに彼れが勇氣の勝れしを恐れたるにぞあらん。天が下の痴漢かな。かゝる臆病の輩はとく〳〵去て本國に歸れ。」

かくいふに人々始めて靜まりて、誰れ引き去らんとする者無し。メレージャア即ちアタランタの獵に隨ふを許す。后の兄弟二人は尙ほもつぶやきて止まず。

それより九日の間エニースの城中にて饗宴あり、部署殘り無く定まりければ十日目の朝まだき、皷角の聲々勇ましく彼の森林へと獵り入りぬ。案に違はず彼の猪は忽ち身を現はして逆樣にこなたに向て襲ひ來る。その

形の巨大にして勢の猛なること聞きしに數倍しければ、前頭の諸勇士は驚き怖れて或は物蔭に隱れ、或は樹に上りて之れを避く。猪は森の中なる空地のまん中に出で、砂を蹴り土を飛ばして怒り狂ふ息吹は宛然暴風の如く、咆聲山を動かし、樹を震はす。

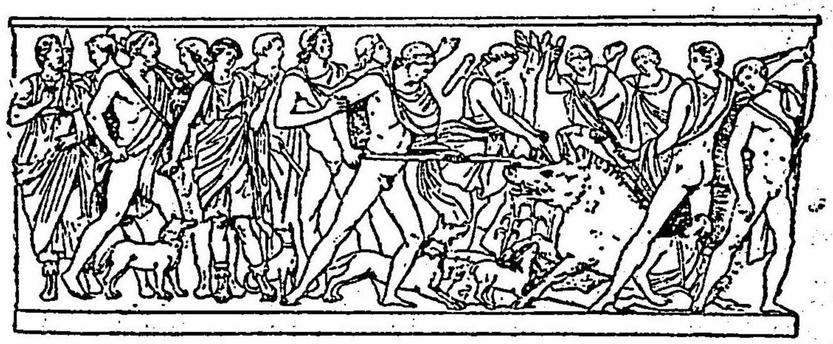
かゝるところに列の中なる勇士の一人躍りかゝりて槍を投ぐれば、猪は怒りて猛進し、彼の勇士を牙に掛けて寸裂す。それにも痞まず又も一人打ちかゝれば、猪は身を向けさま蹄にかけて蹈み殺す。第三番の老勇士徐かに槍を構へ狙ひを定めて投げ付けしが、槍は透らず背を掠め、味方の一人を芋ざしに貫きぬ。猪はいよ〳〵勢を得て襲ひかゝり、味方は總崩れに追ひかへされんとす。

この時アタランタは滿身の力を籠めて得意の投槍を試みしに、槍は見事に猪の背に中りて鮮血迸ること泉の如し。得たりと一人の勇士矢を飛ばして猪の一眼を射れば、メレージャアは躍りかゝりて格闘し、その胸部をさし

貫く。さしもの荒猪も急處の重手に堪へざりけん、鞋とばかりにうち殪れつ、尙ほも劇しく荒れ狂ひしが遂にかなはず息絶えけり。

天地を震はす身方の勝鬨、しばらくは鳴りも止まず。それより人々集まりて猛獸の頭を斬り落し、繩をつけて牽き動かすに、その重きこと六人の力を要しきとなり。さて皮をば剝ぎ取りて、猪を仕止めたる今日の勇者メレージャアに與ふれば、メレージャアは押し返し「否第一に猛獸を傷けしはアタランタなれば」とて遂に名譽の獲物を彼の女獵師に取らす。

アタランタ猪の毛皮を受て、左の肩にうち掛ければ毛皮は前後に垂つゝ、丈に餘りて地に引きぬ。かくて大樹の前に立てる姿森林の女神といふとも恥か



カリドンの大狩獵

しからずとぞ見えし。されども彼の后の兄弟二人はアタランタの賞を受けたるを見て愈々怡ばず。はては私に之れを苦めんとて、一人が不意にアタランタの持てる槍を奪ひ、又肩なる毛皮を引き取れば、一人は後ろよりアタランタを衝き、「とくアアカヂヤに歸りて熊の母に共寢せよ。」と嘲弄す。

メレージャアは見て苦々しき事に思ひ、二人の叔父を諫めて槍と毛皮とを返させ卑怯の振舞を止めさせんとすれど、二人は更らに應ずる色なく、愈々狂ひてはてはメレージャアに打ちかゝりければ、メレージャアも詮方なく遂に劍を拔き合せつ。兩人烈しく左右より切り込むをメレージャア沈んで身をかはせば、二人は宛然盲目の如く互に額を打ち割りて整しく地上に殪れけり。すは刄傷よと隊中一時に騷ぎ立ち、中にも粗忽の者共は、王子、叔父を殺しぬと叫び廻りしぞ是非も無き。

いざ早く城府に歸るべしとて列を促して前進す。巨獸の頭を牽く者あり、その肉を運ぶ者あり、葉附の條を斫りて擔架を作り死傷者を護送する者

あり、其の他は手に〳〵槍や弓矢を携へつゝ囂々擾々としてねり歸る。

時に一人の男の豫ねてメレージャアと善からざるがあり、一隊の未だ全く進行せざる中に獨り驅けぬけて城府に歸る。折しも王后アルシーアは獵の模樣を氣づかひて城門に倚りつゝ、注進を待ち居たりければ、彼の男即ち后に向ひて、メレージャア后の兄弟を殺しぬと讒告す。そはこの后兄弟二人に對して常に肉親の恩愛深かりしを知れゝばなり。果せる哉后の悲痛は譬へんに物なく、或は叫び或は罵り、丈なる黑髮かき毟りつゝ此方の房彼方の室へと走り行き走り出で氣はやはや狂ひて自ら何を爲せるやを知らず。

當時この國にありては親族の殺されたる時讐を報いざるべからざる慣習あり、后は如何にして之れを遂ぐべきかと思案を凝らしつ、狂氣の上の事なれば敵は最愛の我が子なりとも心付かざりしぞ淺ましき。かくてその昔彼の運命の精靈の豫言し置きたることを想ひ起し、二十年間秘めに秘めたる手匣を開きて彼の燃木をば取り出しぬ。爐には火ありて炎々と燃え

たり。前後の思案もあらばこそ、后は驅け寄り、彼の燃木をば猛火の中に投げ入れぬ。

メレージャアが命の燃木は忽ち火を取りて烈々たる炎を揚げぬ。燃ゆること暫くにして血の如き火柱となりぬ。火柱は片端より崩れて見る〳〵白き灰となりぬ。此の時まで隊中のメレージャアはアタランタと並びて堂々と歩み居りしが、俄然枯木の如く大地に仆れて復た起たず。

隊中再び騷擾し、急ぎこの由を后アルシーアに報じけるに、后は期したる事なれば、一語をも發せず、又驚ける色も無し。されど胸は破れて徐かにその居室へと引き籠りつ。やがて國王后の居室を訪れけるに、后は既にこときれて五體に熱さへ無かりけり。

カリドンの森の大狩獵は斯くて終りぬ。

(五)

戀と命

メレージャア變死の後アタランタは又アアカヂャの山中に歸りしが、年來の嗜好のまゝに深き綠の林に入りて鹿を追ひ獸を捕ふるを以て上なき樂となし居けり。されどもカリドンの狩獵よりこのかた、アランタが名は忽ち近國に廣まり、若き勇士の中にも窃かに思を惱ます者數を知らず、皆アタランタを妻とせんことを願へりしかど、アタランタは何れの若者にも心を動かさず、王宮の生活の華美なるよりも森林の自由なるを愛して容易に應せん氣色だに無し。

若者は皆一徹に心消たず、しがすがにアタランタが本意にあらざるべしと推して尙ほも彼の山中へと訪れ行きける程に、アアカヂャの山林幽谷到る處華美なる若者の姿を見るに至りぬ。されども一人としてその目的を遂ぐる能はず。斯くて日を重ねける程にアタランタは大いに困じ、所詮若者を却くるの途無しと思ひければ、一日人々を集めて曰ふ。

「なう殿方は卑しき妾を妻とせんとしたまふにや。いでさらば妾と競走

を試みたまへ。この山より彼處の川の岸まで妾と共に走りて、妾に勝ちたらん人をば妾の夫と定めなん。」と曰ふ。人々、

そは面白し。「面目し。」と言下に應ふ。アタランタ暫しと制し、

「されどこゝに一つの約束あり。妾に負けたまはんには、その人必ず死せざるべからず。この事心得たまふやいかに。」

聞いて人々は顏色を失ひ、ありし半數は直ちに本國に引き歸りしが、殘れる若者尙面無げに言ふやう、

「さらば、せめても少しの程、我れ等を先に走らせずや。」といへば、

「いと易きこと、先づ妾より百歩だけ先きに走りたまへ。されど彼の川に達するまでに妾若し驅け拔けなば、誰れにもあれ其の日のうちに頭を妾に渡したまはざるべからず。」

斯く競走の諚細かに定まるに及びて、殘れる若者の中にても、その自信乏しきもの、又は本國に重き務めを殘せるものなどは皆いつしかに歸り行き

つ。されど尙ほおのが快足に覺えある若者は決然として踏み止まり、一命を賭してアタランタを得んと試みけり。かよはき一少女の果して斯る猛者に敵し得べしや否や。

競走は翌日より日毎に行はれぬ。若者は日毎に可惜生命を失ひぬ。國中の駿脚を以て聞こえし勇士皆、決勝點の遙かのこなたにてアタランタに追ひ越されたればなり。されど若者は後より〳〵來り集りぬ。立ち代り入り代り戀と命の賭事は何時果つべしとも見えず。

斯くて幾日を經ける後、アアカヂヤを距ること遠き一市府より、その名をマイラニオンとて丈高き一人の美丈夫來りぬ。アタランタは例の如くこれに對ひ、

「御身は妾と走らざるを是とす。妾必ず御身に勝たん。是れ御身の最期なればなり。」

マイラニオン答へて、「否、我れはその勝敗を定めんとて來りぬ。」といふ。

是れより先マイラニオン、彼のオリムパスの山上なる愛の女神ヰーナスに祈願を凝らしけるに、マイラニオンの優美にして且つ機智あること能く女神の心を動かしけん、女神具さに策を授けて黃金の林檎をこれに與ふ。

さて競走の仕度調ひけれども、アタランタはむざ〳〵斯る美丈夫を失はんことを悲み、再びマイラニオンに向ひて曰ふ。

「妾の勝たんは必定せり。一たび思ひ返したまはずやいかに。」

といへど、マイラニオンは耳にもかけず、「いざ！」と一聲、その儘一散に驅け行きぬ。彼の三つの林檎はもとより身に携へたりしなり。

アタランタは百歩の後より一氣に驅け行きぬ。駛きこと弦を離れし矢に異らず。マイラニオンは勝れたる快足にあらざれば、アタランタのこれに追ひ付かんこと極めて易し。さばれ世に稀なる美丈夫を速かに失はんも曲なければせめて決勝の間近までは許さんと思ひつゝ走りぬ。マイラニオンやがて追ひ付かれてアタランタが足の音を聞き、又その息の音を聞

くに至りぬ。すはや女神の敎へはこゝなりと、矢庭に彼の林檎の一つを取り出して肩より後ろに投げ落しぬ。

アタランタは世に寡慾の婦人なりしかど、光澤ある石と黃なる金屬をば こよ無く愛しければ、今目の前に金色の林檎の落ち轉べるを見て心動き、足を止めて拾ひ上げつ。マイラニオンはその間に數十歩をかけ行きぬ。されど是れ何かあらん。アタランタは又も瞬時に追付きて一息に驅け扳けんとせしが尙ほ彼の丈夫を憐んで肯てせず。

マイラニオン再び林檎を投ぐ。この林檎先のよりも大きく且つ美しければ、アタランタは人に得させんことの口惜くて又も歩みを止めつ。林檎は轉びて深き草の中に入りぬ。アタランタは草掻き分けて求めける程に、思ひしよりも隙取りて、やうやく拾ひ上げたる時、マイラニオンははや百歩の先にありき。こはアタランタが必敗の距離にてもなかりしかど、處女は尙ほ彼の美丈夫を憐みて躊躇せり。

決勝の川岸は間近の處にあり。忽ちにしてマイラニオンは背後にアタランタの風の如く走せ來る音を聞きぬ。危機は正に迫れり。即ち殘れる一つの林檎を取りて路の一方に投ぐ。地はそこより川の邊りまで傾けり。アタランタ之れを見るに、大きさも美しさも前の二つより遙かに勝れり。拾はずばその儘轉びて川の淵に落ちぬべし。アタランタは我れを忘れて彼の林檎を追へり。マイラニオンは最後の力を込めて疾驅し、はや決勝點の前に進みぬ。アタランタは彼の林檎を掻き取りさま電の如くに追ひ行けり。されど敗るゝとも何か悔あらん。マイラニオンは曾て見し事も無き美丈夫なり、愛のしるしにとて價貴き黃金の林檎を贈りぬ。勝ちて之れを殺さんは却々に悲しからんと思ひければ、遂に勝利を彼れにぞ讓り了りぬ。

是に於て女獵師はマイラニオンが妻と定まり、マイラニオンは新婦を携へてその國に歸り、樂しき家を營みけるとなん。

〔註〕

(1) アアガヂヤ(Arcadia)——ペロポンネサス半島の中央部にあり、モレア連山に圍まれたる高地にして、廣袤數十哩、牧者の天地として詩人に歌はるゝ別境なり。フィリップ、シドニーが有名なる「アアカヂヤ物語」も此の國を材とせり。

(2) アタランタ(Atalanta)——父をスシニュースと云ふ。(一傳にはヂユピタア)

(3) カリドン(Calydon)——希臘の大陸部エトリヤ州南端の一市府なり。英國アアサア王の傳說に名高き同名の地(英島北部の大森林)と混ずべからず。

(4) エニュース(Œneus)——その後不幸重なり、流涙して死す。

(5) アルシーア(Althea)

(6) メレージャア(Meleager)——この傳說は拉典詩人オヰッドが"Metamorphosis"の中に歌へるを本とす。メレージャア最期の狀は屢々彫刻の題目に取らる。チヤアルス、ルブルンの繪畫も有名なる逸品なり。

(7) アトロポス(Atropos)——「酷婆」の義なり。運命を司る妖精の一人にして鋏刀を以て生命(いのち)の絲を斷つを務とす。

(8) クローソー(Clotho)——「紡女」の義。アトロポスの妹にして、生命の絲と運氣の絲とを紡ぐ。

(9) ラケシス(Lachesis)——三妖精中の季妹なり。クローソーの紡ぎたる絲を理む。「分配者」といふ義。

(10) マイラニオン(Meilanion)——また Milanion とも書く。神話書によりてはヒッポメニース(Hippomenes)として傳ふ。兩傳の混ぜるは古くよりの事なりと。

〔補〕

金羊物語

イオルカスの國王イーソン(Æson)の一族中なるピーリアス(Pilias)兵を率ゐてイオルカスの城市を襲ひ、イーソンを幽囚して自ら王となる。イーソンの幼子ヂェーソン(Jason)保母に抱かれ難を免れて怪神チェイロンの洞窟に隱る。チェイロンは半人半馬の神にして子弟を集めて諸般の術を敎授す。ヂェーソンはチェイロン夫婦に養育せられ、長ずるに隨ひて文武双備の若者となる。さてピーリオスは一たび王位を簒

ひたれども、イーソンの臣動もすれば反色あり、且つ巫女の箴言に「單屣を穿ちて山を下る者イオルカスの王冠を得ん」とありければ、大いに驚き盡夜警戒して措かず。ヂェーソンは二十歳に至り、志を決して師に別れて山を下る。山麓に小流あり。折しも雨後の水漲りて橋を流し、濁浪堤に溢る。と見れば痩せさらぼひたる一老女前岸を望みて茫然たり。ヂェーソン憐み之れを負ひて急流を渡るに、重きこと想ひの外にて、屢々溺れんとして纔かに對岸に達し老女を下せば、老女は忽然として秀麗なる女神となる。蓋しヂュノーの神なりしなり。ヂュノー是れよりヂェーソンを保護す。斯くてヂェーソンは孤劍飄然としてイオルカスの城市に入るに、市民はその體軀の壯偉なるを見て神族となし風評街衢に滿つ。ピーリヤス出でゝ之れを視るに單屣なり。蓋しヂェーソン曩に急流を渡るとてその一屣を失へるなり。王は大いに恐怖し、召してその姓名を問ふ。ヂェーソン具さに經歷を語れば、王は陽はに之れを歡迎して宮室に滯留せしむ。居

ること五日にしてヂェーソンの故臣集まりて一勢力を成し、ピーリオスの臣僚も皆ヂェーソンに心服して王位を恢復せんことを勸む。ヂェーソン乃ちピーリオスに向ひその王位王笏をだに讓らばピーリオスには廣大なる土地と財寶とを與へんと說く。ピーリオス竟に抗拒し難きを察し、辭を設けて答へて曰く「足下の提言は具さに聽く。然れども予に年來の一難事あり。往時エオラス(Æolus)の一族にフリクサス(Phrixus)ヘリー(Helle)の二子繼母の責に堪へかねて此の市を出で、金色の羊に駕して海を渡りてコルキス(Colchis)の王國に逃る。されどもそこの海岸は風濤險惡なるが爲にヘリーは溺死しフリクサス獨り上陸しその金羊を大神に捧げて恩を謝す。コルキス王はその毛皮を受けて、軍神マアズの園なる大木の幹に挂け、火龍を置きて之れを護らしむと聞く。こは古き昔の事なれども、件の金羊の皮を恢復して來る事は予が責めにあり。然れども予は年老いて勇氣なし。足下若し予に代りて彼の國に渡り、マアズの園に藏め

たる彼の羊皮を獲て歸らば、足下の器量も一國に認めらるべく予も亦年來の責任を遂ぐるを得て悅んで王位王冠を足下に讓るべし。足下冒險の意無しやいかに。」と。ヂェーソン言下に之れを諾す。王即ち檄を希臘の諸邦に傳へて同行の勇士を募る。集まる者數十人。カストル(Castor)ポラックス(Pollux)ハアキューズ、オルフユーズ、メレージャア、アドミータス、マアキュリーの二子、ボレアス(Boreas)の二子その尤なり。ピーリオスの子また隨ふ。即ち山林の巨材を伐つて六十橈の大船を造り、名づけてアアゴー丸(Argo)といふ。遠征の一行またアアゴナウッ(Argonauts)と稱せらる。既にして滿帆の追風巨船を走らせ須臾にして數十里を北行す。時に前方なる海上の巖角にハアピーズ(Harpies)と呼ぶ怪禽の一群あり、一盲人を捕へて之を苦むるを見る。ハアピーズは女面の兀鷹にして殘忍を以て知らるゝもの。於是北風神(ボーレアス)の二子船中より之れを見るや、紫黑の翼を皷して巖角に飛行し、ハアピースを追ひて盲人を助く。この盲人もとは某

地の王にしてその名をフィニュース(Phineus)と呼びけるが、大いに悅びて恩を謝し、且つ一行に向ひて航海の目的を問ひ、警告して曰く「この海上には危險の絕處極めて多し。中にもシムプレッガヂーズ(Symplegades)といふは黑海に入るの關門にて、狹き海路の左右に双つの巨巖立てり。船といはず物といはず此處を通過するものあればこの巨巖左右より回轉し來りて一擊之れを粉碎す。此の危險を免れんには狹門にさしかゝるの前に於て先づ一羽の鴿(はと)を放つべし。彼の兩巖一たび回轉して此の鴿を壓しつぶし、復た左右に開かんとき全速を以てそこを漕ぎぬけたまへ」といふ。一行は謝して老王に別れ、翌日彼のシムプレガヂーズの峽門に達す。見上ぐれば巨塔の如き二基の大巖、水中に聳立して峽路を阻めり。ヂェーソン即ち一羽の鴿を放ちて水門を通過せしむ。此時忽ち千尋の波底より遠雷の如き響起り巨巖は見る〳〵左右より回轉し速度を早めて鞏と相擊ちしが、やがて徐々として復轉す。アアゴーの一船橈を揃へて矢の如

くに漕ぎて過ぐ。巨巖再び回轉して激しく相擊てども及ばず、その勢餘りに強かりけん兩巖は其儘合して一大巖となり、さしもの難處も爾來は安全となりぬとぞ。かくてアアゴナウッの一行は尙ほ種々の危險を凌ぎて航進せるうちに、ゆくりなくマアズといふ狐島にて彼のフリクサスの二子に遭ひければ、船に伴ひて行々コルキスの事を聞くに、コルキス王イーテスは狂暴忍刻の性なれば心を許すべからず、金羊の毛皮は猛き火龍之れを守りて晝夜の隙も無しといふ。一行は警戒の謀を議し、程なくコルキス島に近づく。乃ち夜に入るを待ちて木蔭に船を漕ぎ寄せ、黎明ヂェーソンたゞ一人國王イーテスの宮を訪問し、王に謁して來意を通ずれば、王は事も無くうち點首き「健氣の願ひなり、予は之れを許さん。されどその前に御邊の試むべき事二つあり。予が厩舍より二頭の牡牛を引き出して數畝の畝を造ること、並びにそこに火龍の齒を蒔くこと是れなり。この二つだに遂げなば金羊の皮は御邊の意に任すべし。」といふ。イー

テスが言葉は仔細なけれど底に怖ろしきたくみあるは明らかなり。こゝにイーテスが女メヂーヤ(Medea)黑き瞳にヂェーソンが雄々しき面影を宿して人知れぬ心の痛みを覺えはじめつ。このメヂーヤは名高き魔使ひサアシー(Circe)が姪にして、幼き程より若干の幻道を習ひ、又藥草毒艸の用ひざまをも學びけるが、父イーテス彼のアアゴナウッの諸勇士を招じて日夜に厚くもてなせるものから、彼等が生殺は父王が一令の下にありていとも危き運命ぞと深く心を痛め、一日折を覗ひて密かにヂェーソンに過ひ一壺の靈丹と一莖の菫草とを與へ、機に臨みて用ひたまへとて具さにその用法を授く。次ぎの日王は國內の勇士を集めて遠來の客の爲めに競技を催し、會はてゝ後ちヂェーソンをして牡牛を牽きて畝を作り火龍の齒をまかしむ。二頭の牡牛は厩舍にあり。王の自ら牽き來るを見るに、大さ尋常に幾倍し、双角劍の如く兩蹄黃銅の如し。眼は李の如く血走り口よりは火焰を吐く。王は之れを捕へて軛に約し、之れを御して一筋

の畝を作り、作り了るや軛を去りて牛を放つ。ヂェーソン王に代りて牡牛を捕へんとするや、牡牛は忽ち咆哮して跳ね狂ひ、四蹄の觸るゝ所燃えて火と化す。されどもヂェーソンは彼の靈丹を身に塗りたれば火傷せず、双手に各〻一頭を捕へ軛に掛けて之れを追ひ、難なく所定の地を耕して徐かに牛を放つ。見るもの盡く驚倒す。ヂェーソン更らに火龍の齒を盛りたる器を取り型の如く一々之れを蒔くに、忽ち莖の芽なせるもの無數に土中より頭を顯はし、見るまに槍となり、兜となり、鎧武者となり、一時に吶喊して地上に躍出す。ヂェーソン心得たりとケドマスが故智に倣ひ、石を取りて木蔭より彼等が中へ投げ付くれば、忽ち同志打の修羅場を現じ、遂に相屠りて盡く仆る。アアゴナウッの勇士打物の鞘を叩いて喝采す。イーテスも詮方なければ約の如くヂェーソンにマアズの森に入るを許す。マアズの森は又マアズの園ともいふ。之れに達する路たゞ一筋あり、兩つの大巖の相迫れる谷間の細道にして、そこには一面に水流れ、水より外

には歩むべき處もなし。彼の火龍は時としてこの水中に身を潜め、又時としては園内の槲木に身を卷きて晝夜眠らず。金羊の皮はこの槲樹に挂れるなり。ヂェーソン單身この森へとさしかゝるに日は既に落ちて空は氷の如く冴えたり。月の光に水底をすかしつゝ歩むに火龍は幸にこゝにあらず、直ちに園の内へと進むを得たり。見れば園とは名のみにして一莖の青葉だに無く、土も石も燒けたる跡の如し。樹も一葉をだにつけず巨幹老木或は斃れ或は引裂け、さなきも千々にくねりすぢりて宛ら怪物の踊れるが如し。ヂェーソン四方に目を放ちて忽ち金羊の皮を發見す。實にも黄金なす纖毛はそよ風に波うちつゝ月の光も匂ふばかりなり。されども彼の怖ろしき火龍のその幹に纏繞して戍れるを如何せん。ヂェーソン一歩を近づけば火龍は頭を擡げ、二歩を進めば低く咆哮す。ヂェーソン乃ち彼の菫草を取りて差つくるに、異香風につれて火龍の面を掠むると齊しく忽ち頭を俛れ眼を閉ぢてそのまゝに熟睡す。ヂェーソン得

たりと金羊を取り、急ぎ引かへしてアアゴナウツの人々に告ぐれば、一同は大いに悅び夜明けぬうちにと直ちに船よそひす。折から王女メヂーヤも城をぬけ出でて馳せ來れば、これも伴ひて出帆す。黎明かくと王に告ぐるものあり、イーテス軍兵を率ゐて海岸へと追ひたれど及ばず。アゴナウツの勇士は無事イオルカスに歸り、ヂェーソン王となりて長くその國を治む。

後のアタランタ

始めアタランタ、巫女の神宣にてその身婚姻せば禍あらんと警められ居ければ、女神ダイアナの如く女獵人となりて獨身の生涯を送らんと決しき。されど容姿餘りに美なるを以て求婚日に絶えず。遂に難題を構へて之れを避けんとす。ピッポメニース(或はマイラニオン)は始め件の競走の判者たりしが、アタランタの衣を脫ぎたる姿の美なるを見て、その身も遂に競走に加はりて成功す。(ギーナスの取らせし三顆の林檎は例の名高きヘスペリデスの林檎なり。)さて結婚の後ち二

人は相愛に溺れてギーナスに事ふること疎略なりしかば、ギーナス怒りて二人を牝獅子牡獅子となして老天神シベリー(Cybele)の車を牽かしむ。一說に兩人未だ婚姻の式を擧げざるうちに、待ちかねてシベリーの殿堂を瀆して獅子に化せらるといへり。

戀のギーナス

愛の神なるギーナス自身熱烈なる愛情の爲めに浮名を流せし物語も尠からず。就中アドーニス(Adonis)の神話は沙翁(シェークスピーヤ)の詩篇にも見えてその名高ければ左に抄說す。

ギーナス一日その子キューピッドと嬉戲しけるに、彼れが矢過つて女神の胸を傷く。ギーナスは人妻の、戀すべくもあらねば、驚きて直ちにその矢を拔き取りたれど傷は容易く癒えず。さる程にサイプラス王リシャスの子にアドーニスといふ美少年あり、林に入りて獵を爲し、圖らずも姿を女神に認めらる。女神は忽ちそぞろなる思ひを起して遂にオリムパス山を下りて屢々この少年と密會す。戀人の好む所はその好む所ならざる

べからずとて、馴れぬ弓矢を携へつゝ林中に入りてアドーニスと共に獵を行ふ。さてアドーニスの血氣を誡め、「弱き者には勇敢なれ、猛きに向ひて手強からんは安全の道にあらず、自然が武器を與へたる獸には勿論近づきそ。」と戒めて、ギーナスは白鳥の牽ける車に乘りて靑空遙かに翔け上りしに、アドーニス戒めを聽かず、獵犬の猪を追ひ出せしに會ひて槍を投げ掛けしたゝかに猪の横腹につき立てたれど、猪は顎もて之れを拂ひ、アドーニスを怒れる牙に掛けてつき殺す。ギーナスは雲中にてアドーニスの悲鳴の聲を聞き、急ぎ驅け下りて見れば、最愛の少年は既に無慚の姿なり。流涕して悔い歎けどもかひ無し。運命を、咀ひて曰はく、「汝等が勝利は時の間のものたれ。我が悲歎の紀念は永久ならん。アドーニスよ、アドーニスよ、汝が死の光景は我が慟哭の狀と共に常へに新たならん。」とて彼れが血汐の上にはら〳〵と涙を灑げば、血汐は忽ちにして薔薇花と化し、涙はもろき白頭翁となりぬ。今も卯月の薇薔匂ふ頃、咲けば且つ

散る風花とは是れなりとぞ。

アドニスはその後冥府の后プロサアピンの寵する所となり、毎年半ばを冥府に送るの約をなして再び明界に甦り來る。一傳には年の四月をギーナスと共に送り、又四月をプロサアピンと暮らし、殘る四月を自由に明界に送るといふ。これより轉じて女たらしの嬌冶郎を英語にてはアドーニスといふ。

ギーナスに關する神話にて此の他に名高きは「愛と心」(エロース キュピッド サイキー 前に補說す)「ピーロとリーンダア」「ピグマリオンの女石像」等なり。

老槲

セッサリーに美はしき蔚林あり、女神シールズの領にして、古き常磐木若楓など枝をかはし葉を重ねて繁りたれば、水無月の眞夏にも涼風常にそこより起りぬ。麓は好みてこの林の下に群り、野山の小鳥も喜びてこゝの枝に集れり。シールズの殿堂は木立まばらなる處にあり、清き泉廻りて流る。森の中にて最も大きなる槲の木この殿堂の前に立てるが、

あたりの里人より捧げし花圈、祈禱の板など低き枝に處せく懸けたり。この槲は更らにもいはず、森の樹木には皆樹神の生命封せられたればとて人々敬して一木をだに傷つくること無し。日の亭午にはそれらの樹神大槲の下に集まりて舞ひ遊ぶ。林神ペーンも時には之れに加はりぬ。この森の側らに某といふ國王ありしが、新たに大宮殿を造營すとて、四壁は石にて疊みたれど、屋上その他の材木に不足し、二十人の柚を率ゐてこのシールズの森に入る。なし。王はその小膽を笑ひ自ら斧を揮つて彼の大槲に向ふ。斧の音丁と響くとき呀と叫ぶ聲す。王は聞けども顧みず、斧は丁と響き又丁と響きぬ。この時シールズの殿堂より一人の女僧現はれ、徐かに王に說きてシールズ神の怒りを避くべしと諭せども、王はいよ〳〵嘲笑ひ、「避けよとや、汝らこそ我が怒りを避けよ」とて斧を揮ふこと連りなり。女僧は言無く立ち去りぬ。されど面に異樣の相を顯はせしはシールズの女神の自

ら來りしものと思ひ知らる。かくて大槲は最後の叫聲と共に鞏と地に倒れしが、王はほこりかになりて柚に嚴命し、尙もあたりの樹々を斫らせて工場に運ばせける程に、得難かりし良材忽ち山をなして集まり、さしもの大宮殿も殘る所なく落成す。

さはあれシールズ神の怒り愈々甚しく、その奴ファミン(饑饉の神)に命じて急ぎ王の領下を横行せしむ。ファミン先づ森の泉を吸ひ干せば國內の諸川悉く涸れて磧となりぬ。かくて野に出でゝ綠の蔬菜を立枯らし、黃なる穀物をぬき散らせば、野はさながらに芥塚の如くなりぬ。防げともせんすべ無ければ、そこの民、家財と家畜とを提げて他國に去るもの前後相踵ぎ、數月にして領內に殘るものはたゞ王宮の人々のみとなりぬ。ファミン最後に王宮に入りけるに、王は忽ち飢餓を感じて食へども〳〵腹に滿たず、厨人を譴むること甚しければ厨人皆遁げ去りつ。かくてその他の臣隷も、王の連りに焦燥して叱呵するに堪へず、相率ゐて逃亡し、さ

ばかり大なる宮殿に今は殘るもの王と王女ミートラ(Metra)とたゞ二人のみとなりぬ。然れどもシールズ神の怒り尙ほ止まず、天より一滴の雨の落つるをも止めける程に、領內の土地は皆化して沙漠となる。王は蓄へし食物も盡きたれば王女と二人公道の邊に出で、折ふし通行する旅人にすがりては食を乞ひ、はては王女を奴隷に賣りて數片の麵包に代ふるに至りぬ。其後は如何にやなりけん。失せにし樹神のまた歸らざれは、黃なる沙漠に復び綠の森を見るべからざるなり。

一書に王女ミートラその後ち海神ネプチユーンに愛せられ、己れの身を任意の動物に變相するの術を受く。かくても王女は殘忍なる父の飢餓を憐み、身を一動物に變じて父の宮殿に赴き、父之れを賣りて若干の食を得ればミートラは買主の許より他の動物になりてそこを逃れて又父の許に赴き、賣られては又賣られて長く父の飢を救ひぬと。

二二 馬と橄欖

國王來る

希臘東南部(一)の一地方に絕壁峨々たる丘山あり、未開の民族若干此の頂に住めりき。家を造ることを知らず、或は土を掘り或は岩を穿ちて穴居しき。食物は大方野獸の肉にして、時に覆盆子、胡桃などを採りて副食とす。弓を造ることも矢を矧ぐことも知らざれば、武器は石投帶、棍棒、及び尖れる杖の三種に過ぎず。衣服は獸皮を剝ぎ蔓もて綴りたり。斯る磽确なる丘の上を選んで棲へるは、周圍の森林に猛獸多きと近傍の蠻族の屢〻園內を侵掠するとに由てなり。丘の四方は斧もて削れるが如き斷崖にして、如何なる獸も匐ひ登る能はず。縱かに一條の小徑ありて平地に通せり。此の小徑は一族が生命の繫がる處なれば日夜番者を置きて衞戍をさ〳〵怠り無し。

さる程に一日若干の人々森に下りて獵を試みけるに圖らずも見馴れぬ一人の若者に遭ふ。顏容極めて美しく、一族の者共に比ぶれば人間の儀とも信ずる能はず。姿しなやかにして足並輕く、樹々の間を行くこといと巧みなり。人々、こは靈蛇の人間の姿に假裝し出でたるものなるべしとて、慄き怖れて歩みを止めつゝ注視するに、若者は靜かに此方に來り、聲を揚げて物言ひぬ。されど其の言葉をば少しも解する能はず。若者又手を動かしてその身の飢ゑたる由を通じければ、人々はやう〳〵に怖れを止めて、やがて食物を與ふ。この人々は彼の蛙族の如き殘忍の者にあらざれば直ぐに若者を害せんとはせず、稀らしき「蛇人」なればとて、妻や子供を呼びて見させやがて彼の丘陵の上へと連れ歸りぬ。さて數日の間普く人々に見させて、後ち之れをば殺して一族が神の犧牲に捧げんと思ひ居けり。

されども若者の容極めて美しくその振舞はた優なりしかば、人々は普く觀るまゝに遂に殺す能はずなりぬ。かくて食物をば取らせて懇にもてな

しける程に、若者は人々の爲めに歌歌ひて聞かせ、又兒供をば樂ませつ。人々は曾て斯る樂しき日を送りしこと無し。幾程もなく若者この國の言語を覺えぬ。語るを聞けば、その名をシクロップスとて、海上の難に遭ひて程遠からぬ此地の濱邊に漂ひ着きしなりといふ。かくて本國の珍らしき事どもを人々に語り聞かせなどするに、人々は皆悅びて聽聞しぬ。是れよりはいたく若者を愛好し又その知慧の己れ等より勝れたるを敬ふに至りぬ。さて事毎に若者の許來りて如何にすべきかと諮り、一人としてその敎ふる所に背ける者無かりき。

斯くて「蛇人」シクロップスは遂にこの民族の王となりぬ。先づ弓矢を造ることを敎へ、次に網を結びて鳥を捕ふること、鈎を用ひて魚を獲ることなどを授く。さて森の野蠻人を防ぐの術をめぐらし、又人々を率ゐて怖るべき猛獸を驅り遠ざく。かくて一族の生活やゝ穩かになれりければ次には樹を斫りて家を造らせ葦を刈りて屋根を葺かせ、野の獸の如くに群居するこ

とを止めて、夫婦親子それぞれ固めて別々の家に住はせつ。最後にヂュピタアの大神を始めて山上に數多の神々の在す由を說き示して、齊しくこれをば敬はしめけり。

(二)

命名

斯くて磽确不毛の丘上に美しき家建ち連りて追々に一つの市府をなしぬ。市府の中央には市場あり、全市繞らすに堅固なる城壁を以てし一門たゞ彼の丘下に通ずる小徑ある處に開けり。さて事々かく整ひけれど未だ此の市に名といふものの無かりき。

一日國王重立ちたる人々と共に市場に出でゝ、尙ほ此の市府を富强にすべき道を講じ居けるに圖らずも見馴れぬ二人の貴人その處に歩み來りぬ。その何處より如何にして來れるかは城門を成れる者さへ絕てこれを知らず。固より彼れが許しを得ずして外より城壁を攀んは人間の能くする處にあらざるなり。二人はやがて群集の前に立ち止まりぬ。一人は男にして一人は婦人なり。身の丈共に高くして容貌極めて嚴なりしかば、人々は一語をも發し得ず、たゞ茫然としてその姿を眺むるのみ。

男の方は紫と綠との外袍を纏ひ、手には三尖の杖を持てり、女はさまで美しき容貌ならねど灰色の眼いと神々しく片手には槍を携へ、片手には彫刻せる楯を持てり。

「この市府の名は。」と杖を持てるが先づ問を開くに、人々は其の意を解する能はず、たゞ目を睜りて少しも辭無し。やゝありて年長けたる一人が答ふる樣。

「市府の名とては候はず。此の丘の上に住める我等をば他にてはクラヂーと呼べり。王シクロップスの此の市に來りて以來、我等は諸事を營むに急にして、その名を案ずるの暇無きなり。」

楯を持てる婦人「そのシクロップス王は何處にありや。」

「重立ちたる人々と共に彼處の市場にあり。」

「いざ我等を案内せよ。」

二人は導かれて國王の前に行きぬ。シークロップスは見るより立ちて之れを迎へ、恭々しく一禮すれば、こなたは直ちに辭をかけ、

「やよ國王、我れは海の司ネプチューンなり。」

「我れは知慧の神アシーナなり。」

と聲々に名乘る。さてネプチューンの曰ふやう、

「我れは汝の此の市府を盛ならしめんと願へる由を聞きて來りぬ。いで此の市府に命ずるに我が名を以てせよ。我れは保護神となりて、世界の富をば與へてん。西より東よりはた南より來れる船舶には貨物や金銀を滿載してこゝの海邊に着かせん。汝は海の王となり得べきなり。」

アシーナ又曰ふやう、

「叔父上の大御誓はいとも幸あり。されどまた我が誓をも聽きねかし。この市府には我が名をば命せよ。我れは黄金もて買ふ能はざるものを與へん。百千の貴き物をば授けん。こは汝等の今まで持だざる所のものなり。我れは永く此の市府を以て愛賞の家となし、時劫の終りまで人々の心を活かしむべき貴き知惠をば授くべし。」と曰ふ。

王は二人の神に謝してこなたの群衆に向ひ、諮りて曰ふ、

「孰れの神をか我等が守護神と仰ぐべき。ネプチューンは我等に富を取らせたまひ、アシーナは知慧をば授けたまふ。いで人々は孰れを擇ばんとするや。」

「ネプチューンをこそ、富をこそ。」と數人聲々に答ふれば、又數人、

「アシーナをこそ、知慧をこそ。」と同音に答ふ。

素よりおのが思ひ〳〵なれば容易に多少を定むべからず。やゝありて、人々の中に常に重んぜらるゝ一老人立ち上りて曰ふ樣、

「二神の我等に賜はんと宣ふものはたゞ誓に過ぎず。世界の富といひ百千の知慧といひ共に我等の見も知らぬものなればなり。富とは何ぞ知慧

とは何ぞ。二神にして今目の前にその賜物を示したまはんには、我等が去就は易からん。此の儀二神に請はんはいかに。」

「實にこそ〳〵。」と群衆は忽ち異口同音に叫ぶ。

神聞きて「いと理なり。さらば今目の前にて件の賜物を示してん。心を定めてよく選ぶべし。」とてネプチューン先づ靈異を現はす。

丘の上にて最も高く、物も草木も無き巨巖あり。ネプチューンこれに上りて、我が力を見よと言ひつゝ、彼の三尖の槍を高く空中にかざして一振り振り下せば、電閃き大地震ひて、脚下の巖は半ば丘底に向ひて裂け落ちぬ。此の裂目より一頭の靈獸躍り出づ。體の白きこと雪の如く、四肢は細くして勁く、頸は長くして弓の形をなせり。尾も鬣も颯々として素絲の如し。

人々は曾てかゝる獸を見しこと無ければ、大方は熊猪の類にして、己れ等を食はんが爲めに現はれたるものと思ひつ。或は家に逃げ入り、或は塀の上に登り、或は武器を執りて身構へし、騷擾なか〳〵いはん方無し。されど、

獸は少しも荒ぶること無く、ネプチューンの側に行きて徐かに立ち止まりければ、人々もやう〳〵に安心し、皆側に寄りてその美しさを歎賞す。

ネプチューン高らかに呼びて曰はく「是れ我が賜物なり。この獸よく爾等の荷物を負ひ、爾等が車を牽かん。又爾等が未耙をも牽かん。爾等を背に乘せて走るに風よりも疾かるべし。」

國王問ふ「その名を何と申し候ぞ。」

「馬とこそ。」とネプチューンは答ふ。

次にアシーナは進み出でぬ。市場の一側に草綠なる空地あり、アシーナこれに赴き、槍を倒にして大地を突けば不思議や虛空に樂聲聞え、其處の土より一莖の植物見る〳〵生え出でぬ。枝はしなやかにして長く葉は深綠の色をなせり。忽ちにして白き花を開き忽ちにして青綠の實を結びぬ。

アシーナ之れを指し「我が賜物は是れなり。爾等の飢ゑたる時此の樹よく爾等の食物とならん。暑き時には涼しき日蔭を作らん。爾等が市府の

裝飾ともならん。この果實より油を採らば、世界は爭つて之れを需めん。」

王又問ふ「いでその名は。」

「橄欖とこそ。」

是に於て國王は更らに思慮ある者共を呼びて商議す。先の老人又云ふやう、

「我等は彼の馬とやらんの我等に多くを爲さんや否やを知らず。車を牽き又未耙を牽くといへど、そは我等の持たざる物なり。我等の見も知らざるものなり。誰か又この獸に乘りて風の如くに走らんことを願ひしものあらん。橄欖こそ美しき物なれ。我等や我等の兒等の爲めに永く悅ばしきものなれ。」といふ

國王更らに人々に向ひて「さらば孰れをか擇ぶべき。」

と問ふに、

「アシーナの賜物こそ善けれ。」……「アシーナに隨はん、知慧に隨はん。」

と聲々に對ふ。

國王即ちこれに決し、「さらば我等はアシーナに隨ひて今より市府をアゼンスと呼ばん。」と言ひ渡し、やがてその旨を二人の神にぞ通じける。

これより後アゼンスは繁華の都會となり、住民丘上の小地に溢れければ、その周圍なる麓の平地に市街を作り、又海邊に向つて三哩の大道を築く。斯くて年經るに隨つて遂に世界に例なき最も雅麗なる都會となりぬ。

彼の丘の頂なる舊の市場には、アシーナの殿堂を造りて之れを祀りつ。此の殿堂の跡尙ほ殘れり。彼の橄欖樹はそのまゝ蔡々としして成長しぬ。今も雅典を訪へば人々悅んで此の樹ありしといふ處に案內す。此の樹盛んに繁殖し、やがて希臘の富源となり、海のあなたまでも傳はりぬ。又彼の白き馬は、そのまゝ廣野を橫ぎりて北方に

シークロツプス

奔り行き、ペニーオス河の彼方なるセッサリーの地に止まりて、そこに永住す。今國々にある馬といふ馬は、皆此の馬の裔なりとぞ。

【註】

(1) シクロップス(Cecrops)——婚姻の法を定め、人身犠牲を禁じ、清き信仰を教ふ。

【補】

アシーナ神の緣起　此の神羅馬にてはミナアヴと云ふ。空氣を司る女神にして、兼ねて知識、藝術、戰爭、平和等を主宰し、又都府を保護す。傳に曰く、ヂュピタアの先妻にメチス(Metis)といふ神ありき。その知慧衆神に優れ、ヂュピタアよりも賢き子生まんとせしかば、ヂュピタア恐れて、懷姙の月直ちにメチスを呑みぬ。然るにその後苦痛に堪へざりければ遂に一神をその頭より出して縱かに癒ゆ。アシーナ是れなり。大神の腦より出でたる神なれば知慧の神となれるなりと。

一三　シーシュースの傳

(一)

エジュースとエスラ　アゼンスやゝ盛んになりたる頃、エジュースといふ賢明の國王之れを支配しき。エジュース子無し、五十人の甥あり。無恥無賴の輩にして、國に嗣無きをよき事にし、エジュース早く世を去れかし、王位は己等のうちより相續せんなど憚る所なく言ひ散らし居ければ、市民は一入眉を顰め、市府の行末如何なるべきかと安き心は無かりけり。されどエジュース年尙ほ壯にして儼然朝に臨めりしかば、彼の若者等何事をも爲す能はず、たゞ王宮に出入して牛飲馬食し、時に相爭鬪して鬱氣を漏らすに過ぎざりき。

然るに一年の夏、何思ひけんエジュース王は市政を老臣に托して、獨りサロニック海を渡り遙かにトローゼンの市へと赴きぬ。トローゼンは古くより

名高き市府にして、對岸の山の麓にあり。アゼンスを距ること五十哩、紫煙漂渺たるエジャイナ島その間に横はれり。古き昔のことなれば、この間の海路は決して近からず、船の兩處を往復するはた極めて稀れなることなりしなり。されどこの灣を迂回して同處に達すべき陸路は險嶮殆んど數ふべからず、何人も未だ曾て跋渉を試みしこと無し。

さてもトローゼンの王ピットシュースはエジュースと幼年の友なりければ、その訪れ來れるを聞きて悅ぶこと大方ならず、直ちに王宮に迎へてあらん限りの饗應を盡しぬ。大理石の光輝々たるトローゼンの古王宮には盛宴、舞踊、遊戯など日毎夜毎に催されつ。二人の王は懷かしき幼時の物語をなし、或はその交れる勇士の噂などしあひつゝ時を忘れ日を送りける程に、エジュースの本國に出發すべき約束の日は忽ちにして來りぬ。されどエジュースは歸るを欲せず、老臣よく國政を視るべければとて、その船のみを還して己れは一人この國に留りけり。

エジュース王の歸るを忘れしは舊友の歡待甚だ厚かりしに由るはさることなれど、實は王女のエスラと別るゝに忍びざりしが故なり。エスラはピットシュースの女にして、姿の淸きこと五月の朝の如く、トローゼンの花とも言はれ又た譽れとも稱せられし佳人なり。エジュースは本國に妻あるものから此のエスラと相慕ひて曾て得知らざる幸福の日を送りしなり。斯くて彼の船の還り往きし後ち二人はピットシュースの王宮にて晴れて婚儀を取結びぬ。されど本國の甥どもの怒りて兇事を謀らん虞れありければ態と秘して之を報せず。

斯くて一月又二月と過ぎけるに、エジュースは尙ほ國に歸らんとせず。アゼンスの政は老臣に任せたるまゝ少しも憂ふることなし。さる程に冬過ぎ春來りてトローゼンの花園に薔薇の花咲き揃ひ、岡の上の雜木綠の若葉を裝ひたる朝、新婦エスラ玉の如き男子を生む。面晴々しく四肢太やかに、眼の鋭くして輝けること山上の鷲にも似たり。エジュースは氣も狂はんば

かりに悦びて愈々本國に歸ることを欲せず、兎角の決意を得んとて、後ろの山に上りてアシーナの神に祈願し、願はくは目のあたり御知慧を授けたまへと祈る。この祈未だ了らざるに脚下なるトローゼンの港に向つて矢の如くに漕ぎ入る船あり、アゼンスよりの急使にして、エジュースに歸國を請ふの書を齎す。

エジュースは驚きて件の書を開けば、豫ねて市政を托したる老臣よりの急報にして、

『直樣御歸國然るべし。アゼンス危急に迫ればなり。クリート島のマイノス大王兵船數百を列ねてアゼンスに押し寄せ、火と劍とを以て城壁の中に侵入し、壯丁をば屠殺し幼弱を奴隷とせんと宣言す。疾く〳〵御歸國、市民を救はれよ。』

との文面なり。エジュース讀むより「こは我が義務の呼ぶ聲なり」と直ちに歸國と決心し、急ぎ渡海の準備をなす。されど彼の無頼なる甥どもの危害を

「加ふべき虞れあれば、エスラをもその子をも本國に伴ふ能はず。別れに臨みてエジュースは私かにエスラを呼びて言ふやう、

『妻の中なる、妻たるエスラよ、よく我が辭をば聽きねかし。我れは復びこの宮殿を見ざらんやも知るべからず、この愛しきトローゼンをも、又或は御身の顏をも。さばれ御身は彼の山腹のすいかいの樹とその彼方に在る平らなる石とを記憶せん。この石をば我より他に何者も動かす能はざりしは御身の知る所なり。我れはその石の下にアゼンスより持て來し我が劍と革履とを隱し置きぬ。我が嬰兒の人と成りて自らその石を動かすに至らんまで彼の品は安全ならん。エスラよ、心して彼れを鞠育せよ。その時來らば嬰兒に父の事を物語し且つ我れをアゼンスに訪ねさせよ。言ふべき事はこれなるぞ、心得たりや。』

とてやがて妻と嬰兒とを抱きて接吻し、遂に別れて船に行きぬ。船子は叫び詈りぬ。數十の櫂は一整に波を破りぬ。白き帆は追風を受けて滿月の

如くに張りぬ。エスラ曇れる眼を擧げて宮殿の一窓より港を望めば、船は蒼波の上を走りつゝ螺の如きエジナ島を斜に矢の如くに駛せ行くを見ぬ。

(二) 劍と屣

月日さながら飛ぶが如く星霜幾たびか替りて數年に及びぬ。されども海のあなたよりは何等の音信をも得る能はざりき。エスラは絶えず後ろの山に上りて終日そこに坐し、青海のあなたなるエジナ島と雲の如き對岸とを望みぬ。折節沖の方にて白き船の駛するを見て之れを問へば、そはクリート島の兵船にして戰士と武器とを滿載してアゼンスに向へるなりと云ふ。又巷說に據ればクリート島の大王は既に盡くアゼンスの船を奪ひ市府の一部を焚き市民に重貢を强ひつゝありと。而も此の他の消息は絶えて傳はること無かりき。

さる程にエスラの嬰兒は丈高く頗豐かなる倔强の若者となりぬ。力の强きこと獅子の如し。シーシュースと名づく。シーシュース十五歲の時、エス

ラ之れを伴ひて彼の山に上り、前なる海を望みつゝ、

「嗚呼、御身の父の來りまさば。」と思はず獨語つをシーシュースは聞き咎め、

「何、父上とや。父上とは誰ぞ。年頃母上のこの山に上りて海を見たまふも父上の來まさんを待ちてならん。いで父上の事語り聞かせたまへ。」

と急き立つるにぞ、エスラもさこそと點首きて、

我兒よ、先づ彼處の大きなる石を見よ。苔むし蔓からみ、半ば土に埋もれて据れり、和子は彼の石を動かし得べしと思ふやいかに。」

シーシュース「いで試み候はん。」とて、力足を踏みつゝ其處に驅け行き、件の石に手を懸けて扳き上げんとするに少しも動かず、呼吸つまり臂痛み、五體は汗に濡れたれども石は竟に動くこと無かりき。シーシュースは大息つき、

「今の力にては動かし難し。さるにても斯る事仰せたまふは何故ぞ。」

エスラは頭を掉り、

「いやとよ、和子のそを抱き上ぐるに至らん時、仔細はおのづと判るべし。」

とて其の日はそのまゝ歸りけり。

母の言葉のいかさま樣子ありげなれば、シーシュースはそれより武藝に身を委ね、走ること飛ぶこと、物投ぐること、扛ぐる事など朝夕激しく練習し、又日毎に大石を動かしてはその力を試みぬ。さて初めの程は力もさまでにあらざれば目に餘る大石を押し動かさんと試るに見る人嘲り笑ふばかりなりしも、シーシュース撓まず試みける程に五體の筋力日毎に加はり、四肢の勁きこと楨杆などに異らず、始めの笑ひし者皆舌を卷きて驚くに至りぬ。斯くて翌年の誕生日にシーシュースは母を伴ひて山に上り、彼の平石を抱き上げんと試みけるが、石は宛然奈落の底より生えたる如く竟に動かん氣色も無し。

「母上、尙ほ今の力にては叶ひ難し。」と歎息するに、

エスラ「勿屈しそよ我が兒。」とて、その日もこれにて歸りけり。

シーシュースは愈々武技を勵み、走る事、飛ぶ事、物投ぐる事、扛ぐる事、さては

他と力を角することなど日毎に行ひて少しも休まず。或は野に出でゝ荒き馬を手馴らし或は山に入りて獅子を獵るに、その强力、その敏捷、人々の膽を冷さしむるばかりにて、青年シーシュースが勇武の物語は忽ちにしてトロゼンの市に噴々たるに至りぬ。斯くて十七歳の誕生日を待ちて三たび彼の山腹の石を扛げんと試みけれど、石は尙ほも依然として動かず。

「勿屈しそよ我が兒。」と母は雄々しくも勵ませしが、人知れぬ涙は坐ろに眼を沾ほしつ。

シーシュースの奮勵は舊に倍しぬ。長刀を揮ひ戰斧を舞はし、巨大なる石を投げ驚くべき重量を荷ふなど練磨をさ〳〵至らざる所無し。ハアキュリーズの日以來斯る强力の例を聞かずと人々は皆噂しけり。斯くて又一年を經て十八歳の誕生の日母を催して山腹に上り、彼の平石に兩手を掛け滿身の力を籠めて抱き上げるに、さしもの大石遂に見事に地を離れぬ。石の下には燦爛たる黃銅造りの太刀と金色の屣とあり。シーシュース取りて

母の前にさし出し、

「いで父上の事語りたまへ。」

と小躍りしつゝ急きたつれば、母は今昔の思ひに堪へかねつゝも、待ちに待ちたるその日の來れるを悅び、太刀を取りて我が兒の腰に結び、履をば足に穿かせて我が子の姿を見上げ見下し、徐かに容を改めて、父の名は云々、トローゼンを去りたる所緣は云々、又別れに臨み、太刀と履との彼の平石の下に隱しあれば、我が兒の成人して自ら彼の石を扛げ得ん日之れを取らせて我れをアゼンスに尋ねさせよと固く托せられたる一伍一什は云々ぞと殘らずその子に物語りす。

シーシュースは始めて身の上を聞き賢明勇武のアゼンス王をその身の父ぞと知れる心の悅び限り無く、決然として母に向ひ、

「いで〳〵今日にもアゼンスに出發せん。」

とてその眼は早くも輝けり。

二人は直樣山を下りて老王ピットシュースの前に赴き始終の事を物語りて彼の太刀と履とを示すに、老王はやゝ驚きしが、頭を掉つてシーシュースを止め、

「あな愚かしの若者かな。汝は如何にしてアゼンスには行かんとする。海には海賊滿々たり。汝が父國難を救はんが爲めに鄕に還りてより こゝに十八年、トローゼンの船一隻だもサロニック海を渡りてアゼンスに航し得たるもの無しと知らずや。」

言へどもシーシュースは毫しも屈せず、決心愈々堅固に見えければ、老王も遂に止め難きを覺り、

「さはれ汝必ず行かんとならば、我れは汝の爲めに堅固にして快速なる船を造らせん、且つトローゼンの市より勇氣勝れたるもの五十人を選びて從はせん。風いと善からん時心を猛く漕ぎ行かば、或は海賊の目を免れてアゼンスの地に着くことを得ん。

シーシュース更らに問ふ、「海を横ぎると陸上を行くと危險孰れか大なるべき。」

老王答へて、「海上の危險多きは今も言へるが如し。されど陸路の危險はこれに十倍せり。假令ば坦々たる大道ありて更らに阻碍無しとせんも、行程長きが故に日數多くを費すべし。況んや崔嵬たる山又山は重疊して數を知らず。草深き沼澤暗黑なる深林相連りて路を遮るあり。人跡曾て到らざる處なれば、徑も無く宿も無く、林には猛獸滿ち〳〵、沼には火龍蟠り、山には怖ろしき魔物の棲めるあり。」

シーシュース聞きて、「いざ陸路に險多しとならば、我れは陸路を擇ばん。」と、勇むこと限り無し。

王、「さらばせめても五十人の勇士を率ゐて往け。」

「否一人だも要なし。」とて若者は劒の柵を握りて立ち上りつ、恐怖の心の女々しきを嘲るものゝ如し。

聞くべき事も盡きぬ、シーシュースは出發の仕度を調へ、母に接吻し老王に別れを告げ、單身トローゼンの西北途なき山路をさして敢然として進み行きぬ。老王エスラを始め知己の人々これを城門の外に送る。シーシュースの丈高き後姿はやがて海邊の並木に入りて見えずなりぬ。

(三) 途上の險

シーシュースは單身危險の途に向つて進み行きぬ。エジャイナ海を右手に見つゝ行く程に、トローゼンを離るゝとはや數里に及べり。忽まちにして大澤の陲りに出づ。地は一歩毎に脚下に沈み、深綠色の死水は狹き歩徑を挾みて左右に滿々たり。されども水草の中より火龍の躍り出づることもなかりしかば、程無く此の沼澤を過ぎて險はしき山路に入るを得たり。こゝは內海の西涯を劃る巉巖にして峠又峠を越えて上るほどにやがて土黑き絕頂に達しぬ。四望すれば希臘の全土を眺め得べし。峠を降りて行くに或は小聞き谿に入り或は斷崖の緣に出で、或は絕壁の下

を過ぎて遂に一大森林に來りぬ。長幹古木蔚然として密生し、黯然として晝尚ほ日光を見ず。

此の森に綽名を「クラブ、キャリアア」(棒殺賊)とて一人の巨漢棲めり。平野に出でて牧場を襲ひ、羊を奪ひ、時としては人を捕へて森に牽き込み之れを食ふ。又巧みに徑側の樹叢に隱れ、旅人の過ぐる時躍り出でて之れを棒殺す。

シーシュース此の森を穿ちて進むに、巨漢は遙かにその服裝の華美なるを見るより心に悅び、草高く生ひ繁れる地上に身を伏せ、手慣れの棍棒を引きつけて徐かに彼れの近づくを待つ。

シーシュースは眼鋭く耳聰き若者なれば、曾て獸にも人にも慄かされたること無し。やがて彼處に來るや巨漢は躍り出でて打ちかゝるに、シーシュースひらりと身をかはせば、棒はしたゝか大地を撲つ。巨漢狼狽てゝ棒取直さんとする時、シーシュース足を取りて、跳ね倒す。クラブ、キャリアア怒り號ぶ聲雷の如く、起き上らんとするを飛びかゝり棍棒を奪ひて一打すれば、巨

漢の頭は微塵となりぬ。シーシュースは棍棒賊の復た旅人を苦むる能はざるを見定め、彼の棍棒を肩にして徐かに又注意深く進み行きぬ。

かくて此の森を過ぎて又一つの山に上るに珍らしくも一人の老人に遭ふ。老人曰ふ「必ず此の山を降りたまふべからず。山の麓に松柏の森あり森のこなたにサイニスと云ふ恐ろしき蠻賊住めり。殘忍の性世に類無く、旅人來れば之れを捕へ、二本の大樹の末を一處に引き寄せ、旅人の片手片足を一樹に結び、他の手足を他の樹に結び、引き寄せたる二樹を放すに、二樹は彈ねかへりて旅人の五體めり〳〵と二つに裂く。サイニス悅んで之れを無上の樂みとするが故に、人彼れを「撓松鬼」と呼びて怖るゝこと限り無しと。

シーシュース聞き了り「さらば怪物を除くべき時ならん。」とて老人の厚意を謝し、平然として彼の山道を下り行きぬ。

聞きしまゝなる蠻賊の家程なく急坂の下に見ゆ。家の後ろには數十仞の峽崖あり、一溪淙々として奔流せり。前は數畝の花園にして名も知らぬ

百花正に繚亂たり。この花園の眞下は例の松柏の林にして、此處彼處の梢には無慚なる旅人の白骨そのまゝに挂りて、日と風とに暴されたり。

蠻賊サイニスは折しも路傍の石に据してありしが、シーシュースの近づき來るを見るや、卷きたる繩を手にして驅け來り物凄き笑顏を向け、

「好來、好來、遠來の公子。いざ我が宿に、旅人の眞の宿に案内せん。」と云ふ。

「いで如何なる饗應やある。我が爲めに曲げたる松の用意はよきか。」と詰り反せば、

「實に〳〵。松は二株まで曲げてあり。汝の來るを待つこと久し。」

言ひつゝサイニスは手にせる繩を繰りてシーシュースを縛せんとす。シーシュースは素早くかいくゞり足を取りて大地に投げ倒せば、サイニス無言に跳ね起きて又も劇しく組み付くを、忽ち木の根に取つて押し伏せ彼れが繩もてサイニスの四肢を型の如く二本の松に結び付けしは心地よしとも限りなし。

「いで罪業の酬い思ひ知れ。」と件の松を放さんとすれば、蠻賊はほろ〳〵と涙を流し神に誓ひ魔に誓ひ好事を約して命助からんことを請ふ。されどシーシュースは耳にもかけず、その儘彼の樹の手を放せば、松は左右に跳ね反り、サイニスが五體は二つに裂けてぞ失せたりける。

サイニスに一人の女あり、ペリギューンと呼び、その性の父と異れることやさしき菫のこゞしき槲と異れるよりも甚し。彼の蠻賊が家の前に樂しき花園を設けたるはこの女なり。父の、シーシュースに殺されたるを見て驚き怖れ、彼の花園に驅け入りて「いざ救うて。」とばかり紅紫の叢に走せ入りぬ。この少女日頃花を養ひては物言ひかけける程に、花もまた少女の語を解しけり。少女は花園深く驅け廻りつゝ「いざ妾を救うてよ。命の限り御身等の枝を折り又苦むること無からんに。」

と云ふ。こゝに數多の花卉の中に一片の葉をも着けざる花あり。杖かなんどの如く寂然として地に立ち居けるが、少女の泣く聲を聞きて哀れとや

思ひけん、見る〳〵枝を伸ばし葉を茂らせ暗き綠の蔭を作りて少女をそこにたち隱しつ。シーシュース少女を追うて花園に入るに姿を見る能はず。

「やよペリギューン。勿恐れそ〳〵。我れは御身の順良なるを知れり。我れの怒るは彼の殘惡の徒に限れるものを。」

少女は聞きて少しく心を安んじ、彼の木蔭よりシーシュースの優なる姿をさし覗き、恐る〳〵に立ち出でつ。斯くてシーシュースは一夜此家に宿しければ、少女は美しき花を摘みて客を饗し又食物を調へなどす。さて翌朝は早く別れを告げ星影を頂きつゝシーシュースは又も進み行きぬ。ペリギューンは寂しき松林の邊りに一人殘りて、彼の花どもを養ひつゝ日を送りぬ。

曩の日花園の中にて少女を隱したる草はその名をアスバラガスとて食草なりしが、少女はいたく此の草を愛し、それよりは絶えてこの幹を食はず、又一葉をも摘み取ること無し。程たちて後ち少女は一勇士の妻となりて子等多く生みけるが、皆彼等に言ひ諭してこの草を害すること無からしめけ

りとなん。

さる程にシーシュースは丘一つ超えて山路深く行き〳〵けるに、山は追々海に迫りて、遂に大きなる巉巖の上に出でぬ。脚下は數十丈の斷崖にして、荒浪劇しく岩を打つて躍れり。頭の上は數百仞の絶壁にして、山鷲鋭く叫びて環形に舞へり。日は一草も無き灰色の岩を照らして、一路僅かにこの間に通せり。

シーシュース泰然として此處を行くに、岩の間より清水湧き出づる處あり、左手の巖は斷崖の上に迫りて路更らに危く、僅かに身を以て行くを得べし。と見れば泉の側に赤鬼を欺く一人の巨漢あり、大きなる棍棒を横へ岩に据して途を塞げり。件の絶壁の下、荒浪岩を嚙む處には、船よりも大なる蝸龜鉛の如き眼を光らせ、頭を擧げて墜ち來る物を待つ。シーシュースは疇昔の夜彼の少女に委細を聞きたれば忽ちそれぞと悟り得つ。こゝは此の巨人シロンの棲處にして、普く人の怖るる處なり。シロンは彼の峽道に據りて

旅人を遮り脅迫して、おのが足を洗はしむ。旅人彼れが脚下に跪いて命を行はんとする時シロン一蹴してこれを斷崖の外に投ず。蝸龜即ち之れを食ふ。シロンは斯くして蝸龜を養ふと云ふ。

シーシュースやがて彼處に近づけば、シロンは案の如く棒を携へて起ち上りつゝ大聲に、

「待て、我が脚を洗はざる者は此處を過ぐべからず。とく脚下に來り跪け。」と言るを、シーシュースは自若としてうち笑ひ、

「蝸龜は今飢ゑてやある。汝は我れを以て彼れを養はんと欲するならん。」

言ふに巨漢は眼を嗔らせ、然り汝は彼れが腹に入らざるべからず。されど先づ我が足を洗はざるべからず。」とて、手にせる棍棒をば炎も出でんばかりに打ち振りてたゞ一打と前進す。

シーシュースは少しも騷がず、彼のクラブキャリアアが手より奪ひ來れる鐵棒を揮ひて打ち合はすに、シロンが棒は中に飛んで旋車の如く鳴りつゝ海

上に落つ。巨漢は怒り凄じく攫み殺さんと飛びかゝれば、シーシュースは早くも棒を棄てゝ双手にその咽喉を引き締めつゝ金剛力に彼の斷崖に臨める岩の上に押し倒せば、巨漢の上體は岩より外れて、今にも海に墜ちなんとす。

「許せ、その手を離せ。汝に路を讓らん。」

と聲ふり絞りて呼び叫ぶ。シーシュース右手に長劍を拔きて、遽に彼れシロンの腰掛けし泉の邊りの岩に据し、

「いざシロン、我が足を洗へ、洗はずや。」と命令す。

シロン色を失ひつゝ跪きてその足を洗へば、シーシュースはその了るを待ち、「因果の報罰覺悟せよ。」と鐵脚を擧げて磕と蹴る。

蹴られて叫ぶ巨漢の一聲、山上の鷲のそれよりも鋭く、遙かの下にはザンブとばかり波より高き水煙騰りて、彼の貪婪なる蝸龜さへ怖れて底にぞ沈みける。暫くありて海上に聲あり、「我れ斯の惡漢を如何にせん。」と言ふか

と見れば大濤どつと打ち反へして、巨漢の屍體はそこの濱邊にうち上りぬ。忽ちにして陸に聲あり、「我れはたる斯の惡漢を如何にせん。」とて地は怖ろしく震動し、巨漢は又も海上につき返さる。それよりは水陸一度に暴れ騷ぎ、巨漢の軀は荒波に撥ねられて遂に空中高く投げられしが、清空亦た之れを容るゝを拒み復び、大地に投下してそのまゝ一巨巖と化成す。エジャイナの海の窮まる處黑く醜き大巖の、一部は海に入り、一部は砂に隱れ、一部は空中に暴されて今も在るは是れなりとぞ。

(四)

力士王　右手に海を眺めつゝシーシュースはそれより北東の方へと進み行きぬ。峨々たる山道はやがて終りて、綠はて無き平野に出づ。野には穀物豐熟し、牛羊など此處彼處に遊べり。シーシュースの事早くも此の地に傳はりけん、老幼男女相携へて路傍に出で彼クラブキャリアアを殺し、バインベンダアを誅し、又巉崖のシロンを海に投じたる稀代の勇士を迎ふ。

「今よりは我等が生活も安全ならん。我等の羊を奪ひ、我等の兒等を食ひし蠻賊皆盡く誅せられたれば」とて悅ぶこと限り無し。

されどシーシュースは足を留めずしてメガラといふ舊市を過ぎ入海に沿うて名高きエリューシスの市に向ひぬ。

此の時途上にて姿卑しき一人の男に遇ふ。この男羊を牽きて市に行く途なりしが、シーシュースの袖を引き小聲に警めていふやう、「エリューシスをば過ぎたまふな。丘を回りて市の彼方に出でたまへ。」と云ふ。シーシュース仔細を尋ぬれば、彼の男

「物語り致すべし。このエリューシスの市にサアシオンといふ王あり、名高き力士なり。他鄉の者のこの市に來るあれば、召して己れと角力せしむ。臂力極めて强きが故に敵する者必ず破らる。破るれば亦その生命を失ふ。曾て此の市に入りて無事に通過せしもの無し。」と告ぐ。

シーシュース聞くより「然らば我れ彼の市に入り、又これを通過せん。」とて

彼の鐵杖を肩にし悠然としてエリューシスの故市に入りぬ。

斯くて市府の門に至り、「力士王サアシオンは何處ぞ。」と番卒に尋ぬれば、番卒は驚きて眉を顰め、

「王は館にありて晝餐中なり。足下命の惜きを知らば、國王の足下を見ざるうちに速かに路を轉じて去れ。」と諭す。シーシュースは打ち笑ひ、

「我れなどか路を轉せんや。我れは少しも王を恐れず。」とて、そのまゝサアシオンの王宮さして歩み行く。

力士王サアシオンは午餐の卓に在りて强烈の酒をあふりつゝ昂然として天下に敵無きを誇りてありしが、シーシュースはこの時つか〳〵と進みて、

「いざ國王我れと角力せずや。」と呼ぶ。

サアシオンは此方をふり向き嘲りつゝ

「あはれ命知らぬ嗚滸者の又も來りしもの哉。誰ぞある彼れをこゝに引き入れて午餐を取らせよ。食はてゝ後ち一もみにして得さすべきに。」と

て、シーシュースを食卓の一席に就かしむ。兩勇は物食ひつゝ一語をも交へざりしが、サアシオンは若者の眉秀で眼鋭く頭髪青絲の如きを熟々と見て之れを惜み、角力せずしてこの儘去らしめんかと思ひしが、食はつるや否やシーシュースは直ちに劍を解き楯と鐵條とをかい棄て、衣服を脱ぎてはや用意に取りかゝる。

「來れ、サアシオン、臆れたりや。」

二人は直ちに庭上に立ちぬ。觀る者さながら堵の如し。かくて呼吸を合せて撲ち合ひしが、兩々力相敵しければ、午より晡に至りて勝負尚ほ決せず。されどもサアシオンが蟹力いかでかシーシュースが多年練磨の力に敵し得ん。シーシュースは敵の疲るゝを待ちて、曳と一聲さしもの巨漢を空中高くさし上げつゝ、彼方の敷石を目がけて投げ付けたり。どつと揚ぐる群衆が喝采の聲。惡鬼を欺く力士王は五體壞れてぞ失せぬたる。

人々は更らに歡呼して各々シーシュースに向ひ、

「いみじくも此市の惡神を除きたまひたり。御身が度々の功業は既に聞きぬ。願ふはこの市に止まりて王となり、我等を良きに導きたまへ。」と切りに請ふを、シーシュース、

「さらば後日を期して王とならん。今は我れ別に所用あり。」とて、やがて衣服を着し劍と楯とを佩び、彼の鐵條を肩にして、又も飄然エリューシスの市を出で行きぬ。見送り隨ふ市府の男女、

「千代ませ國王、護りませアシーナの御神。」と其聲しばらく夕暮の野に響きぬ。

(五)

人鬼

目ざすアゼンスの市は二十哩の中にあり。路はパアネズ山脈の中に入り、或は巖石の間を蜒蜒し、或は陰樹の裡に斷續して上下すること幾回、その險阻今までに數倍せり。されども路程の最終はこれなりと思へば、シーシュースが雄心は愈々踴り、岩を踏み樹の根を攀ぢて只管急ぎける

に、兎角して日暮方一つの谿に下りぬ。闇かりし木立はこゝに盡きたり。谷の中には一條の小川流れ、緑の草一面に兩岸を埋め、羊など此處彼處に遊べり。小川に沿ひて暫く行くに、側なる小山の林の中に想ひもかけず大きなる石造の家あり、蔦蔓あまた壁より屋根に蔭ひたるいと趣あり。

かゝる幽谷の中にいかなる人の住へるにやと訝りつゝ見てあれば、家の中より一人の男出でゝ路の邊りに來り、シーシュースに一禮す。見れば身裝も鄙しからず、言葉づかひも品ありて笑顔に會釋しつゝ、今宵は我が家に明かしたまへと懇請す。

「かくも寂しき處なれば客人とてはいと稀れなり。我等の樂みは旅人に宿を供し、卓上にて異境の物語を聽くにあり。日も暮れて候ふものを、見苦しくともいざ一宿したまへ。世に珍らしき寐床を設けて御身を饗應せん。そは如何なる旅人にも適すべき寐床にして、病も疲れも夢の間に癒えぬべし。」

シーシュースは足も疲れ腹さへ飢ゑたる時なりければ、主人の好意を謝して導かるゝまゝに庭に入りつ。主人はシーシュースを門の側なる葡萄の下に待たせ、「此處にて暫時休息しておはせ、我れは内に入りて寢床の用意せん。御身その寢床に入りて先づ疲れを休め、さて食卓に就きたまへ。今宵の御物語は固く約束して候ふぞ。」とて主人はそのまゝ内に入りぬ。

シーシュースは後に殘りて四邊を見るに、その住居の奢侈を盡せること驚くに堪へたり。室といふ室皆金銀もて飾り、珠玉もて鏤めたり。國王の宮殿といふとも恥しからず。シーシュースは驚きながら尙ほも此方彼方を見てありしに、忽ち目の前なる葡萄の間より美しき少女の顏現はれ、こなたに向ひて聲をひそめ、

「若き旅人よ、主人の寢床には息みたまふな。息まば起くる事叶ふまじ。とく谷を下りて森の中に隱れたまへ。主人の歸らば逃れんこと難かるべきに。」

といふ。シーシュース聞きて「その主人とは何人ぞ。少女よ語れ、又我が逃れ難しといふは何故ぞ。」

問へば少女は尙ほ聲を潛めて口早に、「主人はプロクラスチーズと云ひ、又ストレッチャアと呼ばれて實は人劍にて侍り。年頃此處に住み、旅人を家に引き入れて鐵の仕懸ある寢床に息ませ、之れを殺して衣服腰纏を奪ふを業とす。この家に入りて一人も脫れたる者無し。」

シーシュースは敢て驚かず、「いでそのストレッチャアの所由はいかに。又仕掛ある鐵の寢臺とは何ぞ。」

少女は點首き「主人はその寢床をば如何なる旅人にも適すべしといへりしならん。實に何人にも適して侍り。そを如何にといふに、旅人の身の丈倆り長きときは主人は斧もて切り縮む。又短きときは繩を結びて引き延す。頭と足とに繩を結ばれ滑車にかけて引き殺されたる者數を知らず。これによりてストレッチャア(伸張賊)と綽名し侍るなり。」と云ふ。

シーシュース、さてこそ聞き及ぶ彼の伸張賊なりしか。曩にエリューシスにて一人の男、パアネズ山に云々の人鬼あり、旅人をその家に入れて牽き殺すといへりしが、正しくこの家の事なりし。やがて目に物見すべしとて、獨り點首き居けるに、少女は此の時あわたゞしく、

「あれ〳〵主人の來る足音す、早く外へ。」と言ひすてゝその儘姿は隱れけり。

主人プロクラスチーズは以前の戸の口より出で來り、先の如く滿面に咲顏を作りて一禮し、

「想ひの外に暇取りたる罪は許したまへ。寢床も程よくしつらへたれば、いざ案内申すべし。心よく一睡したまはゞその間に食卓の用意も調ひなん。旅路の御物語の待遠しさよ。」

と先きに立ちて入り行く。シーシュースは後に從ひて行くに、住よげなる奥の一室に珍らしき飾ある鐵臺の寢床あり、柔らかなる絹の茵の品よく

敷かれたる有樣座ろに人を引き寄するばかりなり。シーシュースそと目をくばりて見るに別に怪しき所も無けれど、片方の窓掛の蔭に彼の斧と繩との丈夫なる滑車に繫がれて掛れるを認めつ。

「いざ若き殿、休まれよ。定めて路の疲れもあらん。先づこゝにて一睡したまへ。家の者には物音靜かにせよと言ひ置きぬ。蠅も逐ひてまゐらせん、蚊も拂ひて參らせん。いざとくこれにて休まれよ。」

シーシュース點首きて、「彼の珍らしき寢床とは是れなるか。」

「いかにも。先づ試みに入りて見たまへ。好く御身に適すべし。」

「否、主人こそ先づ入りて見せたまへ、我れは寢床の御身に適する樣を見んと思ふなり。」

プロクラスチーズ狼狽てゝ「否々我れは入るべからず。主人の入りなば靈異を失ふべし。」

シーシュースは儼として、「默れ、汝能く入ることを拒み得んや。」と主人を捉

へて金剛力に取り挫ぎ、そのまゝ彼の寢床の上に横はらす。異むべし、今まで裝飾と見えたる鐵の足は見る〳〵主人を卷いて、械にかゝりし罪人の如く五體少しも動く能はず。プロクラスチーズは苦み叫んで免しを請へども、シーシュースは冷やかに視やりつゝ、

「是れ汝の客人の苦みし所なり。汝も少しは覺えたりや。」

と言ふに主人は默して語無し。シーシュース立ちて彼の窓掛の陰より斧と繩と滑車とを取り出し、又主人に向ひて、こは何の品にて何故に此の室に隱しあるぞと尋ぬるに、主人は愈々辭無く、たゞ戰きて泣けるのみ。

「いざ白狀せよ。汝は引剝を行はんが爲めに數多の旅人を連れ歸りしならずや。又旅人をその寢床に休ませ、此の斧もて頭足を斫り、此の繩と滑車とにて身體を引き伸ばせしならずや。」

と責め問ふに、主人はやう〳〵聲を絞り、「仰せ一々覺えあり。願ふは我等の罪を赦し枕の側なる彈機を押へて我れをばもとになしてたべ。家の中なる金銀珠玉殘らず御身に參らすべし。」

言へどシーシュースは頭を掉り汝は他を捕へたる係蹄にて自ら捕へられたり。我れ人に無情ければ人亦た我れに無情なり。ゆる〳〵天罰を味へよ。」

とて苦む主人をそのまゝに、シーシュースは態とこの室を去り行きぬ。

さてこの家を見廻るに、プロクラスチーズが旅人より奪ひて室毎々々を飾れる金銀寶玉の類殆んど數ふべからず。食堂には卓既に設けられ、美酒佳肴山の如くに並び、その奢王侯と雖も及ぶべからず。されど人の座すべき席とては一つの外無し。

この時先きに衛蔔の蔭にて見たる少女走せ來りて、シーシュースの手を握り、殘忍なる人鬼を除きたるを謝しつゝ物語るやう。

「妾が父はアゼンスにて豪商といはれたる者なるが、一月以前所用ありて此の山路を越えてエリューシスへと向ひつ。妾は父に連れられて野の鳥の如く樂しく旅路に就きたりしに此家の人剝妾の父の黃金多く持てるを見

て誘ひて連れ歸り、父をば彼の寢床てに引き殺し、妾をば奴婢として使ひたり。妾の外にも此家には不幸なる捕囚數多あり、皆彼の人鬼を恐れて仇をも得復さず。」

と少女の委しく物語るを聞き、シーシュースはそれ等の奴婢を盡く呼び出し、それ〴〵に財を分ち與へて好む方へと去り行かせぬ。

斯くて翌朝に至り、シーシュースは又も山路の旅に出發し、程經て後ち遂にアゼンスの野に來りぬ。行く手に見ゆる大きなる市街は即ちアゼンスにして、その中央峨々たる丘山の上に立てるは聞き及ぶアシーナ神の殿堂なり。殿堂を距ること遠からざる處に白き城壁の見ゆる、是れぞ即ちシーシュースが父エジュース王の宮殿と知らる。

(六)

父子の對面

シーシュース市に入りて歩み行くに、市人はその丈高く眉目美しきを指して何處の青年ならんなど評しあへりしが、彼の武功の

噂疾に傳はりゐたりければ、これぞ森林の蠻賊を退治たる英雄なり、エリューシスにてはサアシオンを取り挫ぎ、バアチズの山中にてはプロクラスチーズを誅したる勇士なりとて巷説次第に囂し。

此の時車を牽きて市に赴く數人の屠夫ありしが、シーシュースを視てあざ笑ひ、「嘸語や！山賊と鬪はんよりは女に歌歌ひて聽かすべき嬌冶郎なり。」と一人が言へば、餘の屠夫等、

「あの絲の如き髮を見よ。」

「小娘の如き顏を見よ。」

「足に附き纏ふ長き上衣よ。」

「華車なる金の履よ。」

と聲々に嘲りつゝ「何にても賭けん、十ポンドの物をも扛ぐる能はじ。歳の上のシロンを蹴落したりとや。嘸語を。」と思ひ〳〵にうち罵る。

シーシュースは血氣の若者にて流石に平然たる能はざりしも、屠夫と爭は

んとてアゼンスには來らずと思ひて其儘足を早めつ。さて先頭の車の處まで行きて不圖點首きつゝ車に積みたる屠牛に手を掛くるや否や、屋根越しに彼方の庭園へと投げ飛ばしぬ。さて次の車の牛も、第三のも第四のも同じところに投げ飛ばし、驚き啞然たる屠夫を後にして獨り優然と歩み行きぬ。

程なく彼の丘の麓に來る。シーシュースは磴道を登りつゝ、はやその父の宮門なりと思へば胸は鼓動して止まず。

「國王は何處ぞ。」と守衛に尋ぬれば、守衛、

「國王には謁し難し。先づ朔の人々に知己を得よ。」

とてシーシュースを導きて王宮の食堂に案内す。彼の五十人の朔は今闌宴の半ばと覺しく、旅樂師は歌歌ひ奴隷の女は舞踊し、その他は聲を揚げて叫び罵れり。シーシュースは戸側に進みて、聞きしに優る此の有樣を見、眉は自ら顰み齒は自ら切り合ひぬ。

「やよ、そこの戸側に立てるは誰ぞ。何者ぞ。」と一人の醉漢が言へば、

「おゝ少女の如き少年よ。汝の來れるは何の用ぞ。」

と又一人が言ふ。シーシュース靜かに、

「我が此處に來れるは受くべき欵待を受けんとてなり。之れを否む者世にあるべしとも覺えず。」と言ふ。

「などか否まん〳〵。來れ飲め。且つ我が客人となれ。」

「多謝。されど我れは國王の客人とならんと欲す。國王は何處にありや。」

「國王か。國王何ぞ意とするに足らん。彼れは今休息せり。我等代つて支配せり。」

シーシュースは臆する所無く此處を過ぎて他の室に行き、とかう尋ねる程にやがて寂たる彼方の奥殿にてエジュース王を見つ。聞き及びし賢明勇武の姿はあとも無く長き内外の患に顔いたく皺み、手さへ足さへ痩へて頽へり。

「大王、我れは異國の若者なり。されど王に食と宿とを請ひ、又厚遇を請はんとて來りぬ。我れも貴族の一人にして亦た王と同族の者なればなり。」

「汝の名は。」

「シーシュース。」

「何、シーシュース！シーシュースとは山林の蹬賊を勦滅し、剛力のサアシオンを取り挫ぎ、又人鬼プロクラスチーズを屠りたる勇士の名にあらずや。」

「然り、そは皆我が事なり。我れはサロニック海のあなたなる古トローゼンの市より來りぬ。」

聞くより王は顏色を變じ、

「トローゼンとや〳〵。實に〳〵汝は厚遇せらるべし。食も宿も待遇もアゼンス王が力の限り厚く汝に與ふべきぞ。」と叫ぶ。

こゝにエジュース王の側にメヂーアといふ妖婦あり。容貌は絕世の美人なれど、心は惡魔に異らず。常に王の心を迷はせて側を去らず、流石に英武

のエジュース王も事毎にこの女に諮る例なれば、

「メヂーアよ、我れは若者を歡待せんと思ふなり。惡かるべきか。」といふに、

「など惡しき事の侍るべき。とく客殿に案內させて休息させ、後刻卓に招きたまへ。」といふ。

メヂーアは巫術を善くしければ、直ちにシーシュースの素性を云々と曉り得つ。シーシュース若し王と父子の對面したらんには、その身の寵愛忽ち失せてこの王宮にも留る能はざるべしと思ひければ、如何にもして之れを除かんと樣々思案を凝らす。

斯くてシーシュース客殿に休息せる間にメヂーアは王に向ひ「彼のシーシュースとやらんこそ誠は噂の如き勇士に非ず。大王の甥御より送り來れる刺客にして王の逝去を待ち詫びての逆謀なり」と辭巧みに說きつけゝれば、惘むべし、エジュース王忽ち妖婦の讒を信じ、如何にせばその難を免るべきか

と諧る。妖婦は得たりと心に笑ひ、「さらば妾に任せたまへ。若者は程なく卓に來りぬべし。その時酒杯に毒を加へ、食了りて後ち妾より彼れに進めん。かばかり易き謀はあらず。」と云ふ。

やがてシーシュースは招かれて王の卓に陪食す。メデーアも一つ席にあり。食事の間シーシュースは彼の山林に蠻賊を屠りたる事、力士王サアシオンを挫ぎたる事、人鬼プロクラスチーズを誅したる事の一伍一什を物語するに露疑はしき節も無し。この時シーシュース肉を斫らんとて劍を拔くにエジュース王不圖目をとむれば、劍の及元に刻せる文字あり。正しくその名の頭字にして、十八年以前トローゼンにて後ろの山の平石の下に隱したるその身の劍ぞと覺り得つ。

「おゝ我が兒よ。」

と彼の卓上の毒杯を投げ棄てつゝ諸手を廣げてシーシュースに抱きつく。

メデーアは早やこれまでと思ひけん、そのまゝ城外に馳せ出でゝ一聲鋭く

うち叫べば、火龍の牽きたる怪しの四輪車忽ち空中より落ち來りて妖婦を載せつゝ何處とも無く驅け行きぬ。これより後ちアゼンスに再び彼れの姿を見ること無かりき。

さる程にエジュースは翌朝早く傳令使を派してシーシュースの我が兒なる由を發表させ、直ちに立てゝ世嗣となす。かゝれば彼の五十人の甥は之れを聞き驚き憤ること限無く、直樣評議を固めてシーシュースを城門の側なる林中に暗殺せんと謀る。

斯くて一夜の中に手筈を定め翌朝シーシュースの只一人城門に來かゝれるを待ち一時に起りて之れを圍む。その勢すべて三十人、面を向けん方も無し。シーシュース少しもひるまず、間近き城壁を小楯に取り近寄る敵を薙ぎ仆しつゝ市民を呼びて援を求む。市民はかねて彼等無賴の一族に苦められしこと數を知らねば、忽ち起りて取り圍み、シーシュースと共に挾擊して遂に彼等を塵にす。於是殘る二十人の無賴漢も怖れて直ちに逃亡し復び

アゼンスに歸ることなかりき。

〔註〕

(1) エジュース(Ægeus)——エジュース始め子無きを患ひ、デルファイに赴きて巫女に諮り神宣を得てトローゼンに航し、途にエスラと婚す。一書にはエジュース國難に赴きし時エスラ未だ出産せざりし由に云へり。

(2) サロニック海(Saronic Sea)——アゼンス地方とペロポンネサス半島との間にある内海なり。今はエジャイナ灣と稱す。

(3) トローゼン(Troezen)——またトローゼーニーとも讀む。

(4) エジャイナ島(Ægina)——サロニック海中の最大なる一島なり。後ちエジュースこの海に投じたるを以て、海をエジャイナ海と稱し、島をエジャイナ島と呼ぶ。時に紀元前千二百三十五年。尙後の章に詳かなり。

(5) ピットシュース(Pittheus)——ピーロップスの子。才學一世に勝れたる明主なりきと。

(6) エスラ(Æthra)

(7) シーシュース(Theseus)——希臘人の理想的英雄なり。偉業ハアキュリーズに類せるを以て「アッチカのハアキュリーズ」と稱せらる。

(8) クラブ、キャリアア——本名をペリフェテス(Periphetes)と云ふ。鍛冶の神ヴルカンの子にして、アアゴリス地方の山賊なり。"Clubbearer"とも英譯す。

(9) サイニス(Sinis or Scinis)——またシンニス(Sinnis)

(10) パイン、ベンダア("Pine-bender")——コリンスの谿谷に住める惡人。

(11) ペリギューン(Perigune)

(12) シロン(Sciron)——コリンスとメガラとの間に今もその巖あり、シロン崖と稱す。

(13) メガラ(Megara)——コリンスの東五哩の處にあり。

(14) エリューシス(Eleusis)

(15) サアシオン(Cercyon)——又サアシオニース(Cercyones)海神ネプチューンの子と稱し、又鍛冶の神ヴルカンの子とも云ふ。

(16) パアネズ(Pernes)

(17) プロクラスチーズ(Procrustes)——今も強て人を一型に束縛行動せしめんとする

ことを「プロクラスチーズの床に置く」と云ひ、斯く人を律する者即ち杓子定規を用ふる文藝の批評家などを「プロクラスチーズ」と稱す。

(18) メゲーア(Medea)——メゲーアは彼のコルチス王イーテスの女にして、名高きアゴナウツの勇士ヂエーソンの妻となりしが(金羊物語)嫉妬の爲めに多くの人を毒殺し、火龍の車に乘りてアセンスに逃れ來りしもの。その他にも惡行多し。

Mythology is not religion. It may rather be the ancient substitute, the poetical counterpart for domestic theology.

Hare.

一四　工匠デダラス

(一)

小天才

その頃またアゼンスにデダラスといふ男あり、世に珍らしき工匠にして木材金石の類を用ひて萬の物を造るに極めて巧みなり。人々に敎へて家屋の構造を改めさせ、蝶番を用ひて戸を開閉し柱を立てゝ屋根を支ふることを工夫す。又膠を以て物を着け鉛垂を用ひて物の傾斜を測ることを始め、螺錐を造りて孔を穿つことを發明しぬ。さて船夫に敎へ船に帆柱を立てさせ繩を以て帆を上下せしむ。エジュース王の若き頃なりしかば、王の宮殿を新たに造りて壯麗無比のものとなし、又市府の中央なる高地にアシーナの神殿を改造し、其の名を遠近に轟かしけり。

デダラスに一人の甥あり、パアヂックスと云ふ。幼きより叔父の徒弟となりて工匠の藝を習ひけるが、天生器用の才あり、幾程も無く技も工夫も叔父

を凌駕するに至りぬ。バアヂックスは常に眼を四周の物に曝らしてその性を究め又暇あれば野や森の知識を養ひぬ。一日海の邊りを歩みて大きなる魚の黒き骨を捨ひけるが、直ちに工夫して鋸といふものを發明す。又或時林に入りて、小鳥の樹に孔を穿つを見て鑿を工夫す。又轆轤を案出して陶工に用ひしめ、二個の尖條を束ねてコムパスを造る。かゝる奇妙の發明數へ盡し難し。

さる程にデダラスは若者の天才を嫉み、その技の精妙にしてその工夫に熱心なるを忌むこと甚し。謂ふやう、彼れ若し斯くて進み行かんには、その業遥かに我れに優りて、彼れが名は萬代に傳はり、我が名は今にも忘らるゝに至らん。」と。

デダラスは業を執りつゝ日毎に思ひ惱みけるが、若きバアヂックスを妬むの心は愈々募りて抑ふべからず。かくて一日の朝二人はアシーナの神殿の修復に從事し、その外壁を裝飾し居けるが、デダラスはわざとバアヂックス

に命じて狹き棧架の上に登り行かしむ。棧架は神殿の飛簷に沿ひて高く斷崖のきはに懸れり。バアヂックス何心なく上り行きける時、ダデラス斧を揚げて丁と棧架の吊繩を絶ち斫りつ。

バアヂックスは眞逆樣に、數十丈の簷より斷崖の下に落ちて微塵に碎けんとせしが、那の時早し、アシーナの女神は彼れを憐じて一羽の鷓鴣と化す。鷓鴣はそのまゝ飛んで彼方の丘に去り、おのが好める林の中にてその生を送る。今も夏風涼しき頃、森や牧場や川邊の葦間に彼のバアヂックスのその友鳥と共に鳴くを見るべきなり。

(二)

迷宮

さる程にアゼンスの市民は此の事を聞き、若きバアヂックスの不幸を哀み、デダラスが卑怯の行爲を惡みて激すること甚し。さてデダラスを捕へて死に刑せんは當然なりしも、又想へば、彼等の家屋什器を始めデダラスの爲めに便利を得たること限なければ、流石に之れを殺すにも忍び

す、遂にアゼンスより放逐して再び歸ることなからしむべしと決す。

さて遠島に航海する船ありければ、デダラスは諸道具と一子イカラスとを之れに載せて悄然としてアゼンスを後にしつ。船は陸地を右に取りて海岸に沿ひて行きける程に彼の對岸のトローゼンを過ぎ巖峠つアルゴスをも後にして、南海遙かにクリート島をさして漕ぎ行きつ。

數日の後クリートの大島に着きぬ。デダラスは上陸して直ちにその名を語る。是れより先、クリート島の大王は夙にデダラスが技の精妙なるを聞き居ければ、直ちに王宮に召し、一室を與へて父子を住はせ、アゼンスの時の如く此島にても十分の技を現はさば、重き名譽と厚き恩賞とを與へんと約束す。

このクリート王、名をばマイノスといひけるが、その祖父も同じくマイノスとて往昔ヂュピタアの白牛に載りて遙かの海路を渡り來し小亞細亞の王女ユーローパの一子なり。老マイノスはその知慧萬人に優れ居たりければ、ヂュピタアこれを以て冥府の司法者に補しきとなり。今のマイノス王もその知をさ〳〵祖父に讓らず、加ふるに勇武にして遠謀あり、衆を治むるの術に熟す。されば追々に遠近の諸島を從へ、その船普く世界に航して珍らしき異國の寶を持ち歸るなど、勢ひ朝日の昇るが如し。是に於てデダラスは悅んで命を奉じ直ちに工匠の長となる。

かくて先づマイノス大王の爲めに驚くべき宮殿を造營す。床は盡く大理石を敷きつめ、柱は盡く花崗石を用ひたり。宮殿の前には黃金の立像數多あり。この像皆舌を動かして物言へり。その宏大にして美麗なること世界に類無し。

こゝにこの島の山中にミノテオルとて前代未聞の怪物棲めり。體は人間にして頭は野牛なり。その性の獰猛なること獅子に讓らず。而も島民は之れを殺すことを肯てせざりき。蓋し山上の諸神より下されたる者にして屠らば必ず神怒を招くべしと思ひければなり。ミノテオルは實に

一國の禍獸にして亦た全島の恐怖なりき。その最も來るを好まざる處に必ず現はれ來り、男女又は童兒を日毎々々に取り食ひぬ。さる程に國王一日デダラスに向ひ、

「汝は今まで數多の奇工を成したるが、とてもの事に彼のミノテオルを國中より取り除く工夫は無きか。」と諮る。デダラス聞きて

「我れに殺せと仰せ候ふにや。」と問ひ返せば、マイノスは頭を掉り、

「などか〳〵。殺さば禍は一入ならん。」

「然らば彼れの爲めに一つの家を造り申すべし。大王彼れをばその家に檻囚したまへ。」

「檻すれば必ず衰死せん。」

「否。家には數多の室あり、彼れ終日歩行せんに尙ほ餘りあるべし。大王時々敵國の捕虜を投じて之れを養ひたまはば、ミノテオルは永く健かにして死することなからん。」

と直ちに工人を集めて驚くべき家屋を建造す。家はさまで廣しとにはあらねど室の數記憶すべからず。數十の廻廊めぐり〳〵て前後の方途を判じ難し。一たび之れに入ればまた出づべからず。デダラス即ち之れを『迷宮』と名づけ、怪物ミノテオルを欺いて之れに入らしむ。果せる哉怪物は入るや忽ち途を失ひ、あせり〳〵つゝ出路を求めて端無き廻廊を往復し、怒り吼ゆる聲日夜屋外に徹しけり。

(三)

飛行翼

幾程も無くデダラス又惡行あり、大いにマイノスの怒りに觸る。されども王は尙ほその宮室を營ませんとの心ありければ、死罪を免して之れを用ふ。

「やをれ工匠、我れこれまで汝が技に對しては名譽を彰はし、又汝が勞に對しては賞を與へたり。されど罪科は決して許すべからず、向後は卑しき奴隸となり、給與なくして役せられざるべからず。」

とて直ちに部下に命じて市府の外門を鎖し番卒を置きてデダラスを逃去することを無からしめ、又港には隊士を遣りて出帆の船を嚴戒す。デダラスはかくて幽囚の身となりしが、復た王の爲めに建築を考案せず、ただその身の自由を得るとに日夜思案を碎きけり。

デダラスとイカラス

扨くて私かにイカラスに向つて云ふやう、「我れこれまでは人の幸福の爲めに技を用ひしが、今よりは我身の利害の爲めに工夫を凝らさざるべからず。」とて、遂は王の爲

めに大建築を設計すと見て夜は私かに一室に籠りて燭火の下に專心刀鑿を揮ひけり。かくて數十日を經て丈夫なる二對の飛行翼を作製す。一對は自身の爲め一對はイカラスの爲めなり。一夜五更の闇黑く人籟全く定まりたる時、父子は彼の翼を蠟もて肩に着け、竊かに庭外に出でて飛行を試みけるに、始めは思ひのまゝにもあらざりしかど結果は極めて有望なり。

デダラスは翌日直ちに多少の改造を施し、革紐の數を加へ羽根をさし更へなどしつゝ、又月光の夜に乘じて試みけるに今度は飛ぶこと甚だ自由なり。即ち相伴ひて王宮の屋根に上り、城門の上を翱翔し、一巡りして彼方の丘の上に下りつ。されど長途の飛行を遂ぐべき準備なかりければ、その夜は曉前にもとの棲處へと歸り來りつ。是れより父子は雨無き夜毎外に出でゝは飛行を練習しける程に一月の終りには空中を行くの安易なること地上を歩むに異らず、高き山を越え、廣き川を横ぎること鳥の如く自由なるに至りぬ。

遂に二日の曉がた二人は用意を整へて各々翼をその身に附け、空中遥かに翔上りてクリート島の市府を逃れ出でぬ。西の方へと暫く飛び行きける程に、やがて漫々たる海の上に出づ。目ざすは百里のあなたなる以太利のシヽリー島なり。デダラス父子はかねて此の島の事聞き居ければ、彼處に住處を求めんとて西へ〳〵と只管に翔り行きぬ。

翼は極めて輕快なり。大膽なる二人は折からの東風に送られつゝ波より少し上を相前後して進み行けり。かくて漸く午に及びけるに暖かなること常に超えければ、デダラスは後なるイカラスを戒めて、「翼をば常に冷せ、高く勿飛びそ」といふ。されど少年はその飛翔の術に誇り居ければ、遥かに日輪を仰ぎつゝ、彼の白雲を穿つて頭上の青霄に上り行かば如何に樂しからんと思ひてはまた禁ずべからず。

「よし今少し上り行かん。日輪の車を牽く天馬を見んに程はあらじ。あはよくばその馬を御する日の神をも見得べきなり。」とて獨り翼を鼓して中天に上り行きぬ。デダラスは前に在りて之れを知らず。イカラスは忽ちにして雲漢の上に來りぬ。日は漸く近し、光熱は愈々加はりていつしか少年が翼の蠟を熔かしぬ。忽ちにして少年はその身の下降するを覺ゆ。翼はいつしか身を離れたるなり。少年は聲を揚げて父の助けを求めたれど既に晩し、デダラス身を轉じて飛び行かんとせし時、少年は眞逆樣に海の上へと落ち行きぬ。四顧茫々たる海上なればデダラスが神技も如何ともする能はず。只茫然として無情の波を眺むるのみ。デダラス遂に愁然として獨りシヽリーに飛び行きぬ。されどその子を失ひたる悲歎は竟に償ふべからず、彼れはシヽリーにて長くその生を保ちたれど復た前の如き鬼工を現はすこと無かりき。少年イカラスの落ちたる海は今にその名をイケリヤ海と呼ぶなりとぞ。

〔註〕

(1) デダラス(Dedalus)——また Daedalos と綴る。一傳にシヽリーの島王彼のマイノス

の爲めに强迫せられて遂にデダラスを殺しぬと。事傳我が飛驒の工匠に似かよひてをかし。

(2) パアヂックス (Perdix)——デダラスが妹の子なり。

(3) イカラス (Icarus)——また Icalos とも書く。

(4) マイノス (Minos)——老マイノスをマイノス一世と呼び、少マイノスをマイノス二世と稱す。此二人を一つに混ぜる傳家もあり、後のマイノス亦た立法者として有名なればならん。冥府にて老マイノスの司りしは死人に生前の罪業を自白させてその罪を斷ずる役目にて、他に同僚二人あり、前に註せるが如し。

(5) ミノテオル (Minotaur)——Minos-bull (マイノスの牛夫)の義なり。異說(補)に委し。後ちシーシュースに殺さる。

(6) ラビリンス (Labyrinth)——また迷途とも譯す。我が八幡不知(やはたしらず)の類なり。埃及の王家ラビリスの朝に始めて造られたるを以てこの名あり。迷宮は諸國にもあれど、埃及のとこのクリート島のとを最も有名なりとす。

(7) シヽリー (Sicily)——以太利の南にある大島、羅馬神話の事蹟殊に多し。

(8) イケリヤ海 (Icarian sea)——地中海の一部にして、クリート島とシヽリー島の間に位す。イカラスの海に墜ちたる故事は沙翁の「ヘンリー六世」にも引けり。

〔補〕怪物ミノタオル

クリートの王家はユーロパの裔なり。ユーロパ、ヂュピタアによりて二子を生む。マイノス及びラダマンサヽ是れなり。二人とも聰慧にして立法の績あり、死後幽府の判官となる。マイノスの孫マイノス二世機畧あり、マイノス大王と稱せらる。神籠を誇り海神ネプチーンに祈りて犧牲の牛を請ふ。チプチューン雪白の牡牛を贈る。マイノスその美を愛(を)んで殺さず。ネプチューン神力を弄びたるを怒り、件の牡牛をして遽かに獰惡ならしめ、且つマイノスの后ペーシフュー (Pasiphaë) をして之れに懸想せしむ。この牡牛その後英雄ハアキュリーズの爲めに島を逐はれて希臘本土に去りしが(五七頁に見ゆ)その子は即ちミノタオルにして、クリートに留りて一島の禍となる。

後のデダラス

デダラス、クリートに在りし時、后ペーシフェーに勸めてネプチューンの白牛に懸想せしむ。是に於てマイノスの爲めに禁錮せらる。さて飛行翼を作りて海を渡り一人シヽリー島に赴きけるに、國王コーカラス(Cocalus)その技を愛して之れを歡待す。デダラス即ち贖罪の意を以てアポローの神殿を造營し、彼の飛行器を奉納して生涯用ふることなかるべしと誓ふ。幾程も無くマイノス王、デダラスのシヽリー島に逃れたる由を聞き、兵船を連ねて來り攻む。デダラス逃れんに道なし。コーカラスの王女、謀つてデダラスを浴場に殺す。

琥珀の珠

フェイソン(Phaethon)は日神老ヒーリオスの子、敏捷なる驕兒なり。父が常に金色の車に駕りて翱翔するを見て羨望に堪へず、一日强ひて父に請ひて自ら此の車を御す。日神の車は黃金を鍊りて造れる四輪車にして四頭の駿馬之れを牽く。馬は五體炎を以て包まれ性質極めて狂猛なり。ヒーリオスに非れば御すべからず。されどフェイソンは强ひ

て一日だけの許を受け、揚々として赫奕たる金車に駕し、鞭を加へて蒼穹の常路を馳せしに、四頭の駿馬忽ち先を爭つて相蹕斷し、フェイソン制する能はず。車は忽ち軌道を脫して漸く大地に接近すれば、山頂の樹木爲めに燃えて火を發す。チュピタア地界の危險なるを望み、直ちに雷電を發してフェイソンを打つ。フェイソン忽ちエリダナス(Eridanus)の河中に墜落して行く處を知らず。フェイソンの妹へライアデース(Heliades)之れを悲しみ、遂に化して河上の落葉松となる。少女の涙は葉末の露と落ちて、音なき水中凝つて琥珀の珠となりぬといふ。

一五　後のシーシュース

(一)

城下の盟　是れより先きクリート王マイノス、アゼンスに向つて戰端を開く。兵船數百エジャイナ灣を封じ、アゼンスの商船を燒き、西メガテより上陸して過ぐる所の邦土を蹂躙し進んでアゼンスの城下に陣す。エジュース王防げども支へ難く、アゼンスの危急名狀すべからず。かくてマイノスは使をアゼンスに送り、翌朝大舉して城内に入り火と劒とを以て市民を屠り、民家を燒き、丘上なるアシーナの殿堂をも崩壞すべしと告げしむ。アゼンス王エジュース大いに之れを憂ひ、重臣十二人を率ゐ城を出でゝマイノスと會見す。

「大王よ、かくまで足下のアゼンスを壞滅せんと欲するは何故ぞ。マイノスはあざ笑ひ、

「卑怯無恥の輩かな。愚かの問事、我が憤怒の原を思はずや。我れ往時一子を持てり、アンドローゼオスと云ふ。愛しきことクリートの百城にも換へ難く、貴きこと海上數千の屬島も物ならず。三年以前彼處に見ゆるアシーナの大祭の比武に加はり、アゼンスの勇士盡くに打ち勝ちたり。歌舞彼れが譽れを盛んにし、桂冠彼れが頭を飾りぬ。皆汝等の知る所なり。さるを汝の國王――今恬として我が面前にあるエジュース王――市民士女のアンドローゼオスに追從してその勇を稱せるを嫉み、卑怯にも彼れを暗殺しぬ。或は甲兵を伏せてシーブスに行くの路に要擊せしめたりといひ、或は怪獸と戰はせて殺したりといふ、我れその孰れなるやを知らずと雖も、アンドローゼオスが一命エジュースが毒計によりて失はれたるは爭ふべからず。」

聞いて重臣は言を遮り、

「否々、そはエジュース王の誓て知らざる所なり。エジュースは當時遠遊してサロニック海のあなたなるトローゼンの市府にあり。アンドローゼオス殿

の横死に就ては何事も知る所無し。我等十二人國政を預り萬事を司宰しぬ。横死は即ち事實なれど、そはエジュースの甥なる五十人の殿原が業なりき。比武の恥辱も動機の一つなれど、斯く王子を殺してマイノス大王を怒らせ、大王をしてエジュースを惡ませ、エジュースをアゼンスより除きて、王位を己れ等が手に奪はんとの奸策に他ならず。」

マイノス靜かに、

「さらば汝等の言ふ所の一々誠なるを誓ひ得るか。」

「肯てアシーナの神に誓はん。」

「いで、さらば我が宣言する所を聽け。アゼンスは我が最愛の寶を奪ひたり。再び得べからざる寶を奪ひたり。我れはその賠をアゼンスに要求す。アゼンス亦たその最愛最重の寶を我れに獻せざるべからず。我れは之れを受けて我が子の害せられたるが如くに害せんと欲す。」

「あはれ酷なる宣言かな。さはあれ道理には抗し難し。大王の求めたま

ふ最愛最重の寶とは何ぞ。」

マイノスは點首きつゝ、

「いでアゼンス王に王子ありや。」

エジュースは聞いて顏色を失ひぬ。サロニック海のあなたなるトローゼンの王女の手に最愛の一人子の托せられてあるを想ひたればなり。されども老臣は之れを知らねば、對へて言ふやう、

「悲しい哉、王は子といふものを持ちたまはぬなり。但し五十人の甥あり、城中に寄食し己等の一人の王位を嗣ぐ日あらんを期待せり。我等の誓言せし如く王子アンドローゼオス殿を殺したるは彼の殿原にて候ふなり。」

マイノスは冷然と「その輩の事は我が關する所にあらず、汝等の好む如くに處して可なり。我が求むる寶とは是れにあらず。今より毎年薔薇の花開く春、汝等の最も愛重する公子七人と最も稱譽する處女七人とを選んで船に搭じて我れに貢進すべし。我れクリート王マイノスが求むる償ひは

是れなり。汝等一度なりとも之れを缺き又懈怠せば、我が軍は直ちにアゼンスの城下を壞り市府を赤土とし壯丁を屠殺し、婦人幼兒を奴隷とせん。」

「王よ我等肯て命を聽かん。そは二の禍のうち輕きものなればなり。されど試みに告げたまへ、七人の公子と七人の處女とを得て如何にせんとしたまふにや。」

マイノス應へて「されば、クリートに迷宮といふ館あり。その類の館世に見るべからず。數百の房室、數千の廻廊紛糾綜錯して、一度これに入れば何人も出づる能はず。我れは七人の公子と處女とを獲て此の迷宮に入らしめんと欲す。」

「饑ゑて死なしめんが爲めか。」

「否、怪物ミノタオルに食はしめんが爲めなり。」

エジュースも老臣も整しく面を掩うて哭泣しぬ。かくてマイノスに別れて城に還り、アゼンスを救ふべき條欵の殘忍狂暴なる由を人々に告ぐれど

人々も今更力なく、全市の滅ぶるには替へられず、姑く數人を送つて兵を解かしめんと議を定む。

(二)

七少年七少女 マイノス、クリートに還りて早や數年を過ぎぬ。待たぬ薔薇の花開きて、春毎に七人の公子と七人の處女とは帆影黑きアゼンスの一船に載せられてクリート島に送られつ。悲歎と恐怖とはアゼンスの家々に往來し皆手を揚げて丘上なるアシーナ神を祈り、「あはれ大氣の大女神いつまで斯る恥辱を忍ばせ給ふや。」と且つは祈り且つは口説きぬ。

斯りける程に、海のあなたなるトローゼンの嬰兒は早や一人の若者と成長し、シーシュースの名は勇膽剛氣の武功と共に千人の口に證せらるゝに至りぬ。途に父王エジュースを尋ねてアゼンスに來る。エジュースは絶えて生死の消息さへ無かりし一人子に曾ひその物語を聞きて狂するが如く、そのまゝ己が側に置きて人々にその由を知らしむれば、官民擧りて之れを慶し。

儲位の王子の英武絶倫なるを悦び祝せぬ者も無し。

春は又來りぬ。黑き帆の船は解纜の準備を急げり。龕獷なるクリート島の兵兒は街上を横歩せり。マイノス王の傳令使は戸毎に立ちて、咀の如き聲に叫んで曰ふ、

「殘るは三日也。汝等アゼンス人、速かに犧牲を擇んで大王に貢すべし。」

街といふ街、家といふ家の戸はこの聲と共に盡く鎖され、何人も出入すると無し。皆頰を蒼くしつゝ今歲の悲愁の誰が家に落つべきかと憂慮に日をぞ送りける。されどもシーシュースは曾てその事を知らざれば、つや〳〵不審に堪へず問うて曰はく、

「何事ぞ、斯く全市の有樣の變れるは。クリート王我がアゼンスに對して如何なる權利かある。その貢物とは何の意ぞ。」

老王エジュースはシーシュースを側に呼び、涙を揮つて、マイノスとの戰の窮せる事、講和の條件として年々云々の男女を送らざるべからざる事を告げ

知らせ、「我兒よ、また言ふなかれ。全市の破壞せらるゝに比ぶれば數人が生命は物ならず。」といふ。

シーシュースは大いに驚き、「父上よ、只一言を許したまへ。アゼンスはクリートに朝貢すべからず。我れは自ら件の男女に加はりて彼の島に押し渡り、怪物ミノテオルとやらんを退治し、尙ほマイノスをも懲らしてん。」

エジュース慌忙てゝ押し止め、「あゝ何ぞ無謀なるや。ミノテオルの棲處に入りたる者は曾て復び出でたること無し。記憶せよ、汝はアゼンスの衆望を負ふ身なり。かゝる危險を冒すべからず。」

「アゼンスの衆望を負ふ身とや。さらば彌々行かざるべからず。行くより他には道なきなり。」とてエジュースの止むるをも聽かず、直ちに退いて出發の準備をぞ急がせける。

三日の後ち、全市府の少年少女はクリート島に赴くべき運命の闇を探らんとて、例の如く皆市場に集まりぬ。闇を盛りたる黃銅の器二つは老エジュ

ース王とクリートの代官との前にあり。一つの器には市内の少年の數に等しく珠を盛り、他の器には少女の數程の珠を容れたり。中に黑きこと椹の如き珠各々七個あり。

さて少女の眼を蔽ひて一人〳〵件の器に手を差入れて珠を取らしむ。黑きを取りたる七人は港に待てる黑き船に乘りてクリートに行かざるべからず。次ぎに少年も同じく珠を探りぬ。斯くて黑き珠を取りたる公子六人に及びたる時、シーシュースは急ぎ驅け出でゝ大聲に呼ぶやう、

「止めよ〳〵。はや闇を探るを止めよ。我れはその第七の少年なり。いざ黑き船に乘りて共に出航せん。」

是に於てエジュースを始め數千の市民は皆一行を送りて港に到る。六人の公子七人の處女皆龍鍾として歩むに堪へず。されどシーシュースは獨り昂然として少しも恐れず、老王エジュースを顧みて、

「父上我れは必ず還るべし。」と云へば、

「おゝ、我れもまた之れを祈らん。この船の還らん時、黑き帆の上に白き帆を張りて內海に入らば我れは汝の生還を知らん。黑き帆のみを見ば我れは汝の死を知らん。」

船はやがて纜を解きぬ。追手の北風は黑き珠の如くに帆を張りて船は一直線に波を破りぬ。七人の公子と七人の少女とは死の彼岸なるクリート島に向つて進み行きぬ。

(三)

王女の情

船クリート島に到着しければ一行は上陸し、兵士に率ゐられて直ちに獄舍の方に歩を徙しぬ。此舍に一夜を明して、明くれば例の如くミノテオルの迷宮に投ぜらるゝ豫定なり。はや恐怖の機を過ぎたれば彼等も今は泣哭せず、面は愈々蒼く唇は愈々固く、慘としてクリートの街衢を歩めり。右をも左をも見るもの無し。家々の窓は爲めに開きて皆一行を見物す。

「あゝ勝れたる若者哉。憐むべしまたミノテオルの食となられん。」と數人が言へば又數人、「揃ひも揃ひて美しき處女なり。あのまゝ迷宮に行かしむるは惜しからずや。」など思ひ〳〵に評語す。やがて王城の下を過ぐ。マイノスは王女と共に城門近くに出でゝ之れを觀る。王女は名をアリアドニーとて、島内に並ぶ者無き美人なり。

「見よ、勝れたる若者ならずや。」とマイノス言へば、アリアドニー、

「ミノテオルに與へんには餘りに勝れて侍るなり。」

「然なり。勝れたる程こそ善けれ。されど尚ほ一人として御身の兄アンドローゼオスに比すべき者無きなり。」

王女は俯して復た言はず。たゞ恍惚として七人の中なるシーシュースを眺め、心の中に曾て斯ばかりの美丈夫を見たること無しと思ひぬ。丈高く、容優美に、眼涼しく、歩武堂々たる有樣もとより此のクリートに類を見るべからざるなり。

王女はそゞろ戀風に襲はれてその夜は少しも眠る能はず。明くれば怪物に殺さるべしと思へば悲しきこと愈々限り無く、如何にもして助けんものと只管思案を碎きけり。斯くて薄明の空白むを待ち、王女は起き出でゝ密かに彼の獄室に赴きつ。さて獄卒に命じて門を開かせ闇き牢舍に入り見れば、彼の七人の少年と少女とは一房の地上に座してあり、全く希望を失へる樣ならず。王女はシーシュースを側へに招きて心の程を告げ、夜もすがら案じ出したる一計を小聲ながらに通ずれば、シーシュースはその好意を謝し、我れもミノテオルを殺したらんには御身をアゼンスに伴ひて永く共に棲んと約束す。王女則ち一口の劍を渡し、是れ無くては怪物を殺さんこと難かるべしとて外衣の下に隱さしむ。さて言ふやう、

「こゝに又絹の絲球あり、御身迷宮に到らば絲の一端を門口の石に結び、入るに隨ひてこの絲を解きたまへ。怪物ミノテオルを殺して後ちその絲を傳ひて歩まば容易く門口に出でられん。妾はこれより御身の船に出帆の

用意を命じ、また御身を迷宮の前に待たん。」

シーシュースは又重ねて王女に謝し、必ず王女をアゼンスに伴ひて妻とせんと誓ふ。アリアドニーは悅びつゝ遙かにアシーナの神に祈りを捧げ、急ぎそこをば立ち去りぬ。

(四)

ミノテオル

朝日は程なく海上より出でぬ。城中より一隊の歩卒來り、一同を率ゐて迷宮に赴かしむ。シーシュースの隱し持てる劍と絲球とは幸ひに發覺せず。歩卒は七人の公子と七人の處女とを導きて彼の迷宮に入り、廻り廻れる廊殿夥多を左右に折れて、前後も東西も知られざる處まで率き行きつ。斯くて一同をそこに殘し、豫ねて案内知れる間道により歩卒は匆々に出で行きぬ。年々の犧牲のミノテオルに取り食はれたるは皆斯の如き法なりしなり。

「いざ我が側に集まりて、鄕國アシーナの神を祈るべし。我れ必ず汝等を

救はん。」

シーシュースは一同を勵ましつゝ彼の劍を拔きて自ら前頭に進み行きぬ。十一人の少年少女は手を揚げてアシーナの神を祈りつゝ之れに隨ひぬ。

されど數刻の間聞として何の聲も無し。目に觸るゝものはた狹き兩側の高壁と遙かの上の靑空とのみ。物無く聲無きは却て恐怖の念を强からしむ。處女は遂に得堪へずして地上に伏し面を掩うて飲泣しつゝ、

「あはれ怪物、早く來りて命を取り、この恐懼を終らせよ。」

といふ。

さる程に日は漸く傾きぬ。忽ち低き號聲を遙かの距離に聞く。聲は次第に近づきて怖ろしき響をなしぬ。

「彼れなり〳〵。鬪の時來りぬ。」

シーシュースは武者振しつゝ一聲强く「應」と呼號す。迷宮の四壁は爲めに震動し、餘波屋を破りて遠く丘山に反響しぬ。ミノテオルは之れを聞き、咆

哮の聲愈々劇しく刻々こなたに向ひて進み來る。

「いざ！」

シーシュースは凜然として前進しぬ。七人の處女は共に叫びの聲を揚げつゝ健氣にもその最期に面せんとす。六人の公子も齒を噛み拳を握りつゝ必死を期して進み行きぬ。

既にしてミノテオル前頭に現はる。咆哮の聲耳を聾せんばかり、シーシュースを目懸けて蹤らに襲ひ來る。その丈人間の二倍もあるべく頭は牡牛にして、双角劍の如く眼は炬火と怪まれ、口は獅子よりも大なり。砂煙を揚げつゝ猛然として走れるが故に軀體の下部は見る能はず。シーシュースの劍を提げ恐るゝ樣無く進み來るを見て侮り難しとや思ひけん頭を低く身構へし、咆哮の聲全屋を震はせつゝ砲彈の如くに飛び來るを、シーシュースひらりと避けつゝ劍を振ひて横さまに怪物の一足を斬り落す。

ミノテオルは轟と地上にうち仆れぬ。咆ること更らに甚しく角を掉り

蹄を飛ばして凄じく暴れ狂ふを、シーシュースは飛びかゝりて其の心臓を刺し、素早く退りて死物狂の一擊を避く。鮮血宛ら炎の如く、ミノテオルは七轉八倒しつゝ、遂に仰樣に息絶えけり。

少年少女は、シーシュースの足下に驅け寄りつゝ聲々に感謝の辭を呈す。さて早や日沒に及びければ、いざとばかりシーシュースは彼の絲をたどりて迷宮の出口に先導す。廻廊の曲折極めて多く大小數百の房室に出入し、夜半に及びて幾かにもとの出口に出づ。

クリートの家々は月光を浴びて寂として聲無く、今朝の港は黑き船を浮べて彼方にあり。而して迷宮の門は廣く開かれ美しき王女アリアドニーその側に立ちて一行を待てり。

「風も良し、海も穩かなり。船子もとくに用意せり。」と小聲に告げてシーシュースの手を取り、人々を導きて港の方に急ぎ行きぬ。斯くてその日の曉一行は既に遙かの沖合にあり、艙に立ちて顧れば、クリートの高山は朝の霧

にこめられて漂渺として水か空かの間に見ゆ。

さても島王マイノスは曉の夢安からず床を離れしが、シーシュース以下の安全に迷宮を出でたりとは思ひもかけず、却て最愛の王女の見えざるを聞きて驚くこと大方ならず、必定山賊の奪ひしならんとて急ぎ隊卒を派して島内の山林を盡くに搜索せしむ。何ぞ知らん、姫はシーシュースの船にありて曾て知らぬ幸福の時を送りつゝあらんとは。

さる程に邏卒は數日の間隈無く搜索したれども遂に何等の手懸りも無く歸りてこの由を王に報ずれば、王は愁然として面を掩ひ、

「嗚呼我れ遂に一の寶だに無し。」とて泣き悲むこと限り無し。

こゝに又アゼンス王エジュースは日毎に海岸の小高き岩に上りて沖を眺め、漕ぎ來る船を注視しけるが、遂に彼のシーシュース以下の乘りたるアゼンスの一船を遙かの沖中に認め得つ。されども一行は餘りの喜悅に、白き船を掲ぐるの約を忘れ居たりければ、王の落膽は名狀すべからず、

「嗚呼、吁嗟、我が兒また殺されたるか。」とて我れを失ひて前なる海に墜ち、そのまゝ溺れてぞ死しにける。これより此の海をエージャン海と呼ぶ。

シーシュースは歸りてアゼンスの王位に上りぬ。

〔註〕

(1) メガラ(Megara)――グリースの地頸部、コリンス灣とサロニック灣との間に在り。

(2) アンドロゼオス(Anthrogeos)――またアンドロゼオースとも讀む。

〔補〕

後のアリアドニー

アリアドニー(Ariadne)は約の如くシーシュースの妻となりしが、後ち事を以てサイクレーズ群島中の最大島なるナキソス(Naxos)といふに棄てらる。されどその後ちまた酒神バッカスに慕はれてその妃となり、七星を飾りたる冠を受く。この冠アリアドニーの死後天に挂りて七宿の星座となる云々。

七星につきて他の物語あり。

七星　月神ダイアナに仕ふる姉妹七人のニムフありき。巨神アトラスの女にして獵に長せしが、一日森の中にて獵夫オリオン(Orion)に認められ走りて逃れけるに、オリオンその美を慕ひて追ふこと急なり。姉妹聲を放つて月神に救を求む。月神姉妹を化して七羽の鴿となし上天に飛翔せしめ、再び化して七宿の耀星となす。プリーヤヂス(Pleiades昴宿)是れなり。後ちトロイの大戰の時七星中の一星トロイ城陷落の狀を觀んとて星座をすべりて城内に下降す。髮髮毳々として背後に靡き、トロイ城の燒くる猛炎の光に反映して光景轉た凄し。この星彗星と呼ばれ、復た昴宿の座にかへらざりき。獵夫オリオンも死後昇天して星宿に列す。獅裘を纏ひ玉帶を佩び棍棒を手にせる姿のまゝ「オリオン星座」の名を得て、今も彼の六星の後を追ふなりとぞ。

エヂポスの慘劇　ケドマスの子孫に災殃絶えざりし事は第九章の補に說ける如くなるが、中にも最も悲慘なるものをエヂポスの悲劇となす。

始めケドマスとハアモニヤとの間に生まれたるポリドラス(Polydorus)の孫ライアス(Laius)シープス地方に王たり。然るに箴言に彼れはその子の爲めに殺さるべしとありしかば大に驚き、王妃ヂョーカスタ(Jocasta)にも近づくこと無かりしが、一日爛醉の餘王妃遂に朶みて一子を生む。ライアス悔ゆれども及ばず、妃に命じて之れを殺さしむ。されどもヂョーカスタは嬰兒を殺すに忍びず、奴に命じて之れを山中に棄てさす。奴嬰兒を程遠き山中の樹枝に掛けて歸る。時にコリンス王ポリバス(Polybus)の牧夫某之れを發見し、嬰兒を抱いて城に歸るに、ポリバスの妃ペリベーア(Periboea)子無きを以て之れを養ひ、名をエヂポス(Œdipus)を呼ばせ鞠育措かず。エヂポス性穎悟にして文武の技に秀で、遂に一州の誇りとなる。然るに同族の青年エヂポスの幸運を嫉み、窃かにエヂポスに諷するに王の實子にあらざることを以てす。エヂポス驚き疑ひて之をペリベーアに問ふ。ペリベーア秘して實を告げず。エヂポス疑念に迷ひて遂にデルファ

イに赴き巫女に諮れば、箴言にいふ「ゆめ〳〵家に歸ること勿れ。歸らば汝の父を弑して汝の母と婚せざるべからず」と。エヂポス聞くより大いに怖れコリンスに歸らず、直ちに逃亡してベオチヤの方へと走る。かくて兎ある狹路を過ぐる時輕車に乘りてこなたに來るライオスの主從に遭ふに、彼れ傲然としてエヂポスに路を避けよと命ず。エヂポス無禮を怒り、互に父とも子とも知らずして決鬪するに及び、ライオスの主徒遂に殺さる。エヂポスそれよりシープスの市に入るに、折しもシープスの近郊に不思議の怪物あり、スフィンクス(Sphinx)といふ。頭は女子の如く、體は狗の如く、尾は蛇の如く、爪は獅子の如くにして翼あり。女神ヂュノー、ゲドマスの子孫に禍せんとて送りたるものなり。この怪物路上に据して行人を止め、その謎語を解かしむ。謎語に曰はく、朝は四脚にて歩み、午は二脚にて立ち、夕べは三脚にて行く動物は何ぞやと。而して行人解く能はざるときは之れを殺し、解くものあらば自ら死せんといふ。市民スフィン

クスの爲めに殺さる者數を知らず。このシープスは國王ライオスの横死以來その妃ヂョーカスタの兄クリーオン(Creon)代りて一州を支配せしが、スフィンクスの殃を憂ひ、遠近に布告し、彼の謎語を解きたらん者には王位とヂョーカスタとを與ふべしと令す。エヂポス即ち進んでスフィンクスを見るや、言下に釋いて曰はく「是れ人なり。幼時は歩むに四足を以てし、中年は二脚にて立ち、老後は杖を用ふ」と。スフィンクス自ら壑に投じて死す。是に於てエヂポスはシープスの王位に上り、先王の妃にして其母なるヂョーカスタと婚し二男二女を生む。エヂポスは賢明の王にして民を愍み頗る治績あり、州民太平を謳歌せしが、冥慮の悲運は遂に免るゝ能はず、一とせ國内に大疫病あり、デルファイに赴きて神慮を伺ふに、先王の殺害者を追放せざれば疫癘息むべから

スフィンクス

ずとあり。エヂポス實にもとて親ら之れに當りて鋭意下手者を搜究しけるに、件の大逆を犯せし罪人は取りも直さずエヂポス自身にして、剩へ母と知らずして婚したる事まで明瞭となりぬ。於是妃は慚恨の餘りに自害し、エヂポスは白日を見るに堪へずとて双眼をくりぬきて盲となり、季女アンチゴネ(Antigone)の肩にすがりてシーブスを出でて流浪す。かくてコロナスの附近に來るにフェーリーズの神林あり、エヂポス此處をその死處と豫知し、使を送りて舊友シーシュースを招く。シーシュースの來着するや、エヂポス我れは斯く〳〵の場處に瞑すべしとて、アンチゴネの手を離れて自ら數十歩のあなたなる豫言の場所に坐し、靈魂永くこの土を護らんといふや否や、大地忽ち空洞を生じてエヂポスの姿地中に消滅す云々。これ希臘の悲劇詩人ソフォークリースが三部曲"Œdipus Tyrannus" "Œdipus Coloneus" "Antigone"の題材となりし有名なる傳説なり。

古英雄と新英雄

前々の章に説きたるプロミシュース、エピミシュースを始め、デューカリオン、ケドマス、バアシュース、バアキュリーズ、マイノス、シーシュース、メレーヂャア等を稱して古英雄(*Older Heroes*)と云ふ。下の六人もまた古英雄に列せらるる。

(一)エヂポス

(二)ヂエーソン——前章に補説せり。

(三)ピーリオス(Peleus)——セッサリー地方の王にして、トロイ戰爭の英傑アキリースが父なり。

(四)ピーロップス(Pelops)——ヂュピタアの孫なり。父に殺され、エスキュレピアスに助けられて蘇生す。若干の功業あり。

(五)カストル(Castor)——ヂュピタアとリーダ(前の頁參照)との子、馬術に長ず。

(六)ポラックス(Pollux)——カストルと双生兒にして死後共に列星となる。

さて新英雄(*Younger Heroes*)とは、シーブス戰爭、イロト戰爭、ユリッシーズの漂泊、エニアスの冒險等に夥伴となれる諸英雄なり。下に略説す。

シーブス戰爭

エヂポス死して後ち、その二子エテオクリーズ(Etoocrès)及びポリナイシーズ(Polynices)一年づゝ交代に王位に上らんと約し、エテオクリーズ年長を以て先づ即位す。然るに一年の後尚ほ位を弟に讓らざりしかば、ポリナイシーズその友なる六人の英雄と結びてシーブスを攻む。ポリナイシーズの岳父アルゴス王アドラスタス(Adrastus)アドラスタスの妹婿アンフィアレーアス(Amphiaraus)カリドンのタイヂュース(Tydeus)アカヂヤのバアセノフェアス(Parthenopiaeus)アルゴスのケパニュース(Capaneus)同ヒッポメドン(Hippomedon)これなり。是れを『シーブス攻めの七勇士』と云ふ。始めアンフィアレーアス、シーブスは、ヂュピタアの殊寵ある市府なれば、侵すに必ず不利にして、アドラタスの外に生還する者無かるべしといふ豫言者の箴を聞き居ければ、極力之れを止めしも聽かず、遂に軍に從ふ。攻むるに及びて果して利あらず。或はヂュピタアの雷火に打たれ或は意はぬ不覺を取りて、アンフィアレーアス以下五人皆相次で戰死す。ポリナ

イシーズ則ち敵王エテオクリーズと一騎打の勝負をなし相刺して斃る。斯くて戰は一度終結せしが、その後十年を經て攝の七勇士の子七人同盟して報復の兵を擧げ、遂にシーブスを陷れて赤土となす。此の七人を總稱してエピゴニ("Epigoni")と云ふ。有名なるエスキラスの悲劇は此のシーブス戰爭を主題とせるものなり。

トロイ戰爭兩軍の家系

ホーマアが大叙事詩『イリヤッド』に歌はれたるトロイ戰爭は、希臘神話中掉尾の大活劇にして、小亞細亞、希臘、以太利及びその群島のあらゆる英雄を一處に會せるのみならず、オリムパス山の諸神さへも陰に二派に分れて兩軍を援くるなど先史時代希臘人の想像を最も完全に顯はしたる大規模の物語なり。而して又一面より見ればソフォークリーズ以下希臘悲劇の根本精神たる運命說即ち因果律の最も複雜に混淆せる一大事例ともいふを得べきを以て、こゝに先づ戰爭に關係せる敵身方の主なる家族の系統を略說すべし。

(一)ダアダナス系統(トロイ)――トロイの王家はもとダアダナス(Dardanus)に出づ。ダアダナスは巨神アトラスの女エレクトラ(Electra)とヂュピタアとの子にして、以太利より希臘のアアカヂヤに移り、又小亞細亞の北西部に移住せりと傳へらる。この地にて河神の女を娶り一子トロス(Tros)を生む。トロイの國名は蓋しこれより出づ。トロスに三子あり、アッサラカス(Assaracus)アイラス(Ilus)ガニミードといふ。(ガニミードがオリムパスに召されて諸神に奉侍せること屢に述べたるが如し。)長子アッサラカス父に嗣いで所領を治めしが、是れ後年羅馬建國の祖として有名なるエニアスの父アンキシーズ(Anchisis)の曾祖父なり。

而して次子アイラスはそれより北方スカマンダアの平地に移りて市府イリアム(Ilium)を創建す。イリアムは即ちトロイにしてホーマアが叙事詩の名『イリヤッド』は之より出づ。市府成るや否やヂュピタアに祈りて市の保護神を請ふ。曉に至り天幕(テント)の前に一大木像の降下せるあり、アイラ

ス大いに悅び奉じて鎭護となす。是れパラス、アシーナ(Pallas は副名)の像にして「パラヂューム」(Palladium)と名づくるものなり。「パラヂューム」のある限り此のトロイの市は滅ぶる事無しと定めらる。アイラス又ネプチューンとアポローとに神助を請ひて域堡を築造す。アイラス歿して一子プライアム(Priam)嗣ぐ。プライアム子女多く國勢大いに張る。トロイ戰爭は此の時に起る。

(二)ピーロップス系統(希臘)――始め小亞細亞フリジャの王にタンタラス(Tantalus)といふあり。ヂュピタアの子にして大いに神寵を受け、方數百哩の沃土と美なる果園とを有して國頗る富み、又時には諸神の陪膳を許されしが、一朝放心に陷りて一子ピーロップス(Pelops)を煮て諸神に薦め、以て全知の力を試みんとす。於是神罰下り、冥府の池中に立たしめられ、飢渴を以て苦しめらる。池には清水湛々たり頭上の樹枝には美果累々たれども、タンタラス手を伸べて水を掬ばんとすれば水はおのづから低下し、又手

を擧げて果實を取らんとすれば枝はおのづから上向しぬ。而して彼の殺されたるピーロップスはマアキュリーの力にてその生を回復せしめてエリスの地に遁れしむ。ピーロップス此地にて王女ヒッポダミヤ(Hippodamia)と婚しアトリユース(Atreus)サイエスチーズ(Thyestes)の二子を擧ぐ。此二子の生涯は屢々悲劇の材となる。蓋しピーロップス、王女と婚する前に王女の父と戰車の競走を行ひてこれに勝たざるべからず、若し敗るゝ時は一命をも棄つべきの約なりき。於是ピーロップスは海神ネプチューンに祈りて駿馬を得ると共に、一方には王の御者に贈賄してその車の轄(くさび)を缺かしめければ、競走に及んでピーロップスは勝ち、王は車壞れて即死しぬ。而もピーロップスは彼の御者に尙多く物取らすべき義務あるを以て御者を捉へて海中に投下す。是れ實に一家因果の根元なり。

ピーロップスの死後アトリユースとサイエスチーズとは先づその庶弟を殺して國を去り、希臘のミシーネに赴きて親族ユーリッシュース(Eurystheus)に

賴る。かくてユーリッシュースの歿後各〻アルゴスの州內にて一地を領せしが、程なく兄弟の間に爭鬪起りサイエスチーズ逐はれて他領に走る。走るに臨みてアトリユースの嬰兒を奪ひ己が子として之れを鞠育し、稍〻長ずるを待つて之れをアルゴスに潛行せしめてアトリユースを刺さしめんとす。而してこの惡計は目的を達せざりしが、アトリユース敵の刺客と思ひて殺したるは己が實子なりし事を知りて復讎の念止み難く、サイエスチーズに伴りの使を送りて和議を唱へしむ。サイエスチーズ即ち二子を將てアルゴスに歸りけるに、アトリユース件の二子を煮てその父に食はしめんとす。この殘忍なる行爲を見るや日輪面を掩うて退行せんとしたる天變より、事直ちに顯はれて兄弟は相咀ひて各〻國を去る。その後ちアトリユース遂に殺されてサイエスチーズ再びミシーネを領す。

アトリユースの二子アガメンノン(Agamemnon)及びメネレウス(Menelaus)はスパルタに遁れけるに、スパルタ王之れを厚遇し、二女を以て兄弟に妻す。

かくてスパルタ王の後援を得てサイエスチーズを殺して父の國を復す。メネレウスはその後スパルタの王位を紹ぎしが、その妻ヘレン(Helen)の事よりして彼のトロイの大戰起るに至りぬ。

(三)エアカス系統(希臘)——『イリヤッド』の主人公は此の系統の英雄にして、その傳叙事詩の大半を占む。エアカス(Æacus)はヂュピタアの子にして母は河神の女なり。母に嗣いでエジャイナ島を領し、二子あり。ペリュース(Peleus)テラモン(Telamon)といふ。この兩人父の庶出の弟を嫉んで之れを殺し脱走す。かくてペリュースは希臘本土なるフシャに赴き、又去つてイオルカスに流寓す。イオルカスの王后ペリュースを慕ひたれども、ペリュースの應ぜざりしを恚り、王に讒してペリュースを殺さしめんとし、却つて殺さる。諸神ペリュースの操守を嘉し、水神ネリュースの女シーチス(Thetis)を以て之れに妻す。シーチス一子を擧ぐ。是れトロイ戰爭の猛將アキリーズ(Achilles)なり。一傳に、シーチスは嬰兒アキリーズを火中に投じて術を

以て不死の體に鍛へんとしてペリュースに妨げられて去りぬといひ、又一傳には冥界に向つて流るゝスチックス(Styx)といふ大河の水にアキリーズを浸してその五體を不死身となせしが、この時アキリーズの踵の邊りを把持せしが故に、此の個處のみは普通の生身として殘りぬといふ。アキリーズは他の英雄の如くカイロンに就いて武技を習得し、遂にトロイ戰爭に從事す。

又ペリュースの弟テラモンの子は彼のアヂャックス(Ajax)にして、勇武アキリーズに次ぎ、アキリーズの巨大なる槍とアヂャックスの廣き盾とは常に兩軍の目標たりき。

(四)ネストル、ダイオミヂース及びオヂッシュース(希臘)——ネストル(Nestor)はネリューズの子にして幼時ハアキュリーズの爲に國破られしを漸次に恢復して之を定めし知慮周密の一將なり。ダイオミヂース(Diomedes)はタイヂュースの子、父はシープス戰爭に死したる勇將なり。トロイの戰爭に加は

り、堡壘に薄りて敵將ヘクトル、エニアス等と闘ひ、竟にオヂッシュースと共に城内に潜入して『守護神像』を城外に搬出して城を陷る。オヂッシュース(Odysseus)は又ユーリッシーズ(Ulysses or Ulixes羅馬名)と稱す。ホーマアが『オヂッセイ』の主人公なり。妻ペネロピーの縁によりてメネレウスの軍に加はる。希臘軍第一の知謀家にして、トロイ城の占領はその畫策によつて成る。『オヂッシイ』の梗概は尚後に述ぶべし。

トロイ戰爭 この大戰爭の原因は女神イーリス(Eris爭鬪を司る)の憤怒にあり。曩にペリュースとシーチスとの婚儀の時この女神忌まれて招かれざりしを怨み、その復讐にとて黄金の林檎を諸神集嘗の席に投ず。而してこの林檎には「最も美しき女神へ」との文字記されければ、ヂュノー、アシーナ、ヰーナスの三神の間に忽ち競爭起りて決せず。ヂュピタア三人の女神をアイダの山に行かしめ、そこにて牧羊の少年パリス(Paris)の判を請はしむ。パリスはトロイ王プライアムの子なりしが、此の子必ずその家國に殃せん

との箴言により母之をアイダの山中に棄てけるに、そこにて成長して怜悧なる牧者となりしなり。三人の女神はおの〳〵パリスの前に現れ、ヂュノーは己れ最も美なりと判せば權威と富とを與へんといひ、アシーナは同じく名譽と功業とを授けんと誘ひ、ヰーナスは誰にもあれ少年の最も慕へる美しき婦人を與ふべしと說く。パリス遂にヰーナスに隨ふ。ヂュノーとアシーナとは大いに少年を怨みしが、ヰーナスは之れを德とし直ちに少年に勸めて希臘の本土に航せしむ。かくてパリスはスパルタ王メネレウスの王宮に客となり歡待を受く。メネレウスの后ヘレン(Helen)は絶世の佳人にしてその名遠近に聞えしが、パリスは見るより戀慕して措かず、同時にヰーナス彼のヘレンの胸に情火を點じければ、兩者忽ち劇しき相思に陷りてメネレウスの不在に乘じパリスが本國イリアム(トロイ城下)に出奔す。

メネレウスはかくと知るより、使をトロイに遣してヘレンを回さしめん

とすれども應せず。於是希臘の諸邦に檄して大いに同盟軍を募る。イサカ島の王ユリッシーズは英武にして智略に富み最も名聲あり。妻ペネロピー(Penelope)が彼のヘレンの從姉妹なる緣を以てユリッシーズに同盟を求む。時にペネロピー始めて出産して一家極めて幸福なる際なりしを以てユリッシーズは從軍を欲せず、俄かに發狂を裝ひ、驢馬と牛とを一つ軛に羈ぎて地を耕しつゝ鹽を蒔く。メネレウスの使者その眞僞を試みんと欲し、ユリッシーズの嬰兒テレマカス(Telemachus)を捕へて不意に鋤の前に置けるに、ユリッシーズ驚きて之れを拾ふ。於是佯狂の事判明し、遂に心ならずも從軍す。かくて身方の勝利を得んには無雙の猛將を得ざるべからずとて、自ら使してアキリーズを勸說す。是より先アキリーズの母シーチス神通によりてアキリーズ從軍せば必ず死すべしと知りければ、強ひてアキリーズを女裝せしめ、サイロスの島王に托して王女の中に伍せしめて之れを隱匿す。ユリッシーズ之れを偵知し、旅商人となりて自

らサイロス島に渡り、遂にアキリーズを發見して相伴ひて軍に赴く。前に擧げたるアヂャックス、ダイオミヂース、ネストル、小アヂャックス等皆來り集まる。即ちメネレウスの弟にしてミシーネの王たるアガメンノンを推して總大將とし、戰艦一千一百八十六隻舳艫相啣んでトロイに進航す。トロイにありては、當時老王プライアムの配下にして同盟の邦國頗る多く、一族一家の中にても長子ヘクトルの如きは英武の材と共に義氣人情に富みて大いに聲望あり、その妻アンドロマキー(Andromache)またよく夫を助けて國威頗る張れり。ヘクトルの他にも有名なるエニアス(Æneas)あり、女神ヰーナスとアンキシーズとの子にして勇氣才略ヘクトルに次ぐ。然るに希臘軍に於ては出發の前に當りアガメンノン過つてダイアナ神の愛鹿(めじか)を殺し、種々の障碍を受けて解纜する能はず、遂に一僧の敎に從ひアガメンノンの女イフィゲニヤを犧に供して月神の怒りを解かんとす。月神之れを憐み鹿の一頭をしてイフィゲニヤに代らしめて之れを

救ふ。イフィゲニヤはそれより尼となりて月神に奉仕しけるとなり。

かくて忽ち順風を得て出帆し須臾にしてトロイの對岸なるテネドス島に着く。時に軍中の弓手にフィロクテチース(Philoctetes)といふ者あり、彼のハアキュリーズの弓を持す。トロイ城の陷落はこの弓の力に由ること多かるべしとの事なりしが、圖らずも毒蛇に嚙まれてその惡臭全軍を苦めければ遂にレムノス島に委棄せらる。かくて艦は直ちにトロイに向つて進發し、ヘクトル、エニアス等の抗戰するを排して全軍盡く上陸す。希臘軍にてはプロテシラウス、ヘクトルの爲めに殺され、トロイ軍にては海神の子サイクナス、アキリーズの爲めに殪さる。希臘軍は船艦の根據地を定め屢々突擊を試むれどもトロイ軍また善く戰ひて勝敗遽かに決せず。於是希臘軍は鋒を轉じて近傍の同盟諸國を荒掠す。アキリーズ常にその先頭たり。かくて九年の長陣を經しが、第十年に至り希臘軍に於て大將アガメンノンとアキリーズとの間に爭鬪起る。『イリヤッド』は即ち

この處より着筆せるものなり。始め希臘の諸將多く俘虜の女を以て妾となす。アガメンノンの妾はアポローの神官某の女なりしが、その父アガメンノンに哀訴して之れを返さんことを請ふ。アガメンノン聽さず、於是大いに怨みてアポローに禱り、殃を希臘軍に降さんことを請ふ。軍中これより疫癘生じて士卒大いに苦む。アキリーズ之れを憂ひ、アガメンノンを諫めて俘女をその父に返さしむ。アガメンノン即ちアキリーズの妾を奪ふ。アキリーズ憤り、艦に退きて復た軍に赴かず。

而して此の大戰の經過はオリムパスの山上にても頗る注意せられしが、希臘軍にして若し屈すること無く攻圍せば城は陷落の外なきの運命なりき。然れども時々の出來事によりて、諸神の往々一方を保護することありければ、恐怖と喜望とは幾回となく交々兩軍の間を往來せり。デュノーとアシーナのパリスを憎みて希臘軍を助けしは論なし、ギーナスは之れに反してトロイを愛護し、且つ軍神マアズを說いて己れに身方せしむ。